



ヨーロッパの 時代とその終焉



19・20世紀から21世紀
へ

小林 道憲

ヨーロッパの時代とその終焉

—十九・二十世紀から二十一世紀へ—

小林道憲

第一章 ヨーロッパビズムの時代

- 1 | —ヨーロッパの世界化と世界のヨーロッパ化—
二十世紀とは何であったか
- 2 | 歴史観の転換
- 3 | 日本の近代化
- 4 | ヨーロッパの近代化とその拡大
- 5 | 非ヨーロッパのヨーロッパ化
- 6 | ヨーロッパビズムの時代

第二章 ヨーロッパの拡大

- 1 | —ヨーロッパ文化の自壊とヨーロッパ近代文明の膨張—
ヨーロッパ文化は何によって成立したか
- 2 | ルネサンスをどうみるか
- 3 | 世俗化の時代
- 4 | 産業革命とフランス革命は何を意味するか
- 5 | 自由主義と社会主義と国民主義
- 6 | ヨーロッパ文化の自壊
- 7 | ヨーロッパの拡大

第三章 非ヨーロッパのヨーロッパ化

- 1 | —ヨーロッパ近代文明の受容とヨーロッパへの反撃—
十九世紀以前のヨーロッパ化
- 2 | 十九世紀のヨーロッパ近代文明の衝撃
- 3 | 自主的ヨーロッパ化
- 4 | 植民地化としてのヨーロッパ化
- 5 | ヨーロッパ主義の系譜

| | |
|-----|-------------------------|
| 6 | 反ヨーロッパ主義の系譜 |
| 7 | ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の交叉 |
| 8 | 非ヨーロッパの近代文化 |
| 9 | ヨーロッパへの反撃 |
| 10 | ヨーロッパからの自立 |
| 11 | 二十世紀後半の非ヨーロッパ |
| 補遺 | ヨーロッパにして非ヨーロッパ — アメリカ — |
| 第四章 | ヨーロッパの終焉 |
| | — ヨーロッパの後退と世界の合一化 — |
| 1 | ヨーロッパの没落 |
| 2 | ヨーロッパの非ヨーロッパ化 |
| 3 | 危機に立つ二十世紀の文化 |
| 4 | 二十世紀の国際関係と近代化 |
| 5 | ヨーロッパの中の共産主義 |
| 6 | 国際化と文化の混在 |
| 7 | 二十一世紀への展望とヨーロッパの将来 |

註
あとがき

第一章 ヨーロッパビズムの時代

—ヨーロッパの世界化と世界のヨーロッパ化—

1 二十世紀とは何であったか

激動の二十世紀も、あと十年余りで終わろうとしている。私達にとって、二十世紀とは一体何であったのだろうか。二十世紀は、動乱と革命の時代であったと言われる。私達は、二十世紀の前半には、世界大戦を二度も経験し、後半にかけては、多くの独立革命や内乱を経験してきた。これらの激しい波乱の背後で動いていたものは、一体何であったのだろうか。

ヨーロッパの後退と非ヨーロッパの抬頭

二十世紀を国際政治の表面だけから見れば、第一に目につく現象としては、何よりも、第一次大戦を境とする二十世紀前半の「ヨーロッパ勢力の後退」があげられるであろう。

それとともにアメリカが抬頭し、このアメリカに対して、第二次大戦中のアジアでは日本が対抗し、第二次大戦以後ではソ連が敵対してきた。こうして、第二次大戦後は、米ソ二大勢力の世界支配が実現されたのである。さらに、その後、この米ソの世界支配体制を切り崩すように、中国が発言権を主張しだし、日本が再びその経済力によって抬頭してきたというのが、ここ二十年程の動きであった。かくて、米ソ二大勢力を中心としながら、ヨーロッパ諸国や日本や中国を加えた五極構造の中で、多くの摩擦や矛盾を起こしているというのが、世界史の現状であろう。

しかし、もうひとつ、特に二十世紀後半の目立った現象として、アジア・アフリカ諸国のヨーロッパ支配からの独立という一連の事件も見逃すことはできない。第一次・第二次大戦を経てヨーロッパ勢力は疲弊し、そのため十九世紀に確立されたその世界支配の力は急速に弱まり、それを見越すように、第二次大戦後、ヨーロッパに支配されていたアジア・アフリカ諸国は、燎原の火のようにヨーロッパから自立していったのである。

このように眺めていくなら、二十世紀の最大の特徴は、(ヨーロッパの後退)と(非ヨーロッパの抬頭)ということになる。この大きな世界史のうねりの中で、多くの動乱や革命が世界史の舞台の上で演じられてきたのである。

ヨーロッパ化の時代

しかし、ヨーロッパは本当に後退してしまっただけだろうか。確かに、国際政治に及ぼす影響力としては、軍事的にも、政治的にも、経済的にも、ヨーロッパは、両大戦を通じて、十九世紀に誰はばかることなく誇っていた世界的優位を失い、その代わり、米ソをはじめアジア・アフリカ諸国が抬頭してきた。だが、アメリカや日本の奉じる自由民主主義にしても、ソ連や中国が奉じる共産主義にしても、また、アジア・アフリカ諸国が構築してきた近代的国家組織など、どれをとっても、すべて、ヨーロッパの十九世紀につくりあげられた政治・経済・社会における思想や組織に源泉をもっている。その限りは、十九世紀以来築き上げられてきたヨーロッパ近代文明は、なお世界を支配し、世界を覆っている。十九・二十世紀は、このヨーロッパ近代文明の世界化の時代であり、世界的拡散の時代であった。資本主義にしても、共産主義にしても、あるいは、その中間形態にしても、十九世紀から二十世紀にかけての世界史は、このヨーロッパ近代文明の拡大という過程の中にあつたとみなければならぬ。アメリカやソ連や日本は、ヨーロッパ近代がつくりだしたこれらの思想や組織を、ヨーロッパを凌駕するまでに実現した国家だったのである。

ヨーロッパ近代文明は、初め、ヨーロッパ諸国の植民地主義的進出という形で世界中にもたらされた。次に、そのようにしてもたらされたヨーロッパ近代文明を、非ヨーロッパ諸国が受容し、これを独自に自己のものにし、これを武器として、逆にヨーロッパに対抗していかうとした。それは、(ヨーロッパへの逆襲)または(ヨーロッパからの自立)という形で現われたが、いずれにしても、そのような作用と反作用の過程を通して、ヨーロッパ近代文明は世界化していったのである。

その意味では、現代の世界史は、十九世紀以来のヨーロッパを源泉とする(近代化)の流れの中にあつた。そのようにして、ヨーロッパ近代文明によって世界中が覆われ、世界が一律に近代の科学技術文明に支配されて、かくて世界

が合一化する過程の中に、十九・二十世紀の現代世界史の大きな流れがあったと言わねばならない。二十世紀は、例えば、第二次大戦においては、自由主義と全体主義の対立、第二次大戦後は、資本主義と共産主義の対立の時代として捉えられたりしたが、それらも、結局、今日みられるような巨大な科学技術文明を世界的に構築していく過程の中にあつたとみることが出来る。現代の科学技術文明こそ、自由主義にも全体主義にも、資本主義にも共産主義にも、ともに通じる現代世界の共通項なのである。この地球を覆い尽す勢いをもった現代の科学技術文明が、どのような過程を通して出来てきたのか、改めて反省してみる必要がある。

トインビーも、『試練に立つ文明』の「文明と文明とのあいだの遭遇戦」という章の最初の部分で、ヨーロッパ文明が世界に与えた衝撃と、それに対する反作用によつてもたらされた世界の合一化ということが、未来の歴史家にとつては、現代を特徴づける最も目立った現象とみられるであろうと言っている。現代世界史は、壮大なヨーロッパ化の時代¹だったのである。

このように、ヨーロッパの世界化と世界のヨーロッパ化²という視点から現代世界史を眺めるなら、現代世界史は、非ヨーロッパがいかにしてヨーロッパ近代文明を自らの伝統の中に受け容れ、どのようにしてヨーロッパ近代文明と同化するかという苦闘の歴史だったとも言える。少なくとも、ヨーロッパの方から見るのではなく、非ヨーロッパの方から見なおすなら、現代世界史はそのような受け取ることが出来る。

その点から言えば、わが国で以前から論じられてきた近代化論³も、新しい視点から吟味しなおすことも出来るであろう。わが国の特に近代主義的立場からの近代化論⁴は、主にヨーロッパの近代を唯一の尺度にして、そこからわが国の近代化の過程での立ち遅れや歪み、後進性や二重構造を問題にするものであつた。このような近代化論⁵が現われてくること自身、ヨーロッパビズム前期⁶のひとつの特徴なのだが、そのような視点だけからの近代化論には、限界があると言わねばならない。そのような近代化論では、逆に、例えば日本などが、ヨーロッパをも追い越して、近代化を果たしてしまうという現象がなぜ起きたのか解けないからである。

また、そのような近代主義的立場に立つ近代化論⁷でなくても、わが国のこ

れまでの「近代化論」は、主に西洋対日本という図式の中でのみ、わが国の近代化の過程の矛盾や苦悩を分析するものが多かったように思われる。そこにも一種の偏りがあると言わねばならない。そのような苦悶や葛藤は、実は、他の非ヨーロッパ諸国にも共通してみられることであって、単に日本だけの問題ではない。わが国の近代史をみる場合にも、もっと世界的立場に立つ必要がある。

私達は、そのような反省のもとに、世界的な観点から現代史の本質を抽出し、あわせて、日本の近代史をも、そのような世界的図式の中に位置づけてみなければならぬ。そして、現代世界史への新しい見方を提出するとともに、「近代化」という現象を世界的に考察してみるべきであろう。来たるべき二十世紀がどのような世紀になるのかという見通しを得るためにも、十九世紀の源流に立ち返りながら、今終わろうとしている二十世紀がどのような時代であったのかを反省してみることは、価値のないことではない。

そのためには、まず、何よりも、近代の歴史観そのものから吟味してみる必要がある。

2 歴史観の転換

ヨーロッパ中心史観からの離脱

どこの文化圏でも、人は、いつも、我身を中心に世界は回り、歴史は進展してきたと考えてきた。昔から、人々にとつて、子供のような自己中心主義を拭き去ることは、容易ではなかった。ヨーロッパ人も例外ではなく、特に、ルネサンス期の地理上の発見以来、十九世紀にかけて、彼らが世界に雄飛するようになってからというもの、世界の歴史はヨーロッパを中心として動いており、ヨーロッパの現段階が人類の達成した歴史的業績の最高段階に到達していると、ひとり合点してきた。

例えば、ヘーゲルは、『歴史哲学講義』の中で、世界史を精神の自由の発展と捉え、それは、オリエンタル的な無自覚な段階から、ギリシア・ローマ的な自覚的段階を経て、ゲルマン的な絶対的段階へと自己を展開し、かくて、ヘーゲルの生きているヨーロッパの現段階で、精神の自由の顕現は最高段階に到達し、ここで完成したと考えた。このような考えは、アジア人としては、どうしてい受

けられることのできない考えであるが、このようなところに現われているヨーロッパ中心史観は、おそらく、当時のヨーロッパの世界的優位を表現するものであったのだろう。

このようなヨーロッパ中心史観は、啓蒙主義を批判的に引き継いだコントにもあり、また、ヘーゲルを批判的に受け容れたマルクスの歴史観にも受け継がれた。実際、コントは、人間精神を、神学的・形而上学的・実証的の三段階を経て発展するものと規定し、それは、ヨーロッパにおいてのみ完全に実現されるものと考えた。また、マルクスは、ヘーゲルの精神史観を裏返して、史的唯物論の立場から、歴史の発展段階を、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的に区分し、歴史は、奴隷制から封建制を経て資本制に移行する過程を通して、階級矛盾を現わしてきたと考えた。しかも、近代ヨーロッパの資本制において、階級矛盾は最高度に顕現しており、それに対して、アジアはなお奴隷制的専制に停滞していると考えた。ここにも、ヨーロッパが世界史の展開の最先端に位置しているという考え、つまりヨーロッパ中心史観がある。これも、なお、当時のヨーロッパの世界史的優位を表現するものだとと言えるであろう。

ところが、二十世紀初頭の第一次大戦を境にして、このヨーロッパ中心史観は、当のヨーロッパにおいて急激に崩れ去っていく。シュペンглаーの『西洋の没落』や、トインビーの『歴史の研究』は、このようなヨーロッパ中心史観の修正に寄与した。ここでは、歴史を構成する単位は文明であり、しかも、各文明は同時代的・相対的な位置しか占めないと考えられた。しかも、各文明は、その中で春・夏・秋・冬、または、発生・成長・挫折・解体・消滅というサイクルを繰り返すものであって、各文明間での進歩や発展、優位や劣位という考えは否定された。ヨーロッパ人の歴史観は、一元論的なヨーロッパ中心史観から、多元論的な相対史観へと、大きく転換したのである。

このヨーロッパにおける歴史観の大きな転換は、おそらく、第一次大戦を境とするヨーロッパの後退を反映するものであろう。第一次大戦の悲惨な経験によって、ヨーロッパ人は、それまでの世界史的優越感を失い、ヨーロッパ文明も他の諸文明と併列する一文明にすぎないとみられるに至ったのである。アジアの一員からみるなら、このような多元論的相対史観の方が、より世界史の真実を伝えるものと思われる。

しかし、この多元史観の方が歴史の現実を表現するとしても、もしも、シュペングラーのように、各文明間での文化の伝播や相互作用を認めなかったなら、特に現代のように、世界の諸文明がヨーロッパの近代文明と出会い、これを受容し、これに同化し、かくて世界が一樣化していった現象を、十分説明することができなくなるであろう。そのため、トインビーは、『歴史の研究』の中で、シュペングラーを修正して、文明と文明の出会い論を持ち出し、世界の合一化という現代の現象も、伝統的諸文明が近代西欧文明と出会う過程として捉え、そこから、この文明の出会いに伴ういくつかの法則を発見したのである。それは、現代の世界史的解明を試みようとする私達にとっても、有益な示唆を与えるものであろう。

歴史をどうみるか

一前世紀のヨーロッパ中心史観のように、歴史をある一定の史観からのみみようとすると、どうしても多くの偏見と事実誤認を免れえない。ヘーゲルやマルクスの歴史観のように、最初に特定の世界観を前提し、その図式から歴史を裁断しようとすれば、当然、その図式にあてはまらない多くの矛盾や例外が出てくる。それを無視したり、無理に解釈したりすれば、歴史を曲解することになってしまう。前提された図式はひとつの先入観となつて、歴史認識の阻害要因になつてしまう。それは、歴史に対する独断と偏見のみを生み出すことになる。歴史というものに果たして法則があるのかどうかということも、もともと定かではない。人間には自由というものが許されており、従つて、たとえ法則を打ち立てたとしても、その法則定立が歴史上でなされるかぎり、人間の歴史にはそれを打ち破る自由もあるから、歴史は、原理上法則通りになるとは限らない。

その点では、トインビーの相対史観においてさえも、もしも、あるひとつのモデル、例えばギリシア・ローマンモデルを他の文明にも当てはめ、それが辿りついた過程と同じ過程を他の文明も必ずとるはずだという前提のもとに、無理に適用しようとすると、すかさず認識を誤ることになる。トインビーの見方にはそういう点がみられるが、そういう見方は避けられねばならない。

歴史認識の目的は、必ずしも、そこからある一定の歴史法則をみつけたすこ

とにあるのではない。歴史の認識は、歴史的現実そのものの中に入って、そこからおのずと出てくるその時代の全体像や本質を取り出すのでなければならぬ。歴史の認識とは、歴史的事実の意味理解なのである。ある特定の歴史観から出発し、歴史的事実を裁断するのであってはならないであろう。

先入観からの脱却

人は、日頃、様々の先入観に囚われている。だが、先入観にいつまでも囚われていると、現実が見えなくなり、かくて、その先入観はいつも現実によって復讐されることになる。私達にとって必要なことは、まず、このような先入観に支配されたあり方から脱却して、醒めた目で現実をよくみることであろう。私達は意外と無知であって、ものごとをよく知ろうともせず、なにかにつけて既成のイデオロギーに拘束されがちであるが、ものごとの正しい認識を得るには、このようなあやふやな既成観念を徹底的に吟味してみる必要がある。そして、既成の観念やドグマを一旦括弧の中に入れて、ことさらにそのものうちへと観入し、その本質を見出していくのでなければならぬ。

先入観から出発し、現実と合わなくなってもこれを固執して、現実の方が間違っていると言ってみたり、無理に現実に合わせてしまうと、その結果、理論の方が現実よりも複雑になってしまったのでは、正しい認識とは言えないであろう。既成の理論にいつまでも取りすがって、現実に対して目をつむってしまおうと、理論はいつも破綻してしまうのである。ものごとの認識は、ひとつの先入観から出発するのではなく、現実から出発するものでなければならぬ。そして、現実にも即した認識が提出されるのでなければならぬ。

私達は、何よりもさきに先入観を捨てて、虚心に事実そのものをみ、そこからおのずと浮かび上がってくる本質を認識しなければならない。歴史の認識においても同様であって、何かある特定の歴史観から出発するのではなく、何よりもまず歴史的現実そのものから出発しなければならない。

一体、十九世紀以来二十世紀にかけて、現代の世界史はどのように動いてきたのであろうか。現代世界史の潮流は、一体どこにあったのであろうか。私達は、いかなる先入観にも囚われずに、現代世界史の現実そのものから、現代世界史への新しい見方を見つけ出し、いかねばならない。そして、〈現代〉が世界

史的に言つてどのような時代であつたかを解明しなければならない。

3 日本の近代化

日本にとって「現代」とは

「現代」といふとき、私達がまず思い浮かべるのは、わが国では、さしあたり、ここ三十年程の間の経済の飛躍的な発展の時期であろう。だが、この経済の飛躍的發展は、単に経済の原理によつてのみもたらされたわけではなく、それを可能にした政治的・社会的条件をも考慮に入れなければならない。つまり、このような経済の発展を可能にするには、何よりも、その自由な競争を可能にする自由主義的経済体制の保障がなければならず、これを保障するには、政治的にも社会的にも保証された自由主義体制がなければならなかつた。第二次大戦後のわが国の自由民主主義体制は、その点で貢献するところがあつたと言えるであらう。その精神文化的方面に及ぼした大きな変化を度外視するなら、この自由民主主義と産業主義の發展は、今日の高度技術社会をもたらす原動力となつたとみるべきであらう。

しかし、そのような現代の構造は、何も戦後から急に始まつたわけではなく、わが国では、遠く明治維新以来、わが国が近代国家として成り立とうとしたときから、すでに始まつていたものである。わが国は、富国強兵策という名において近代産業を育成し、また、そのために政治制度を改め、議會を開設し、国民の声が政治に反映するようにし、官僚機構を改革し、組織だつた近代の国民国家をつくるよう努力してきた。さらに、社会的にも四民平等の原則を立て、国民皆教育を実施し、学問や科学技術一般において、近代化の努力を行なつてきた。

大きな目でみるなら、第二次大戦後の経済の發展や、民主主義体制の確立も、遠くこの明治維新の近代化政策に源泉をもつている。その点では、第二次大戦前と第二次大戦後は必ずしも断絶しているわけではなく、連続した面があつたと言わねばならない。実際、第二次大戦後の経済の發展には、その基礎に、明治維新以来戦前までに築き上げられてきた知識と技術の蓄積があつた。また、今日の民主主義体制も、大正デモクラシーや明治の自由民権運動や国会開設運

動に源泉をもっている。さらに、それは、明治維新の基本原則となった『五箇條の御誓文』にすでに集約されてもいる。ここでは、広く会議を興し万機公論に決すべきこと、そして、それらを通して国力を養うべきことが、基本方針として打ち立てられたのである。

この明治以来の近代史を一貫して流れているものは、近代化の流れであった。近代産業の育成、近代の国民国家の確立、普通教育の実施、科学技術の開発のための高等教育機関の充実など、すべてこの近代化のためにあった。今日の高度産業技術文明に支えられた超近代国家としての日本は、その結果であった。とすれば、私達にとって、現代とは、むしろ、明治以来の近代化の百二十年をいうことになろう。その特徴は、国家、経済、技術、文化、あらゆる面における組織化であった。

外からやってきた近代

しかし、わが国の近代化のこの怒涛のような動きは、わが国内部の必要性から起きてきた動きではない。それは、外からやってきたものである。つまり、西洋の近代文明が大波のように押し寄せ、襲いかかってきたことから出てきた動きであった。西洋の産業技術文明に太刀打ちするには、わが国は、自らがその近代産業技術文明と自由民主主義制度を受容し、無理にでも近代化しなければならなかったのである。

その意味では、一八五三年の黒船来航は象徴的な出来事であった。その衝撃は、単に四隻の鋼鉄でできた軍艦がやってきたということのみを意味したのではない。その四隻の黒船には、むしろ西洋の近代産業技術文明のすべてが、象徴的に集約されていたのである。そこには、想像を絶する西洋の新しい産業構造から、さらに、それを可能にする西洋近代の自由主義的政治構造、近代の科学技術、知識、文化の水準すべてが、集約されていた。当時のわが国の人々が驚いたのは、そのためである。人々は、黒船の背後に、対抗することのできそうもない近代文明の巨大なエネルギーが潜んでいることを、直感的に察知した。実際には、六十年ほどの遅れにすぎなかったのだが、それは、人々の心肝を寒からしめるほどの空恐しいものであった。四つの島に温和に暮らしていた日本人にとっては、それは、はかりしれない衝撃であった。かくて、それ以来、わが

国は、開国と攘夷の間で国論を二分しながら、揺れ動きながら、わずか十五年くらいの間で、近代国家への衣替えを急がねばならなかったのである。

わが国の近代化は、夏目漱石が「現代日本の開化」ですでに語っているように、内発的なものではなく、外発的なものであり、外から覆いかぶさるよう押し寄せてきたものであった。わが国は、むしろ運命的に、西洋近代文明を受け容れざるをえなかったのである。従って、わが国においては、近代化は、欧化つまり西洋化として現われた。そして、この西洋化としての近代化は、わが国にとっては、必ずしも平坦な道ではなかった。それは、多くの矛盾と苦渋を含むものであった。近代化による変容は、政治や経済の面ばかりでなく、文化的面においても、つまり社会生活から世界観や価値観にまで及ぶしかたでなされねばならなかったからである。

この近代化の矛盾のなかで最も大きなものは、おそらく伝統と近代の矛盾、葛藤であったであろう。西洋に学んで、近代産業を興し、国家組織を大変革し、それに合わせて、生き方そのものも変えていかねばならないとすれば、当然、それによって失われるものも少なくはなかった。つまり、伝統的な価値観、倫理観、世界観をそぎとり、いびつにし、変容することなくして、この近代化・西洋化は行ないえなかったのである。明治以来の近代化は、わが国の文化にとって、大きな犠牲を強いるものであった。漱石の言うように、日本人は自己本位性を失わざるをえなかったからである。漱石は、彼自身、イギリス留学などの経験を通して、この矛盾を体験し、一思想家として、わが国の近代化、つまり「文明開化」の陰の面をみたのである。

あらゆる方面における「近代化の時代」は、わが国の内部からのみ見ていては捉えることができない。「現代」がどのような時代であるかということを解明するには、もつと世界的視野に立たねばならないであろう。近代化は、もともと、ヨーロッパの近代文明に源泉をもっているからである。

4 ヨーロッパの近代化とその拡大

ヨーロッパの近代化

ヨーロッパにとつて、「現代」はいつから始まるのであろうか。なるほど、そ

の源泉を、十五・十六世紀のルネサンスに求めることはできるかもしれない。確かに、ブルクハルトの言うように、ルネサンスにおいて、〈世界〉が発見され、〈人間〉が発見されたかもしれない。しかし、今日からみれば、ここにはまだ中世的なものが多分に残っており、巨大な産業技術文明は起きてはいない。ルネサンスと宗教改革に源泉をもつヨーロッパの近世は、なお〈近世〉であって、まだ〈現代〉ではないのである。

巨大な産業技術文明が勃興し、それに伴い、政治、社会、文化一般にわたって巨大な変革がなされたのは、一八〇〇年を境にしてであった。イギリスの産業革命とフランスの自由主義革命は、その象徴的出来事であった。私達にとつての〈現代〉とは、この十八世紀末の産業革命とフランス革命を源泉とし、そこで打ち出された産業主義と自由民主主義を車の両輪にして、その後飛躍的に構造変革を行なっていく時代を言う。それらは、人類史的にみても、農業革命以来、それまで古代・中世・近世と何千年もかかって形成されてきた世界の歴史を大変革させる革命的事件であった。ヤスバースも、『現代の精神的状況』の緒論の中で言っているように、世界史的に私達が共有している〈現代〉の出発点は、ヨーロッパの十九世紀にある。〈現代〉を世界史的観点から捉える場合、私達は、これを起点として考えねばならないであろう。ヨーロッパの十九世紀以後大きくみて約二百年を、私達は〈現代〉と考える。

ヨーロッパ文明は、ギリシア・ローマ文化とユダヤ・キリスト教精神を、ゲルマン的な土壌の上に融合させ、ひとつの独特の文化を生み出した。それは、それらの諸要素がキリスト教によつて統合された有機的な世界を形成した。それがヨーロッパの伝統的世界である。その過程の中には、様々な変遷があったけれども、その根本の構造は変わってはいない。ところが、一八〇〇年前後の産業革命とフランス革命を契機として、このヨーロッパの有機的な構造が崩壊していく。経済や科学技術の力が宗教から離脱し、自分自身で膨張していくに従つて、相対的に宗教の力は弱くなつていった。それがヨーロッパの近代化というものであった。

このヨーロッパの近代化は、経済的には、産業革命によつて代表されるように、物資の大量生産と大量消費の機構を築き上げることに、その目標をおいていた。その生産方式は、それまでとは比べものにならないような急激な生産量

を誇るものであった。政治的には、それまでの封建体制を破壊し、この経済機構を可能にするために、自由民主主義による人民主権の中央集権的組織国家をつくりあげることを目指した。社会的には、身分制度を壊し、自由と平等を重んずる均一な社会をつくりあげること目標とした。教育面では、国民すべてに普通教育を施すようにすることを目指した。これらの大きな変革は、どれも経済の膨張を可能にするための条件であった。しかし、文化的には、近代化は頹落でもあり、その質の低下は免がれえなかつた。また、これら近代化の様々の局面は、どれも、それまでの有機的な社会を壊すものであつたから、精神的には、多くの軋轢を生み出すものであつた。

資本主義の思想も、その後に見われてくる共産主義の思想も、ともにヨーロッパの近代の中で生まれたものであり、いずれも、以上のようなヨーロッパの近代化の過程の中にあるものである。資本主義思想は、物資の大量生産と大量消費を可能にするために、政治・社会・文化、あらゆる分野を変革するものであつたが、共産主義思想も、方法こそ違え、物資の組織的な生産機構をつくつていくためにあらゆる面での変革を行なうという点では、共通した面をもっている。さらに、組織だつた中央集権国家をつくろうとする点でも、均一な社会をつくろうとする点でも、共通した面をもっている。確かに、両者は、私有制を基本とした資本を中心とするか、私有制を否定した共同生産方式でいくかという点に大きな違いがあるが、しかし、目的は同じ近代化にあつた。

いずれにしても、十九世紀以後のヨーロッパを支配した根本の理念は、フランス革命において謳い上げられた「自由」と「平等」にある。このイデオロギーが、十九世紀から二十世紀の世界史を支配したのである。資本主義は、どちらかというところ、自由を、共産主義は、どちらかというところ、平等を強調した。

ヨーロッパ近代文明の拡大

ヨーロッパに最初に生まれ、そして、まずヨーロッパ世界を変革していったこのような自由主義や平等主義や産業主義の力は、巨大な力となって、ヨーロッパ文明の膨張をもたらした。そのため、単にヨーロッパ内にとのみとどまらず、ヨーロッパ以外の世界にも拡大していく運命にあつた。

十九世紀から二十世紀にかけてのヨーロッパ諸国の世界進出は、そのような

ヨーロッパ文明の膨張と拡大の表現であった。それは、何よりもまず、巨大な産業技術文明によって支えられた軍事力を先頭にして、その背後に、自由主義をはじめヨーロッパ近代の価値観、文化を引き連れて、世界中の他の文化圏に進出していった。それは、いまだかつてなかったような巨大な膨張であったから、その結果、今日すでにみられるように、世界中が同じひとつの産業技術文明によって覆い尽くされるという現象をもたらしたのである。この産業主義の進出とは少し遅れて登場してくる共産主義や社会主義の膨張も、基本的には、このヨーロッパ文明の拡大という過程の中にあつたと言えるであろう。

5 非ヨーロッパのヨーロッパ化

ヨーロッパ化としての近代化

他方、ヨーロッパの拡大は、非ヨーロッパからみれば、西洋化、ヨーロッパ化として現われる。非ヨーロッパ諸国は、このヨーロッパ近代文明の抗しがたい力に対して、それを受容するか、排斥するかとの二つの選択に悩みながら、あるいは、ヨーロッパの近代文明を全面的に受け容れ、あるいは排撃し、あるいは、伝統との融合をはかりながら、近代化を推し進めていった。従って、非ヨーロッパ諸国にあつては、近代化はそのままヨーロッパ化だったのである。それは、あまりにも巨大な力であつたから、非ヨーロッパにとつては、大きな苦悩をもたらすものであつた。実際、文化的伝統と近代化との矛盾をどのように調和させるか、非ヨーロッパ的なのとヨーロッパ的なのをどう融合させるかという問題は、非ヨーロッパ諸国にとつて最大の関心事となつた。

このヨーロッパの拡大の非ヨーロッパに対する影響は、例えばロシアでは次のような形で現われた。ロシアでは、十九世紀以前に、ビョートル大帝以来、ヨーロッパの近世文化の輸入が行なわれ、すでにヨーロッパ化は相当程度進んではいたが、しかし、この段階では、まだ巨大な産業技術文明を受け容れたわけではない。ロシアが西洋の産業技術文明を受け容れて、自ら産業革命を興し、自由主義的な政策を打ち出して、へ上からの近代化を行なわねばならなくなつたのは、十九世紀からである。ロシアは、ツァー体制のもとに、ヨーロッパ由来の自由主義と近代産業を輸入し、いち早く近代化つまりヨーロッパ化を推

し進めていった。しかし、それはまた、単に技術や思想だけの問題にとどまらず、社会の根本構造にもかわる問題でもあったから、ツァー体制そのものを揺がさずにおくことはなかった。そればかりでなく、文化的にも、伝統的なスラブ精神とヨーロッパ由来の近代思想との相克、葛藤を免れることはできなかった。むしろ、そういう異文明との出会いにおける危機を背景にして、ドストエフスキーなどの文学に代表されるように、ロシアの十九世紀文化は、その創造性を発揮したのである。ロシアは、その後二十世紀になって、同じヨーロッパ由来の共産主義思想を受け容れ、ツァー体制を倒して独自の方向をとったが、これも、近代化の路線上にあることに変わりはなく、ヨーロッパ化のひとつの形態であることに変わりはない。

日本がヨーロッパ近代文明の衝撃を受けたのは、ロシアよりもやや遅く、十九世紀後半であった。前にも述べたように、黒船来航で象徴されるヨーロッパ近代文明の襲来は、十六世紀のスペインやポルトガルの来航とは違って、もはや追い返しようのない生易しいものではなかった。自ら近代化をし、西洋の技術を受け容れ、政治社会体制をヨーロッパ化し、力を溜め込むことなくしては、太刀打ちできないほどの力であった。そうしなければ、日本は、おそらくヨーロッパ諸国の植民地化を免れえなかつたであろう。事実、わが国は、結局、多くの紆余曲折の後、ヨーロッパ近代の制度や概念を積極的に導入し、それを文化的伝統と融合させ、近代化、つまりヨーロッパ化を果たしたのである。しかも、日清戦争と日露戦争に勝利を収め、ヨーロッパ列強に伍することができるようにさえなつたのである。しかしながら、ヨーロッパ化、特にその近代文化の受容は、精神的には、多くの苦痛をもたらすものであったから、ロシアにおけるドストエフスキー同様、わが国の漱石や鷗外は、自らこの近代化に貢献しつつも、この日本の近代化、つまり西洋化の虚妄を批判してやまなかつた。むしろ、すぐれた明治近代文化は、ヨーロッパ近代文化と伝統文化との相克の中から生み出されたものであった。

ロシアや日本は、幸いにしてヨーロッパ諸国の植民地になるということとはなかった。ロシアや日本は、自らヨーロッパ文明を受け容れ、それを自家薬籠中のものにし、それを逆に武器として、ヨーロッパ列強に対抗し、二十世紀にはこれに反撃することさえできたのである。ところが、多くのアジア諸国やアフ

リカ諸国は、ヨーロッパ列強の植民地となってしまう。だが、この植民地化という出来事は、ヨーロッパ文明の膨張と拡大のもうひとつの形でもあった。インドなどにおいても、はやいうちからヨーロッパ列強は進出しており、次第に植民地化されていくが、そういう形でヨーロッパの近代の文物は押し寄せ、否応なしにヨーロッパの影響の下に立たざるをえなかった。これも、ヨーロッパ化のひとつの形態であった。しかも、アジア・アフリカ諸国は、そのような形でヨーロッパ近代を受容し、かえって、このことによって、二十世紀後半にはヨーロッパから自立していくことができたのである。

ヨーロッパ化の矛盾

ヨーロッパの近代化は、ヨーロッパ自身が、内発的に自らの伝統文化を打ち壊して、新しい文明を築き上げることによってなされたものだが、非ヨーロッパの場合には、この近代化の要請は、植民地化されるにしても、されないにしても、外からの一種の強制、あるいは運命として押し寄せてきたものであった。だから、この非ヨーロッパの近代化、つまりヨーロッパ化の心理は、屈折した複雑なものであった。

非ヨーロッパにとって、ヨーロッパ近代を受け容れるということは、自分達の価値観や世界観、行動様式、生活様式、つまり文化を形づくってきた旧来の伝統を打破しなければならぬことを意味していた。と同時に、それを完全に打ち壊してしまったなら、自分達の主体性と支柱を失ってしまうことになる。従って、伝統的世界を打破するとともに、それを保存しなければならないという矛盾したものを、ヨーロッパ化の要請は含んでいた。多くの非ヨーロッパ諸国は、どのようにして新しいヨーロッパ文明を自らの伝統的地盤の上に接木するか、融合させていくか、苦闘してきたのである。それは、ヨーロッパ人には理解できない非ヨーロッパ人の苦痛であった。二十世紀は、むしろ、この非ヨーロッパの苦闘の世紀であった。しかも、非ヨーロッパは、そのような苦闘を演じながら、次第にヨーロッパ近代文明を受容し、これを自己のものとして、逆にヨーロッパ自身に反撃していったというのが、二十世紀という時代だったのである。

6 ヨーロッパピズムの時代

現代世界史への新しい視点

このように眺めていくなら、十九・二十世紀の現代世界史を、今までとはまた違った見方から解釈しなおし、叙述しなおすこともできるであろう。十九・二十世紀の世界史は、次のような段階を経て動いてきた。

第一に、ヨーロッパの構造変革。これによって、ヨーロッパは、巨大な産業技術文明をつくりあげていく。

第二に、ヨーロッパの拡大。ここで、ヨーロッパの産業技術文明は、ヨーロッパ以外の世界へと拡がっていく。

第三に、非ヨーロッパのヨーロッパ化。ヨーロッパの拡大は、非ヨーロッパの側からみれば、非ヨーロッパ自身のヨーロッパ化を意味していた。

第四に、ヨーロッパへの反撃。非ヨーロッパは、自らヨーロッパ化するとともに、それを武器にしてヨーロッパに反抗するようになる。

非ヨーロッパは、そういうしかたで、新しいヨーロッパ由来の文明世界へと参入せざるをえなかったのである。

このようにして、世界中がヨーロッパ化するという形で、地球が巨大な産業技術文明によって覆い尽くされたのが、十九・二十世紀の世界史の特徴であった。ヨーロッパ列強の世界進出は、十九世紀の世界史を特徴づける顕著な現象であったが、これは、文明的にみれば、そういうしかたでのヨーロッパ近代文明の拡大の過程であり、それは、どこまでも膨張していかうとする近代文明の運命的な現象であった。そして、この列強の進出が、あるいは非ヨーロッパ諸国を植民地化し、あるいは非ヨーロッパ諸国に衝撃を与え、大きな変革、つまり非ヨーロッパのヨーロッパ化という現象をもたらしたのである。二十世紀における共産主義の膨張も、非ヨーロッパのヨーロッパ化という現代世界史の大きな潮流の中にあつたとみるべきであろう。

ヘレニズムとヨーロッパピズム

ひとつの強い文明が世界中に拡大して、他の文明と出会い、これを同化していき、膨張するという現象は、それほど珍しい現象ではない。なかでも特に、

かつての古代ギリシア文明の地中海世界への拡大は、この現代文明によく似た動きをしている。紀元前一〇〇〇年頃から築き上げられてきたギリシア文明も、紀元前四〇〇年頃になると自己崩壊を起こす。それは、ギリシア諸都市国家の自決行為と言ってよいペロポネソス戦争として現われる。そのようにして、ギリシア自身は衰退していくが、しかし、ギリシア文明自身は外へ拡散していく。特にアレキサンドロスの遠征は、他の多くの地中海世界の各地にギリシア文化を輸出し、地中海世界をひとつの世界にしていた。そのような地盤から、積極的にギリシア文化を輸入することによって力をつけてきたローマが登場し、最終的に地中海世界の統一を行なうのである。ギリシアの自壊から、特にマケドニアによる地中海世界の統一を通して、ローマが抬頭してくるこのような期間を、非ギリシアがギリシア化つまりヘラス化していく時代として、十九世紀の歴史家ドレイゼンは「ヘレニズム」と規定した。

ちょうどこれと同じような現象が、十九・二十世紀にも、ヨーロッパを中心として地球大的なレベルで起きたのである。とすれば、このような時代を、世界中がヨーロッパ化していく時代という意味で、「ヨーロッパ化の時代」と呼ぶことができるであろう。近代化の時代と捉えられたり、帝国主義の時代と捉えられたりする十九・二十世紀の現代世界史を、「ヨーロッパ化の時代」として、文明的に捉えなおし、様々な歴史現象を解釈しなおしていくことも可能であろう。しかも、この視点は、現代世界史への新しい見方を提出する点にも、「現代」の世界史的解明を行なうための新しい視野を開くものともなるであろう。

第二章 ヨーロッパの拡大

—ヨーロッパ文化の自壊とヨーロッパ近代文明の膨張—

1 ヨーロッパ文化は何によって成立したか

ヨーロッパ文化が構造変革を起こし、代わりに巨大な産業技術によって支えられた近代文明をつくりあげていくのは、十八世紀末の産業革命とフランス革命を起点にしてであった。だが、もともと、このヨーロッパ文化そのものが成立したのは、いつころからであったのだろうか。また、その成立は、どのようなものを要素としていたのであろうか。

見直されるべき西洋史の時代区分

今日の教科書的な歴史記述では、西洋史をギリシア・ローマから始め、これを古代とし、後、中世、近世と説き進むのが普通であるが、この時代区分は、ヨーロッパ十六世紀のルネサンス期に始まり、十八世紀の啓蒙主義に受け継がれた一種の偏見に根差している。特に、歴史は進歩すると考えた啓蒙主義は、ヨーロッパの近世を、技術においても、文化においても、人間性においても、最もすぐれた段階に人類が到達した時代とみて、それ以前の中世をより劣った時代とみなしたのである。

しかし、すでに、現代文明が必ずしも全面的に礼讃すべきものとは限らず、多くの矛盾を含むものであるということが自覚されてきた今日の状況下にあつては、もはやこのような楽観的な時代区分は通用しないであろう。シュペングラーやトインビーの指摘をまつまでもなく、すでに時代区分においても、ヨーロッパ中心主義と近代中心主義は見なおされねばならない。私達は、むしろギリシア・ローマをひとつの文明として捉え、その中にいわば古代、中世、近世、現代というような区分があると考えるべきであろう。従つて、また、ヨーロッパの〈中世〉から現代にかけての歴史過程も、むしろ、ひとつの文明、つまりヨーロッパ文明として把握されねばならない。そして、その中にまた、古代、中世、近世、現代という区分があると考えた方がよいであろう。

なるほど、ヨーロッパ文明の源泉を求めて、ギリシア・ローマ文明に遡っていくことはできるかもしれない。しかし、ギリシア・ローマ文明はどこまでもギリシア人とラテン民族によってつくりあげられたものであり、それに対して、ヨーロッパ文明はゲルマン諸族によって構築されたものである。確かに、ギリシア・ローマ文明とヨーロッパ文明の間には切り離し難い連続性が認められる。しかし、それらを請け負った種族が違う以上、両文明は文明の種が違っていると言わねばならない。今日のヨーロッパ文明が成立したのは、ゲルマン諸族がギリシア・ローマ文明に接触することによって文明化したときからであり、それはゲルマン民族の大移動あたりから始まるものである。この時期こそ、ヨーロッパ文明にとっての古代なのである。

三要素の融合によって成立したヨーロッパ文化

ゲルマン諸族が三七五年に民族大移動を開始し、ローマ帝国領内に侵入したのは、フン族の西進を契機にしてであったと言われる。しかし、それ以前にも、ゲルマン人達は、ローマ帝国内に傭兵や家僕、奴隸などとして移住しており、時代が進むに従って、その地位も上昇していった。また、帝国の弱体化とともに、彼らは、幾度となく帝国領を脅かし、帝国の崩壊を加速してもいた。彼らは、侵入した帝国内で、自分達の伝統的な生活規範を維持しながら、やがて、また、ローマの文物にも慣れ親しみ、その制度、法、言語、宗教などを次第に受け容れ、これを自らの生活様式に取り入れ、内的発展を遂げていった。ローマ帝国の崩壊とともに各地に独自のゲルマン国家を建国した王達も、その国家運営のために、多くのローマ人を外交官や法律家や書記として登用した。このころからすでに、ゲルマン的なものローマ化と、ローマ的なものゲルマン化は起きていたのである。そのようなしかたで、ゲルマン諸族は、文明化を果たし、次の文化の担い手の資格を得ていった。

このような中から、西ヨーロッパに最初の統一をもたらしたのは、フランク族であった。フランク族は、他のゲルマン諸族がアリウス派にとどまったのに対して、四九八年にローマ人と同じアタナシウス派、つまりカトリックに改宗し、これを王国発展の礎とした。さらに、七世紀前半のアラブ・イスラムの侵入を阻止したフランク族は、カロリング朝の成立を期に、大きな飛躍を遂げ、

特にカール大帝に至って大統一国家を完成するに至った。そして、八〇〇年には、カール大帝は、法王レオ三世から西ローマ帝国の帝冠を授けられ、形式的にはあるが西ローマ帝国を復興した。もつとも、これはどこまでも形式的なものであり、実質は、ゲルマン民族による独自のヨーロッパ国家の樹立であった。しかし、それが西ローマ帝国の復興と称されたのには、なおやはり、ゲルマン民族が文明化し、自らの文化を築きあげるためには、ローマ文明との接触が必要だったことを物語っていると言えよう。

このことは、カール大帝の文化政策に最もよく表現されている。彼は、まだ低い水準にあったフランク王国の文化を高めるために、教育を普及し、イタリアやイングランドから多くの優秀な学者を招聘し、ラテン語とラテン文化を鼓吹し、ローマ時代の諸文献の収集を行なった。かくて、ゲルマンの土壌の上に、古典文化が再び花開いたのである。カロリング・ルネサンスがそれであった。これによって、ゲルマン人はより高い文化を獲得するとともに、独自のヨーロッパ世界をつくりあげたのである。

こうして、ゲルマン人達のキリスト教改宗と、ローマ帝国およびローマ文化の再建を通して、キリスト教精神とギリシア・ローマ文化が、ゲルマン的エトスと融合され、ヨーロッパ文化が成立した。それは、日本文化が、神道的基盤の上に仏教や儒教を融合して成立したのと同じである。その意味では、ヨーロッパ文化は、わが国同様、どこまでも融合文化であった。

ヨーロッパ諸民族は、その後も、フランス、イタリア、ドイツ、イギリスなど諸地域に分かれ、それぞれ独自の性格をもった文化を形づくったが、それにもかかわらず、それらが、ヨーロッパ文化として一単位となり、共通の精神的価値のもとに一されうるのは、キリスト教信仰を共通の精神的支柱とし、ギリシア・ローマ文化を共通の教養とし、これを統合しえたためである。もちろん、キリスト教とギリシア・ローマ文化は、すでに帝制ローマにおいて融合されていたが、それがゲルマン民族に受け継がれ、ゲルマンの風土に根づくというしかたで、帝制ローマ時代とはまた違った形の文化が、ヨーロッパにおいて形成されたのである。その限り、ゲルマン的エトスが、キリスト教とギリシア・ローマ文化によって変容されると同時に、逆にまた、キリスト教とギリシア・ローマ文化の方も、ともにゲルマン的要素によって変容されていったのだ

と言わねばならない。

哲学史に現われたヨーロッパ文化の要素

このことは、最も高度な文化である哲学の歴史の中にも現われている。

ヨーロッパ最初の独創的な哲学者であり、カロリング・ルネサンスの成果でもあったアイルランド出身のヨハネス・スコトゥス・エリウゲナは、その著『自然の区分について』の中で、自然を、創造するが創造されない自然、すなわち神と、創造され創造する自然、すなわちロゴスと、創造され創造しない自然、すなわち可視的世界と、創造もされず創造もしない自然、すなわち万物の究極目的としての神に分け、その神秘主義的世界観を提出した。そして、神は最高度に単一であり、万象を包含し、その本質は私達にとつては不可知であり、これはロゴスを通じて万物を創造したと考えた。従つて、私達の可視的世界は、ロゴスを通じて神の光が個々の万物に発現した現象の世界であり、神の自己啓示であり、自己顕現であり、分散であると考えた。しかも、万物は、また再びロゴスを通じて、創造もされず創造もしない究極の神のもとに帰り、私達もここで神と合一し、やすらう。こうして存在の全き輪が完成する。このように自然は四分されるが、それらは本質的には全く同一のものであるとみなされる。

このエリウゲナの思想は、「万物は神から出でて、神に帰る」という神秘主義の思想の表明であった。この思想は、ゲルマン民族古来の汎神論的世界観の土壌の上に、キリスト教の世界創造論と、ギリシア系譜の新プラトニズムの流出論とを、みごとに融合したものであった。ここにも、明らかに、ゲルマン的風土とキリスト教信仰とギリシア的知性の結合というヨーロッパ文化の成立原理の表現がみられる。

すでにエリウゲナの思想にもみられるが、キリスト教の信仰内容をいかにギリシア系譜の哲学によって理解するか、信と知はいかに融合しうるか、という問題は、ヨーロッパ哲学にとつて最も重要な課題であった。

ローマ経由でヨーロッパ人が受け容れたギリシア系譜の哲学は、人生や世界についての原初的な問題を、人間の知性によって理解し、その本質をみてとらうとするところにあった。それに対して、ヨーロッパ人が同時に受け容れたキリスト教信仰の方は、同じような問題を、人間的知解を超える絶対唯一の神の

啓示から解釈し、その本質にまで迫ろうとするところにある。このギリシア哲学の「知性による世界了解」と、キリスト教の「信仰による世界了解」とは、必ずしも相容れるものではないが、ヨーロッパの哲学は、この両者の融合統一をはかることを目標とした。むしろ、このような営みは、すでに帝制ローマ時代のラテン教父達によってなされていたが、ヨーロッパの哲学は、これを模範としながら、新しく自分達独自で問題を掘り下げ、それを通してヨーロッパ人自身の世界観を構築していった。「信ぜんがために知解せよ、知解せんがために信ぜよ」というラテン教父最後の偉大な哲学者アウグスティヌスの言葉がモットーにされたのは、そのためである。これは、もともと、キリスト教信仰とギリシア・ローマ的教養を、ゲルマン的風土のもとに受け容れることによって文明化したヨーロッパ人にとっては、どうしても必要なことであった。

かくて、ヨーロッパ哲学は、キリスト教信仰の内容をギリシア的知性によって解釈しなおし、それでもって、不合理なものを含む信仰を理性的なものによっても理解可能なものにしていく努力として現われた。このことは、ヨーロッパ中世のスコラ哲学においてはもちろん、基本的には、ヨーロッパの近世哲学においても一貫して流れる基本的潮流であった。

ヨーロッパ中世においては、最初、プラトン哲学によって信仰内容を理解しようという試みがなされ、その後、アリストテレス哲学がアラビア経由で輸入されたために、今度はこれによって理解しようという努力がなされる。近世では、これと同じことが、主体の形而上学によってなされたのである。確かに、デカルト以来、近世の哲学は、思惟する自我をその出発点においた。しかし、最終的には、これを通して、やはり、神および神によって創造された世界を知ることとその目的をおいていた。このことは、十九世紀前半のヘーゲル哲学まで持続される。このように、十九世紀前半まで、信仰と知性の宥和の問題がヨーロッパの哲学の重要問題でありつづけたということは、最初のヨーロッパ文化の成立構造が、このころまでは持続されていたということを表わすものである。

しかも、ここで注目しておかねばならないことは、ヨーロッパ哲学の底流に、エリウゲナから始まって、ベルナルド、エックハルト、クザーヌス、ペーメ、ブルーノ、スピノザ、後期フイヒテ、シェリング、そしてヘーゲルに至る汎神

論、または神秘主義の流れがあったことである。これは、ヨーロッパ文化の基底が汎神論的世界観によって支えられており、それがゲルマン的風土を形づくっていた当のものであるということを表現している。確かに、この汎神論的世界観は、ローマ・カトリックの正統教義からはしばしば異端とされたが、それにもかかわらず、絶えることなく現われてくる。それは、ヨーロッパ文化がヨーロッパ文化として成り立つための基底だったからである。むしろ、ヨーロッパ文化は、正統キリスト教信仰と、ギリシア・ローマ的教養と、このゲルマン的土壌との適度な緊張と宥和・均衡の中で、成立していたのである。

日常生活の中のヨーロッパ文化の要素

このようなヨーロッパ文化の成立構造は、哲学の流れの中にも現われていただけでなく、ヨーロッパ人の伝統的な日常生活の中にも現われていた。教会を中心として、それに寄り添うように家並がひろがるヨーロッパの中世的な村落共同体は、古き良きヨーロッパの象徴である。ここでは、政治、社会、経済、文化が、キリスト教を中心に有機的に営まれていた。しかも、その基底には、農耕牧畜民族としてのヨーロッパ人がもともとっていた古ゲルマンの多神教的風土が、隠されたしかたで流れていた。それがキリスト教そのものの中に取り込まれ、ヨーロッパ独特のキリスト教が生み出されたのである。

それは、例えば、古ゲルマン人がローマに侵入する以前に営んでいた収穫祭が十一月一日の万聖祭になり、太陽の死からその復活を祈る冬至の祭がキリスト生誕祭になり、春分の祭が復活祭になっていったというような事実にも現われている。また、古ゲルマン人達もっていた豊饒多産の地母神への信仰がマリア信仰に変わっていったり、その他、火や金属の神への信仰、道祖神の信仰や医薬の神への信仰が、多くのキリスト教の聖者信仰に変わっていったのも、同様である。聖ヴァレンタインの日も、もとは若者達の恋人選びの祭に由来している。六月二十四日の聖ヨハネの日も、もとは豊穰多産を祈る夏至の祭であった。

ヨーロッパ人の風俗・習慣の中には、ゲルマン的要素がキリスト教の衣を着て転化したものが多い。ヨーロッパ人の生の基底には、ゲルマン的土壌があり、そこにキリスト教信仰やギリシア・ローマ的教養が融合され、それらが、少な

くともヨーロッパ中世までは、適度な緊張とバランスを保っていたのである。それがヨーロッパ文化の基本構造であり、その創造性の源である。

2 ルネサンスをどうみるか

ルネサンスは繰り返された

このように三つの要素の融合によって成立したヨーロッパ文化は、また、絶えずその原点に帰るということよって、再生を繰り返していった。復帰と再生を反復しながら、ヨーロッパの文化史は歩んできたのである。もしも、こういう復帰と再生という歴史のダイナミズムを、広い意味での「ルネサンス」ということができるとするなら、ヨーロッパの文化史は、絶えざるルネサンスによって成り立ってきたと言えるであろう。ルネサンスという概念は、

元来、十五・十六世紀の「文芸復興」を意味しているが、これをさらに拡大解釈することが許されるなら、十五・十六世紀ばかりでなく、ヨーロッパの歴史構造そのものが、一般にルネサンスの繰り返しによって成立していたと言える。

ゲルマン諸族がローマ文明と接触することによって、ヨーロッパ文化の原型は五世紀から八世紀にかけて無自覚のうちに成立したのだが、この時期はまだ、ヨーロッパ文化は、ローマやアラビアと比べても劣ったものであった。しかし、九世紀初頭になると、ゲルマン人達は、自分達の依って立つ場を自覚するに至る。自分達こそ、ローマの再建者であり、キリスト教の正統な後継者であると考え、教会や修道院を建設し、学校をつくり、国家と文化の再建を行なった。

このいわゆるカロリング・ルネサンスは、自分達が文明化した原点を自覚することによって、新しく生きる道を探していくという意味で、ひとつのルネサンスであった。しかも、これは、ヨーロッパ人にとって最初のルネサンスであり、ヨーロッパ文化の最初の開花でもあった。

彼らは、それ以後、絶えずルネサンスを繰り返しながら、自分達自身の文化的同一性を保つとともに、同時に新しい文化形式を生み出していった。そういう意味では、ヨーロッパの中世は、ルネサンスの反復の時代であったと言えることができるであろう。実際、カロリング・ルネサンスを出発点にして、十二世紀にも、再びギリシアの文物の研究が盛んになされる。哲学の分野では、シャ

ルトル学派の人文主義がこの時期に当たる。さらに、それに引き続いて十三世紀にも、大学が創設され、修道会の学問的活動も盛んになって、人文主義的諸研究が隆盛を極める。アリストテレスの哲学が主にアラビア経由で輸入され、それによって、キリスト教信仰の新しい理解がなされるようになったのは、この時期であった。これはヨーロッパ中世文化の最盛期に当たり、哲学では、偉大な綜合家トマス・アクイナスが現われてくる時期である。そして、このように繰り返されてきたルネサンスのほとんど最後のものが、十五・十六世紀のいうところの「ルネサンス」だったのである。

宗教においても、すでに中世において、クリュニー教団やシトー教団、フランシスコ教団やドミニコ教団などが次々と誕生してくる。これも、キリスト教の原点に帰ろうという動きであった。イエスがわずかの人達を従えて信仰を広めていた貧しい時代に帰り、ベネディクト戒律に謳われたように、清貧、貞潔、服従をモットーに、祈祷と勤労を重んじ、宗教の始元を回復しようというのが、これら修道士によって始められた革新運動の精神であった。ヨーロッパ独自のキリスト教は、そのようにして成立したのである。しかも、そういうキリスト教の原点に帰ろうという動きのほとんど最後のものが、十六世紀の宗教改革に他ならなかった。

どこの文明でも、歴史というものは、復帰と再生、つまり、自分達が文明化したときの原点に帰ることによって、新しい生き方をみつけていくというダイナミズムによって動いている。従って、ヨーロッパ文明も、ゲルマン的風土のもと、絶えずギリシア・ローマ文化とキリスト教精神の原点に帰って、それを梃子に次の時代を切り開いていこうとする。ヨーロッパの歴史は、そのようにして動いていったのである。

十五・十六世紀のルネサンス

本来の狭い意味でのルネサンス、つまり十五・十六世紀のルネサンスも、それまで繰り返されてきた復帰運動の一環として、衰退と退廃に面したヨーロッパ人達が、よりよく生きていくための新しい秩序と世界観を見つけ出すために、もう一度自らの原点に帰ろうとした動きだと言える。それは、文芸復興と言われるように、さしあたり、ギリシア・ローマ文化の原点にもう一度立ち戻ろう

とする運動として現われた。

特にイタリアでは、ギリシアの古典が再び収集され、哲学では、プラトンやアリストテレスの哲学が新しく研究しなおされる。また、フランスやオランダでは、モンテーニュやエラスムスなどの人文主義者が現われ、彼らは、ギリシアの古典に依拠して、人間の本性についての深く静かな洞察を遺した。十五・十六世紀も決して平穏無事な時代ではなく、大きな変動期であったから、世相も人心も混乱していたが、その中であって、この人文主義の精神は、ギリシア文化の遺産を自らのバックボーンにして、道を誤ることなく、人間としての中庸を保って生きることが勧められた。

しかし、また、これとほとんど同じ時期に、ルターを中心とする宗教改革の動きがあったことも考えあわせねばならない。確かに、この動きは教会の分裂をもたらした。従って、それ以前にはあったヨーロッパの思想的統一に亀裂を生じさせた。その点で、プロテスタンティズムの成立は、ヨーロッパ近代を用意するものではあった。それは、なによりも、それまでヨーロッパ文化を支えていた土壌であるゲルマン的異教的要素を徹底的に排除し、カトリックの中にあつた異教的要素をも糾弾し、ギリシア・ローマ由来の新プラトニズムと結びついていた人文主義的異教的要素をも拒否したという点で、ヨーロッパ文化の分裂をもたらした。しかし、これも、なお、ヨーロッパ文化の成立のもうひとつの大きな要素であつたキリスト教精神の原点に立ち帰って、再び新しい生き方を見出していかうとする努力ではあつた。十五・十六世紀のルネサンスを考える場合は、いつもこの二つの流れをまとめてみておかねばならない。

さらに、この時期にも、哲学・思想の分野で、絶えず異端視されながらも、ジョルダーノ・ブルーノなどの汎神論的思想が登場してきているのは、エリウゲナ以来の新プラトン主義の復活とも考えられるし、また、ヤコブ・ペーメの錬金術的な神秘思想なども考慮に入れるなら、明らかにヨーロッパ的風土にもともと流れていたエートスの再生とも考えられる。これらの動きは、ヨーロッパ文化の成立構造そのものの再生だったのである。

十五・十六世紀のルネサンスを、中世という暗黒時代から離脱して、近代という明るい時代が始まった時期だとか、神を中心とする時代から、むしろ人間を中心とする時代へと移っていった時期とみる説があつたが、これは、十八世

紀末以後の近代主義が描いたルネサンス像であって、大きな偏見に満ちている。

十五・十六世紀のルネサンスにおいても、それまでと同様、ヨーロッパが、その原点に帰るといふかたで、混乱の時代を切り抜けていった以上、中世以来のヨーロッパの世界はまだ壊れたわけではないし、ヨーロッパは、そこから離脱したわけでもない。確かに、それは以前の時代とは違った新しい時代の登場であり、そこには宗教や文化や政治の近代的な分裂傾向がみられるが、中世以来の文化的同一性までが完全に失われたわけではない。むしろ、十五・十六世紀はもちろんのこと、十八世紀末ごろまでは、ヨーロッパは、キリスト教を中心とした有機的な世界だったのであり、十五・十六世紀のルネサンスも、その流れの中で一変化にすぎない。

なるほど、十五・十六世紀のルネサンス期に、近代自然科学が成立し、その後大きく発展し、それは十九世紀以後の科学技術文明を準備した。しかし、これとても、今日の科学史の研究によれば、すでに十二・十三世紀の錬金術や占星術に源泉をもっていると言われる。さらに、この十五・十六世紀の科学も、十九世紀以後の科学とは根本的にそのあり方が違っていた。例えば、コペルニクスの地動説も、神の宇宙創造に関する新プラトン主義的な解釈から出てきていると言われる。ケプラーも同様であった。つまり、この時代においては、科学たりとも、自然哲学として、信仰内容をむしろ理性的な立場の方から理解しなおそうというヨーロッパ哲学の伝統的な流れの中にあつたのである。だから、このころの科学は、十九世紀以後とは違って、宗教と密接に関連していたのである。それは、どこまでも、分裂したとは言え、キリスト教を中心としたヨーロッパ文化の秩序の中に収まったものであつた。それが収まりきれなくなつて、科学それ自身が宗教から離脱して自己膨張していくようになったのは、十九世紀以後である。十五世紀から十七世紀にかけての近代自然科学の成立と発展を、宗教との連関なしで、ただそれだけを切り取ってくるのは、むしろ十九世紀以後の近代主義の偏見からくることである。

誤解されたヒューマニズム

また、一般に評価されているように、十五・十六世紀のルネサンスにおいて、人間中心の時代が訪れたというわけのものでもない。人間中心主義が登場して

くるのは、精神的にみるかぎり、どんなに早くとも、十八世紀の啓蒙主義あたりからである。十五・十六世紀のルネサンスの精神にあつては、むしろ、それまでの人々の志向が神から人間へという方向であつたのに対して、逆に、それが人間から神へという方向に変化し、単に視点が変わっただけにすぎないとみるべきであらう。

実際、モンテーニュやエラスムスは、この混迷の時代に、ギリシアやローマの古典に典拠を求めて、心を惑わすことなく静かに生きようという人文主義の精神を打ち出すが、しかし、彼らも、最後はいつも聖書による信仰に至り着く。懐疑的精神から信仰への道を指し示したモンテーニュはもちろんのこと、エラスムスも、聖書をギリシア語訳の原典に帰って研究し、争いごとのやまない当時の宗教界などを批判しながら、正しい信仰に帰ることを提唱していた。ここにも、ギリシア・ローマ的教養とキリスト教精神の独特の結びつきがみられる。いずれにしても、この時代の精神は、人間性の解放でもなかつたし、神からの離脱でもなかつたのである。

十五・十六世紀のルネサンスの精神を人間性の解放と位置づけるのは、近代的な誤解にすぎない。確かに、この時代には、ピコ・デラ・ミランドラなどにみられるように、人間の偉大さとか、個性の尊厳だとか、人間の自由の問題などが論じられてきてはいるが、これがいつも人間を超えるものとの関係で考えられており、しかも、この人間を超えるものが人間に内在するという新プラトン主義的考えに基づいている以上、これを、単純に人間性の解放と受けとることはできない。このことは、この人文主義の動きと並行し、それと対立する形で出てくる宗教改革の運動からも察せられることであり、宗教からの離脱がこの時代から起きたわけではないのである。

なるほど、人文主義の元の語は「ヒューマニズム (Humanism)」であるが、これはどこまでも、今言ったような意味で古典にのつとつた人間性 (Humanitas) の理解を目的とするものであつて、十九世紀以後に現われた人道主義とか人間中心主義とは、意味の異なるものである。一般のルネサンス解釈では、この辺のことが誤解されていたように思われる。ルネサンスの人文主義的精神も、十九世紀以後の間違ったヒューマニズム概念から、歪められてしまったのである。

確かに、よく例に出されるボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」などは、教会の規制への反撥から、人間の肉体美の礼讃を表現したものとされる。しかし、これは、むしろ人間の形を通して神々の花園を描こうとしたものであって、いわば神人合一の境地の表現なのである。その意味では、これは、ジョルダノ・ブルーノの哲学にも現われていたのと同じく、ヨーロッパ精神の底流にあった汎神論的風土とギリシア古典精神特に新プラトン主義の結合とみた方がよいであろう。そこから、中世にみられた「人間とは醜いものだ」という考え方から転換して、この世の人間の肉体の中にも神が宿っているという現実肯定的な考え方も出てくるのである。それは、肉体の中の神性の光を捉え、そのようにして、美の神への無限の憧憬を表現しようとしたものなのである。

一般に、イタリア・ルネサンスの芸術においても、ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」とか、ミケランジェロの「最後の審判」とか、ラファエロの「聖母子像」など、キリスト教に準拠した題材が多い。このようなことからみても、ルネサンスの精神は、ただ単なる人間性の解放というものではなく、キリスト教信仰と強力に結びついていたことが分かる。ただ、接近のしかたが、人間の方から神の方へ向かうという方向に変わってきたというだけである。ダ・ヴィンチが、徹底的に幾何学の研究をして、それによって「最後の晩餐」を描いているようなところにも、ギリシア・ローマ文化とキリスト教精神の融合がみられるが、そういうしかたで、ひとつの新しい様式が生み出されたのであった。

今まで、ルネサンスの精神は、様々な意味に解釈されてきた。それは、封建社会から近代市民社会への移行の過程で、教会の束縛から個人を解放しようとした運動であったとか、人間の自由独立、個性の尊重、自我の確立というような標語で特徴づけられる近代精神の出発点であるとか、いろいろなことが言われてきた。しかし、十五・十六世紀のルネサンスは、どこまでも、それまで何度も繰り返されてきた原点復帰運動のうちのひとつの展開にすぎない。その点では、トインビーが、文明に親子関係を認め、この文明の親子関係において、子文明が危機の折親文明へ回帰し、親文明の思想や制度を甦らせようとする文明論的運動としてルネサンスを広い意味に解釈したのは当を得ている。

近代精神の出発点をルネサンス的人間像に求めるのは、それが肯定的な意味においてであるにしても、否定的な意味であるにしても、おそらく、ルネサン

スに対する大きな誤解に基づくものであると言わねばならないであろう。近代あるいは現代の出発点は、やはり、一八〇〇年あたりにみるべきである。どんなに遡っても、十八世紀の啓蒙主義ぐらいまでである。十五・十六世紀のルネサンスは、なおまだ、ヨーロッパの中世的展開の中にあつたと言わねばならない。三つの要素によって成立したヨーロッパ文化の基本構造は、少なくとも、一八〇〇年ごろまでは続いていた。確かに三要素の分裂傾向が宗教改革から徐々にみられるが、しかし、文化史的にみる限りは、ヨーロッパ文化の最後の地盤は、なお一八〇〇年ごろまでは持続していたとみるべきであろう。

3 世俗化の時代

ヨーロッパ文明の世俗化

確かに、十七・十八世紀になるとヨーロッパ文明は世俗化の段階に入り、宗教の力は弱まっていた。それは、宗教改革後の宗教戦争が原因であった。

ドイツを中心とするルターの宗教改革運動以来、スイスでは、カルヴァンの改革運動がこれに呼応し、また、フランスでは、ユグノーと呼ばれた新教徒が旧教側と対立した。新教徒と旧教徒との抗争は激化し、そのうえ政治的な利害が深く絡んだこともあって、三十年にわたる宗教戦争が惹き起こされた。この戦いの結果、新教側も旧教側も、ともに信教の自由が認められはしたが、しかし、両者とも互に疲弊せざるをえなかった。ヨーロッパにとって、十七世紀は悲惨な時代であった。

この宗教戦争において、旧教と新教が激しく戦い、双方が疲弊し、その結果教会の威信が低下して、宗教への信頼が薄れたことから、十七・十八世紀のヨーロッパ文明の世俗化は起きた。旧教に対する新教側からの激しい抗議は、それまでのヨーロッパ文化の普遍的な統一に重大な亀裂をもたらし、これがヨーロッパ文化の世俗化の引き金になったのである。世俗化とは、その社会の主導的な価値が宗教的なものから非宗教的なものに変化することであり、宗教的価値が、社会的文化的価値の基盤としては弱くなってしまふことである。その代わり、この世の富や力、幸福や生活水準など現世的なものが主な関心事になっていき、あの世の救いのことは、主要な関心から次第に遠ざかっていく。かく

て、この時代には、宗教的な権威はもはや国家や経済を動かさなくなり、むしろ力関係は逆転する。そして、軍事や政治、経済や文化が、宗教から独立し、各々が自律性を発揮するに至る。このような文明的な一般現象が、ヨーロッパ文明では、十七世紀から十八世紀にかけて起きたのである。

実際、この時代に、ヨーロッパの絶対主義王政は絶頂を極め、世俗的国家権力が教会の力を凌いで強大な力を誇るようになる。また、その経済政策においても、重商主義経済が採用され、この政策に併行して、新興市民が抬頭し、これが合理主義的な世俗文化を育んでいったのである。

そればかりでなく、この世俗化の方向に、新しく登場してきた宗教教義が貢献することにさえた。つまり、旧教勢力との抗争に疲れた新教徒は、十七世紀後半以後、近代科学や近代技術の開拓に携わり、初期資本主義の発展に寄与した。プロテスタンティズムは、カトリックのような教会儀礼による救済を否定したから、ただ日々の労働の禁欲的生活にのみ来世の救済を求める以外になかったのである。マックス・ウェーバーが指摘しているように、例えば、カルヴィニズムが、勤労による富の蓄積を肯定し、勤儉・節約を重んじた職業倫理を提唱して、新興市民層に大きな影響を及ぼしたことに、それは現われている。その点では、宗教改革によるプロテスタンティズムの成立こそ、世俗化の出発点であった。また、フランスの新教徒ユグノーが、ジャンセニズムと結びつき、そこから理論に脱皮し、やがて啓蒙思想を生み出していったのも、新しい宗教教義と世俗化との深い関係を物語っている。イギリスにおいて、ピューリタン革命と名誉革命が起き、自由主義的議会制度が確立したのも、この時期である。

かくて、十七・八世紀のヨーロッパ文化は、一般に合理主義的・自由主義的性格を帯びるようになる。十七世紀イギリスにおけるロックの自由主義的な自然法思想なども、直接には名誉革命を推進した市民層を弁護したものであったし、十八世紀のアダム・スミスの自由主義経済論なども、当時の新興市民階級の考えを擁護したものであった。人間の理性に絶対の信頼をおき、旧来の伝統や迷信を批判した十八世紀フランスの啓蒙思想は、このヨーロッパの世俗文化の思想面での極点を表わすものであった。この時期の自然科学のめざましい発展なども、この時代の旺盛な合理精神を表現するものとみてよいであろう。文

学における国民文学の隆盛、芸術一般におけるバロック様式からロココ様式の普及などは、豪華華麗な趣味や逸楽の気分を反映するものであり、芸術面ではこの時期に世俗的・感性的なものが広く親しまれたことを表現している。

世俗化と近代化は区別されねばならない

しかし、ヨーロッパ文化の世俗化は、それでもなお、まだ、その文明の基本構造を壊すものではなかった。中世以来のヨーロッパの基本構造は、まだ全面的に崩壊したわけではなかった。

初期資本主義の萌芽は、すでに中世末期から十五・十六世紀のルネサンスにかけてみられ、これは十七・十八世紀に特に発達する。そして、それが文化の世俗化をもたらしたわけだが、しかし、それにもかかわらず、キリスト教を中心とするヨーロッパの大きな枠組が壊れたわけではない。なるほど、宗教が主導的な力を失ってはいったかもしれないが、しかし、マックス・ウェーバーの言うように、少なくともプロテスタンティズムは、資本主義の発展に寄与した。

この世の富と力に価値をおくにしても、その権威づけを、まだ宗教から借りてこなければならなかったのである。世俗化さえも宗教とのお結びついていたのであり、宗教が完全に除外されたわけではない。十七世紀後半から十八世紀にかけての近世の世俗化を推し進めるためにも、宗教的な背景は必要だったのである。この枠組が破れるのは、一八〇〇年前後の産業革命やフランス革命あたりからと考えねばならないであろう。

このことは、当時の芸術にも現われている。例えば、レンブラントの絵は、風俗画において、世俗的な人間の微妙な感情を幽微な光の技法によって写実的に表現するという点で、確かに近代的である。しかし、それにもかかわらず、彼の絵は、また、宗教画の世界で、多く聖書に題材を取りながら、神への無限の畏れと敬虔の念を余すところなく表現している。従って、これはなお、聖なるものと俗なるものの秩序と調和がまだ破壊されていなかった時代のひとつの像だとみるべきである。さらに、私達は、バッハやモーツァルトの古典音楽のなかにも、同じように、奥深く潜む運命的なるもの・神的なものを感じることがができる。

当時発展した自然科学においてさえも、事情は同じである。例えば、ニュー

トンの物理学においても、その力学の研究は、神が創造した宇宙の秩序を数学的に明らかにしようとする情熱によって支えられていた。しかも、ニュートンは、彼の宇宙の秩序の発見を、ちょうど砂浜で一粒の砂を掴むのと同じように、被造世界の秩序のほんの一部を発見したにすぎないと考えたのである。彼は、晩年聖書と錬金術の研究に没頭し、聖書の言葉から世界がいつ創造されたかなどを研究していたが、これも、以上のような宗教的確信からであった。

デカルトからスピノザ、ライブニッツを経てカントに至る大陸の哲学の流れにおいても、確かに、一部においては、神が単に合理的に要請されただけの「哲学者の神」になってしまった嫌いはあるかもしれないが、しかし、決して無神論の砂漠に迷い出たわけではない。啓蒙主義に分類されるヴォルテールやルソーにしても、その思想的バックボーンは、ギリシア・ローマの古典にあることは明らかである。従って、これらは、むしろ伝統的な人文主義の系譜に属するものであって、正しくヨーロッパ文化の原構造を分担するものとみななければならない。ただ、この時期には、これらの諸要素が分裂傾向を示し出したというにすぎない。それがヨーロッパの世俗化というものであった。

このようにみていくなら、ヨーロッパの世俗化と近代化とは、区別しなければならぬことになるであろう。十七世紀から十八世紀は、ヨーロッパにとって世俗化の時代であり、自由主義や民主主義や資本主義の思想はこの時代に現われる。しかし、それらは、どれも、最終的には、キリスト教を中心とするヨーロッパの枠組を打ち破るものではなかった。このことは、自然法の源泉をなお神の摂理に求めたロックの政治思想や、見えざる神の手による予定調和を説いたスミスの経済思想などにも現われている。

それに対して、ヨーロッパの近代化は十九世紀から始まり、自由主義や民主主義や資本主義は、このとき以来宗教的枠組から離れ、独自に膨張する。確かに、十七・十八世紀の世俗化は、十九世紀の近代化の前段階ではあるが、しかし、最後の枠組が保存されているかどうかという点では、大きな違いがあると云わねばならない。

歴史の現象を眺める場合、単に今日の状況に近いものだけを選んできて、これを原因結果的につなぎ合わせるだけであってはならないであろう。むしろ、歴史的現象の考察は、ひとつの事象が時代全体においてどのような意味をもつ

ていたか、どのように関係していたか、という観点からみるのでなければならぬ。全体から切り離して、それだけを取り出しにくるなら、歴史そのものを見誤ることになるであろう。

4 産業革命とフランス革命は何を意味するか

産業革命のもたらしたもの

ヨーロッパ文明の原構造が急激な構造変革を起こすのは、イギリスの産業革命とフランスの自由主義革命を起点にしてであった。

十八世紀後半よりイギリスで起きてきた産業革命は、当時のイギリス社会を急激に変革するとともに、十九世紀に入ると、急速にヨーロッパ各国に波及した。それは、蒸気機関など機械による生産方式の根本変革であり、工業、交通、通信など、産業の全分野に及ぶ巨大な産業構造の大変革であった。今日の高技術社会は、この産業革命に源泉をもっている。

産業革命は、大工場を使った機械工業によって、物資の大量生産を可能にし、鉄道や郵便制度など運輸や通信の革命も手伝って、その大量消費を可能にした。しかし、これは、単にそのような経済面における変革にとどまらず、政治、社会、文化一般にも大きな影響を及ぼした。

何よりもまず、この産業の飛躍的な発展によって登場してきた産業資本家の力が次第に増大し、彼らの自由・平等への要求が日増しに高まっていった。かくて、イギリスでは、代議制民主制の拡充がはかられ、近代の議会政治が完成する。そして、それは、フランスの自由主義革命に深い影響を及ぼした。さらに、産業革命によってもたらされた経済発展は、国内の市場統一を要請し、これが国民国家の形成を促進した。この近代の国民国家は、国民の多くが政治に参加する権利をもち、それまでと比べても組織化の一段と進んだ中央集権的な国家であった。国民国家は、そういうしかたで、産業のより高度な発展を目指したのである。

また、この産業革命は、農業人口を工業人口へと大量に移動させたから、人口の都市集中をもたらし、その結果大工業都市を出現させた。かくて、これら政治・社会面にみられた現象は、社会の平均化とアトム化および組織化をもた

らした。しかし、同時にまた、この平均化つまり平等化に取り残された産業労働者と産業資本家との貧富の格差が激しくなり、両者の対立が激化した。産業革命以来、ヨーロッパは喧騒と激動の時代を迎えたのである。

この産業革命は、経済構造をはじめ、政治機構、社会構造、さらに、人々のものの見方・考え方も根本的に変えるものであった。それは、ヨーロッパのそれまでの有機的な社会を転覆させる革命的な事件であった。これによって、キリスト教を中心とした古き良きヨーロッパの秩序は壊れ、ヨーロッパの生き方そのものが根底から覆えされた。過去の伝統からの離脱や、物質主義の横行、欲望や嫉妬心の氾濫などは、それを特徴づける顕著な現象である。こうして、産業革命は、自由主義革命とともに、ヨーロッパ文化の自壊をもたらすことになったのである。

フランス革命のもたらしたもの

一方、十八世紀末に起きたフランスの自由主義革命は、貴族の革命から出発して、市民、農民にまで波及し、ここでも、その過程の中で、旧来の階層的秩序は積木を崩すように崩壊した。そして、自由・平等のイデオロギーのもと、社会は、人為的・政治的に平均化され、水平化された。これは、近代産業を興し、より自由な経済活動の場をつくるには必要なことであった。もともと、このような社会的要請は、この革命が起きる前から、富を蓄積した中産市民層から起きていたが、革命はそのための政治的な調整であった。フランスでは、この政治的調整がイギリスと比べて遅れていたために、これを急激かつ暴力的に行なう必要があったのである。

実際、革命初期に民衆の蜂起によって成立した国民議会では、様々の封建的な特権が廃止されたほか、人民主権と人間の自由・平等を謳った人権宣言が採択され、それに基づいて憲法が制定された。これらは、どれも、経済の膨張を可能にする近代の組織国家をつくっていくための政策であり、イデオロギーであった。自由な経済活動を促進し、近代産業を興していくためには、旧来の封建的秩序を破壊して、社会を平均化し、多くの人々が政治に参加する権利をもち、身分、門閥、性別、思想・信条によって差別されることなく、自由に動けるようにすることが必要であったし、自由・平等のイデオロギーは、そのため

に要請されたものであった。現に、国民議会では、このイデオロギーのもと、現実に貨幣や度量衡の統一が行なわれ、商工業の自由な発展策がとられたのである。

しかし、この急激な政治的・社会的変動によって、ここでも、旧来の生活様式やもの見方・考え方までが根本的に変革されていった。政治的・社会的革命は、また文化的革命でもあった。

例えば、革命盛期に行なわれたジャコバン党の独裁政治の諸改革のひとつに、革命暦の採用がある。これは、革命が文化革命を伴うということをよく表わしている。これによって、人々の生活様式や生活感覚が根本的に変えられた。革命は、単に政治的な不連続をもたらしただけでなく、文化的な不連続をもたらしただけである。革命は、政治・経済・社会・文化一般を含む生活様式全般の革命である。このジャコバンの独裁において、旧来の宗教が否定され、逆に合理性そのものの崇拜が行なわれたのも、そのひとつの例である。これは、反宗教が宗教化するという近代特有の現象の先駆けでもあった。また、戸籍事務が教会から分離されたのも、キリスト教によって秩序づけられていたヨーロッパの社会秩序の崩壊を意味している。

ジャコバンの独裁においては、このような過激なしかたで、社会生活の最も基盤にある旧来の文化的土壌が覆され、その上に、農民解放政策や国民皆兵制が実施され、普通教育や普通選挙の試みがなされようとしたのである。これらは、どれも、近代国家形成の必要条件であるが、その目的は、生産性の飛躍的な向上にあった。近代国家の形成とは、この生産性の向上のために社会を徹底的に組織化することだったのである。

革命末期に、ナポレオンが抬頭してきて、統領政府から帝政樹立へと進んだが、このナポレオンの行なった事業は、すでにジャコバンの独裁によって平均化され方向づけられた社会を、より一層組織化することであった。ナポレオンは、中央集権体制の整備を行ない、産業を保護し、税制を改革し、金融の組織化を行ない、近代産業国家へとフランスを衣替えしていった。ナポレオン法典の制定も、いわば国家の組織化の完成であった。さらに、十九世紀初頭から、封建的圧制からの解放というイデオロギーのもとで開始されたナポレオンの外征は、これらの近代化政策をヨーロッパ中に普及させ、ヨーロッパを根本的に

変革した。産業革命の波及とともに、この自由主義革命の波及はヨーロッパの近代化を加速した。

ヨーロッパの近代化とは何であったか

だが、これら産業革命と自由主義革命によってもたらされたヨーロッパの根本的変革、つまり「近代化」が、同時に、伝統的な文化の破壊を意味するものでもあったとすれば、これらは、ヨーロッパ文化の自壊のメルクマールでもあったと言わねばならない。産業革命は、主に経済面から、自由主義革命は、主に政治面から、これを表現した。この二つの革命を通して、近代の産業技術文明が構築されるとともに、本来のヨーロッパ的あり方、つまり、キリスト教精神とギリシア・ローマ文化とゲルマン的要素の融合によって形成されたヨーロッパの有機的秩序が崩壊していく。神聖ローマ帝国が滅び、教会の権威も失われ、社会の階層的秩序も瓦解した。これが、ヨーロッパの近代化に他ならない。

なるほど、十九世紀前半に、この急激なヨーロッパの変革に対する反作用が現われたが、それは単なる反作用にすぎず、その後の何度かの革命や独立運動によって、ヨーロッパ諸国の国民国家形成が促進され、ヨーロッパの近代化は、とどめることのできない流れとなって、ヨーロッパ中に拡散し進行していった。産業革命とフランス革命以来、十九世紀にヨーロッパ各地で連続して起きた諸革命の騒擾をみると、確かに、当時のヨーロッパはそれまでの文化的秩序を根本的に覆しつつあったとみるべきであろう。十九世紀は、ヨーロッパの大きな構造改革の時代であった。民主主義と経済の膨張を基調とする現代の構造は、この一八〇〇年前後から始まるヨーロッパの構造改革に源泉をもっている。

5 自由主義と社会主義と国民主義

自由主義と社会主義

十九世紀ヨーロッパの一般的な思潮は、自由主義と社会主義と国民主義によって特徴づけられる。

イギリスの諸革命によって先駆けられ、フランス革命によって現実化した自由主義の風潮は、十九世紀のヨーロッパを全面的に支配した思潮であった。こ

これは、旧来の伝統や秩序からの人間の解放を指向したものであったが、しかし、これも、産業をいかに大規模に動かしていくかの思想的調整であったとみてよいであろう。生産性を高めていくには、何よりもまず、封建体制によってつくられたそれまでのいろいろな束縛から、人々が離脱しなければならない。経済のより大きな発展のためには、宗教、身分、門閥、地域、家など、あらゆる拘束から人々が解放され、人々が自由に動き回れる社会が必要だったのである。そのイデオロギーが、自由・平等のイデオロギーであった。実際、イギリスでは、十八世紀後半以来、政治・経済上での自由主義が現実的に発展する。フランスの啓蒙主義は、このようなイギリスの現実的自由主義を、思想的イデオロギーに仕立てたものである。そして、この自由主義は、フランス革命や七月革命や二月革命となって実現し、ドイツ、イタリアなどヨーロッパ中に波及していった。

しかし、一方では、この自由主義的風潮によって、人々の行動様式や価値観が大きく変わり、人々は自由の名のもとに故郷から逃走し、祖先の残した伝統を否定し、皆が、クモの巣を散らすようにバラバラになっていった。伝統的な価値観からみるなら、それは、また、ヨーロッパ的秩序の崩壊のイデオロギーでもあった。

他方、自由主義の進展とともに、これと併行して、この時代には、社会主義思想もまた進展した。フランス革命の自由・平等の理念のうち、自由主義は特に自由を重んじたが、社会主義の方はどちらかというと平等を重んじた。そして、これは、自由主義経済において生じた資本家と労働者の対立・矛盾の修正に寄与した。これは、労働者の生活改善や富の平等分配を要求することによって、社会のより一層の平等化・平均化をもたらした。

とは言え、社会主義は、産業主義の修正のイデオロギーであり、自由主義同様、近代主義であることに変わりはない。この社会主義の進展の頂点に、十九世紀後半、科学的社会主義と称して、マルクスなどの共産主義思想が現われるが、これも、旧来のヨーロッパの枠組からみれば、むしろ、その崩壊の極を表現するものであった。それは、キリスト教的ヨーロッパの秩序の全くの逆転であったからである。

国民主義と国民国家

これら自由主義や社会主義によって自由化され平均化された社会を、再び、従来よりもより大きな国民国家へと組織しなおしたのが、この世紀に同時に進展した国民主義のイデオロギーであった。近代の産業技術文明を発展させて、これを収容していくためには、人口においても、面積においても、組織においても、それまでよりも大きな規模の国家が必要であった。これを可能にしたのが国民国家の枠組であつて、これは、従来の地方分権的な小さな枠組を破壊し、これをより大きな規模に編成しなおした。官僚組織や法体系を整備したり、軍を組織化したり、交通・通信網を整備したり、貨幣や度量衡を統一したり、国立銀行をつくつて金融を円滑化し、拡大したりしたのは、そのためである。そればかりでなく、このような大きな規模の国民国家を組織するには、人々の心の中にその国家の一員であるという意識を培う必要があつた。そのために、それは、国旗や国歌を制定し、言語を統一し、国民的同一性を強調したのである。それが国民主義のイデオロギーであつた。

このようにして、国民国家は、その精神的共通項をつくりながら、組織をより大規模化して、人々の自由な往来と、広範囲の活動を可能にした。自由主義は、自由・平等のイデオロギーのもと、身分制を解体し、職業選択や移住や就学の自由を保証し、人民主権と人民の政治参加を可能にしたが、国民主義は、これに明確な形式と枠組を与え、精神的基盤を与えた。自由主義による個の自由化と、国民主義による全体の組織化とは、相対立する面をもちながらも、両者あいまって、近代国家形成に寄与したのである。

国民主義は、近代化に遅れたために急いで統一する必要のあつたドイツやイタリアで、特に進展した。例えば、ドイツでは、一八七一年、プロシアを中心に、ビスマルクの強権政治によつて統一が完成する。そして、彼は、商法や刑法や民法の制定、貨幣・度量衡の統一、鉄道、郵便、電信の奨励、帝国銀行の設置などを行ない、すでに五〇年代から発展していたドイツの近代産業を再編成し、ドイツの経済を飛躍的に発展させ、領邦経済を国民経済に移行させるのに成功した。また、これよりもはやく、イタリアでは、サルジニアを中心に、オーストリアからの独立運動を通して、一八六一年に統一が完成し、同様の政策がとられている。

このような国民主義の発展は、フランスやイギリスでもみられ、特にフランスでは、第二帝政において、産業の振興、国営土木事業の起工、教育の刷新、パリの都市計画などが行なわれ、第三共和政においても、三権分立を基本とした共和憲法が制定されている。また、イギリスでは、ヴィクトリア時代に国民国家としての最盛期を迎える。選挙法の改正などが行なわれたために議政政治が発達、経済が飛躍的に発展し、そのため、イギリスは盛んに海外に進出した。また、普通教育法や労働組合法が制定され、国民の福祉と平等な分配も配慮された。

さらにまた、この時代には、イタリアをはじめ、ヨーロッパ各地で独立運動が盛んになる。この気運は、まずナポレオンの支配からの独立によって醸成され、次にウィーン体制からの独立によって培われた。かくて、ギリシア、ペルギー、ハンガリーなどが独立、ポーランドでも独立運動が起き、ラテン・アメリカやイギリスの植民地の独立もみられた。自由主義にしても、国民主義にしても、国家の自由・自立を重んずるものであったが、この理念は、十九世紀以後の世界史を大きく特徴づけることになった。このようにして、ヨーロッパ各地に多くの国民国家が成立した。

しかし、この国民主義のイデオロギーは、キリスト教によって統合されていたヨーロッパ全体の普遍的秩序を解体するものでもあった。同時に、それは、従来の安定性の原理であった地方分権的意識をも解体し、これを国家の中に組織づけたために、国家の肥大化とその権力の増大をもたらし、人々はその中のひとつの歯車のように扱われることにもなった。また、この国民主義の弊害に對しては批判的であった自由主義や社会主義の運動は、アトム化した大衆を吸収し、絶えず国家を揺さぶったために、国家は絶えず安定性を欠き、左右に揺れ動くことになった。そのため、人々は、それまでの落ち着きを失い、左右からの煽動や策動に乗せられて、右往左往することにもなった。国民主義もまた、自由主義や社会主義同様、旧来のヨーロッパ的秩序の崩壊のひとつの表現だったのである。

ヨーロッパ的思考の変革

十九世紀ヨーロッパの自由主義と社会主義と国民主義の思潮は、人々の意識

を大きく変革し、近代ヨーロッパ人の思考形式を支配した。ギリシア・ローマ的教養とゲルマン的要素がキリスト教の枠の中で統一され秩序づけられた形態が、本来のヨーロッパ的思考だったとすれば、これら三つの近代的意識は、どれもこの束縛から離脱し、この枠組みを破ろうとするものをもっていった。そして、その離脱のエネルギーになったものが産業主義に他ならなかった。産業主義こそ、従来の秩序を破って、世界を巨大な機構にするまでは、どこまでも膨張拡大しようとする得体の知れない近代の怪物であった。人々の意識は、自由主義をとるにしても、社会主義をとるにしても、国民主義をとるにしても、この産業主義の膨張に応じて、根本的に変革された。

自由主義と社会主義と国民主義は互に対立する側面をもっていたが、対立しながらも、三者は同時にヨーロッパ的秩序の崩壊を表現した。これら三つの思想は、ギリシア・ローマ文化とキリスト教精神とゲルマン的要素、それぞれの裏返しだとみることが出来る。

6 ヨーロッパ文化の自壊

ヨーロッパの文化的頹落

近代産業の発達とともに、従来の有機的秩序のある共同体が崩壊し、そこから寄辺を失った大衆が巨大な量となつて溢れでてきたのは、ヨーロッパの十九世紀以来のことであった。特に産業革命とフランス革命以来、自由・平等のイデオロギーのもと、社会が平均化・水平化され、それまでの社会の秩序が壊れたために、根無草のようになった不特定多数の個人が登場し、しかも、これが、政治的にも社会的にも大きな力をもつようになった。

さらに、この社会の秩序の崩壊に対応して、人々の精神の秩序も崩壊したから、それはまた文化的にも大きな変革をもたらした。つまり、人々の精神の中で、聖なるものと俗なるものの秩序が崩れ、そのため、人々は、それまでの神聖なるもの・崇高なるものへの畏敬の念を失い、逆に、卑俗なものを神聖化するに至つたのである。かくて、人々は、自ら高まるどころか、より高貴なものを自らのレベルに引き下げていったために、この時代の文化は、加速度的に低俗化していった。文化の水準の低下、文化の大衆化という今日みられる現象は、

ヨーロッパの十九世紀に源泉をもっている。

新聞や雑誌、つまり今日でいうマスコミが登場し、興味本位の情報を大量の大衆に一時に提供したり、大衆小説といわれるような人々の享楽のための文学が多くの大衆にもはやされるようになったのも、ヨーロッパの十九世紀以来のことであった。この時代の文化は、そのようにして、その品位を次第に落していった。この時代の文化的状況は、一般には市民文化の隆盛として特徴づけられているが、しかし、その内容は、実際には、文化の大衆化であり、文化的な頹落に他ならなかった。

この時代は、産業主義の発達にともない、自然科学の成果が技術に応用され、急速に高度な技術文明が生み出され、人間生活が大きく変革されていったが、それはまた、同時に文化的な頹落をももたらした。特に、印刷術の発達は低俗な文物を氾濫させ、普通教育の普及は、大衆が高度な文化の領域の中に割り込み、これを引き下げていくことを助長した。産業技術文明の発達とともに、人々は、価値の重心を、精神的価値から物質的価値へと大きく移動させていったのである。その結果、既成価値は転落し、価値が多様化して、文化は中心を失い無形式になった。

この十九世紀のヨーロッパ文化の特徴は、十七・十八世紀の文化の世俗化とは、質を異にしたものである。十七・十八世紀の世俗文化では、まだ最後の地盤としての宗教的価値が、ヨーロッパ文化の統一された中心的価値として隠然として存在していたのに対して、十九世紀にあつては、この最後の地盤が崩れ去っていく。文化は、むしろ、非宗教的なものから反宗教的なものへと転落していったのである。産業主義にしても、社会主義にしても、唯物主義的風潮の横行は、それを物語っている。

ヨーロッパ文化は、ギリシア・ローマ的教養とゲルマン的要素がキリスト教精神によって統合されたところに成立していたが、このヨーロッパ文化の基本的支柱が、この時代から大きく崩れ去っていったのである。そのため、それだけの要素が中心を失ってバラバラになり、次第にその高貴な生命力を喪失し、かくて、ヨーロッパはその自己同一性を失っていった。ヨーロッパは、一八〇〇年を境にして、これまでに一度もなかった文明の大きな転機に差しかかる。

ヨーロッパ的世界観の崩壊

このヨーロッパの精神的変革は、哲学の分野にも現われた。

ヨーロッパの哲学は、その成立以来、ゲルマンの土壌の上で、キリスト教的
世界観をギリシア的知性によって理解し、それでもって世界をいかに了解する
かに向けられていた。このヨーロッパ哲学の構造は、十九世紀前半のヘーゲル
の哲学まで持続され、ある意味で、このヘーゲルの哲学で完成していると言え
る。彼の絶対精神の哲学は、ゲルマン的な汎神論の要素をも含めて、ギリシア
以来の哲学の伝統を踏まえながら、近世の主体の形而上学を基盤として、神の
世界創造と人間の墮罪、および神の受肉とその苦難、さらにイエスの贖罪によ
るそこから復帰というキリスト教的な世界観を、その弁証法的論理によって理
論づけ、体系づけて、かくてヨーロッパ哲学の三つの伝統をみごとに融合させ
た。ヘーゲルの哲学において、ヨーロッパの哲学は完成 (vollenden) し、し
かも、文字通り、余すところなく終わったのである。

政治・社会的には、ヨーロッパは、十八世紀末から崩壊現象を起こしていた
が、哲学・思想的には、この崩壊現象は十九世紀前半まではまだ現われず、む
しろ、この時代まではなお古典主義の時代が続いていたとみるべきである。そ
れは、ちょうど、ギリシア文明において、プラトンやアリストテレスの哲学が
崩壊期になってから現われてきたのと同様である。ヘーゲルが『法の哲学』の
序文で語った「ミネルヴァの鳥は、夕暮近くになって飛び立つ」というよく知
られた言葉は、哲学の完成はその文明の終わり近くになってから現われるとい
うことを表現したものであろう。

かくて、ヘーゲル哲学の後、ヨーロッパの哲学の構造は根本的に覆されてい
く。

神学的段階から、形而上学的段階へ、そして最後に科学的実証の段階へと、
人間の知性は発展してきたと考えたコントの実証主義は、科学的真理に絶対的
価値をおく今日の科学主義の先駆をなすものとして、本来のヨーロッパ哲学の
少なくとも変貌を表わすものであった。

ヨーロッパの科学たりとも、もともとキリスト教的信仰と無関係ではなく、
ニュートンの時代でも、自然の秩序は神の秩序はであり、科学は、神の創造し
た世界の秩序の探究という意味をもっていた。ところが、十九世紀前後から、

特に百科全書派を発端として、科学は、そのような宗教的背景を振り捨てて、超自然的なものを一切認めず、純粹に自然と物質の世界の中でのみ外界の構造を考へることによって、飛躍的に発展した。その真理性についてはともかく、ここで、科学が無神論的なものになり、意味が変わったということだけは言えるであろう。さらに、この科学の真理にのみ絶対的価値をおき、他の一切のものを迷信として退ける科学絶対主義が、思想面で登場してきたという事は、少なくとも、キリスト教信仰とギリシア的知性のバランスの上に成り立っていた従来のヨーロッパの世界観を覆すものであった。科学万能主義は、このバランスが崩れ、ただ合理的知性のみが異常に絶対化されたという点で、ヨーロッパ的精神の矮小化を表現するものと言つてよい。

また、この時代に、主に生物学的分野から登場してきたダーウインの進化論の思想も、本来のヨーロッパ的世界観の崩壊を表現するものであった。それまでの世界観では、植物や動物の生命体の系列も、神の被造物として、キリスト教的世界観の中で捉えられていたのに対して、進化論の中では、この超自然的枠組が払拭され、生命体の系列もただ唯一「進化」という概念でのみ説明されるに至った。その真理的価値についてはともかく、少なくとも、ここで従来の自然観や生命観の大きな変質があったことは確かである。

科学主義にしても、進化論にしても、〈進歩〉の観念が、神の秩序に代わる新しい説明概念になっているが、このような進歩の観念は、当時の産業主義の発達と軌を一にしており、それは、この社会的風潮を思想的に象徴したものだともみてよい。産業主義それ自身も、十九世紀以前では、まだ宗教的価値と深く結びついていたが、十九世紀に至って、その結びつきがなくなり、それ独自で膨張していくようになる。

この産業主義に反対したマルクスやエンゲルスの史的唯物論、あるいは科学的社会主義の思想も、進歩・発展の観念によって歴史を説明するという点では、共通したものをもっていた。これは、人間の歴史は原始的な共産社会から出発し、そこから生産力と生産関係の矛盾によって階級分化が生じ、この階級間の闘争によって歴史は進歩発展してきたと考へる。そして、この階級闘争の極における共産革命によって、もはや階級も搾取もない理想社会がつけられると考へた。これは、レーヴィットの言うように、キリスト教の救済史観の裏返しで

あつた。

キリスト教の歴史観では、人間はもと罪なき楽園にいたが、人間の墮罪によって人間はこれを喪失した。神の国は、ただイエスの贖罪とその再臨によってのみ回復されるであろうと考える。この救済史観から神を排除し、これを此岸化して、現実の社会経済的人間の歴史に当てはめれば、マルクスの唯物史観が出来上がる。マルクスの唯物史観は、従来のキリスト教的歴史観の一八〇度の逆転であった。この革命的歴史観は、ヨーロッパのあらゆる伝統を覆して、全くの空白から出発しようと考えた。

どの思想でも、 \langle 進歩 \rangle の観念が神にとって代わっているという点で共通している。キリスト教的な世界観から神を追放し、それを此岸化すれば、十九世紀の世界観が登場してくる。その意味では、これら十九世紀ヨーロッパの諸理念は、なるほどヨーロッパの特性をなお備えてはいるが、しかし、それが裏返されているという点で、ヨーロッパ的世界観の崩壊を表わしている。これらは、どれも、旧来の世界観・価値観を破壊するものであった。政治・社会面におけるフランス革命や産業革命ばかりでなく、思想面においても、大きな革命がもたらされたのである。

十八世紀の啓蒙主義に端を発し、ヘーゲルを通過して、十九世紀になってこの世紀の思潮を一般的に支配したこの \langle 進歩 \rangle の観念は、人々が、過去のヨーロッパの秩序を振り捨てて、得体の知れない未来に向かって、中心から逃走しただけであることを表現している。ここでは、すべて古いものは悪とされ、新しいものが善とされて、かくて旧来の価値は次々と否定されていった。この一般的思潮が、「歴史は進歩する」という当時の進歩の歴史観に反映されたのである。だからこそ、この進歩の歴史観は、実証主義の歴史観にも、進化論にも、産業主義の歴史観にも、唯物史観にも、共通して現われたのである。ヨーロッパ中世を暗黒時代とし、十五・十六世紀のルネサンスから新しい人間中心の時代が始まり、十七・十八世紀に至って \langle 理性性の時代 \rangle が開花したとするヨーロッパ精神史に対する近代の固定観念も、十八世紀末の啓蒙主義によって提唱され、十九世紀になって一般に拡まった観念であった。

文学や芸術面においても、十九世紀後半から、このヨーロッパ文化の崩壊の兆候が現われる。

文学・芸術面においても、哲学・思想面と同様、十九世紀前半はまだ古典主義の時代であり、これは、むしろヨーロッパ文化の完成という意味をもっていた。例えば、ゲーテの文学においては、『ファウスト』などにも現われているように、ギリシア・ローマの教養とキリスト教的精神とが、ゲルマン的な汎神論的風土の中で混然一体となって融合され、緊張の中にもみごとな調和を保って完成されている。人間もまた、ここでは、そのような調和と秩序のある世界の中に救われていたのである。

この古典主義と一部重なりながら、その後、ロマン主義の芸術が現われるが、これは人間の主観や感情の中に真実を見出そうとするものであった。そのために、それは、古典主義的形式美を排し、奔放な空想や夢の世界へと飛翔しようとする。この面では、ロマン主義は、確かに近代主義的面をもっており、人間を超える世界の喪失という点で、ヨーロッパ文化の崩壊を微妙に表現している。しかし、一方では、これは、崩れゆくヨーロッパ文化の中にあつて、自らも古典主義的形式を破りながらも、なおまだ古き良きヨーロッパへの憧憬をもっていた。ロマン主義が過去を重んじ、騎士物語やキリスト教説話など中世的なものへの憧憬を抱いていたという点では、これは、同時に文化の崩壊期に逆行して、それに抵抗しようとする面をもっていたと言えよう。

芸術がヨーロッパ文化の崩壊を端的に表現したのは、写実主義や自然主義が登場してからであつた。そこでは、ロマン主義にはまだなおあつた生命力や倫理性が希薄になり、ロマンや想像力の衰弱が現われている。例えば、イブセンなどの文学に最もよく現われているように、ここでは、人間の生のままの情念を主張するだけで、それ以上のもの、それを包むより高次の世界はもはや描かれてはいない。もつとも、同じ写実主義とは言え、好んで田園と農夫の生活を描いたミレーの絵画には、産業主義や自由主義の進展に伴って、壊されていく自然や、崩されていく中世的共同体への愛着が描かれており、むしろロマン主義的な孤独感さえ感じられる。だが、彼の作品が、当時の社会への抗議や風刺を表現しており、貧しく虐げられた階層の情念の表現であり、新しき人民のための芸術だと当時評され、曲解されたほど、時代の精神はすでに病んでい

たのである。

この美術の面では、その後、印象派の芸術が大きな潮流となって現われてくるが、ここに至って、芸術はすっかりその古典的形式を喪失し、型を失ったと言える。文化というものが型と様式によって表現されるものであるとすれば、この型の喪失は、やはりヨーロッパ文化の崩壊を表現していると言わねばならない。

もつとも、セザンヌにおいては、 \langle もの \rangle の真実を描こうとする強烈な精神があった。二十世紀のキュビズムのように、 \langle もの \rangle を分解し、自由に変容しようとするのではなく、 \langle もの \rangle そのものの本質に迫り、それを堅固な形態の中に刻印しようとする深い沈潜がセザンヌの絵にはみられる。ただ、それがあまりにも深い沈潜であったために、その精神は、軽薄な十九世紀の風潮の中にあつて、あまりにも孤独であつた。そのために、彼の作品では、 \langle もの \rangle そのものを包み安定させるより大きな \langle 世界 \rangle が遠退いてしまつている。

ゴッホの絵画においても、 \langle もの \rangle と \langle 人 \rangle との生命の奥底をみつめ、これを余すところなく表現しようとしている点で、絵画の本質を逸脱してはいない。しかし、この営みもあまりにも孤独であつた。生命力の衰弱しゆく外部世界の中にあつては、真実は、ただそのような孤独な精神によつてしか描き出されえなかつたのである。彼が一八九〇年の死の直前に描いた「鳥のいる麦田」においては、十九世紀ヨーロッパが至りついた精神の頹落と崩壊、生命力の喪失、および、来たるべき二十世紀のヨーロッパの暗い運命への預言が含まれている。

ゴーガン作品の中にも、産業主義と自由主義によつて崩されていくヨーロッパ世界から逃避し、まだ壊されていない世界へと帰つていこうとする強烈な憧憬がよみとれる。後期印象派の人々は、崩壊しきつたヨーロッパ文化が失つてしまったものを、自らも崩れながら極限のところで見つめなおそうとした。十九世紀末においては、もはやそのようなしかたでしか、ものごとの真実を表現しえないほど、ヨーロッパ精神は衰弱してしまつていたのである。

世紀末の思想の意味するもの

この後期印象派の孤独な運命は、思想面では、世紀末の思想が共にした。

世紀末の思想は、ヨーロッパが本来の自己を失い、すでに寄辺をなくしてし

まった状態への嘆きから始まる。ショーペンハウアーは、ヘーゲルと同時期に、すでに、その厭世哲学によって、このヨーロッパの精神的疲弊を表現していた。これを引き継いだニーチェは、純粋な生の立場から、ものみな衰弱しゆくヘヨーロッパのニヒリズムの到来を宣告し、このニヒリズムの世界を先取的に生き抜き自らより高きに登りゆこうとする人間、つまり超人の理想を掲げた。彼の思想の背景には、ギリシア文化への深い憧憬があると同時に、特にそのデイオニソスの面を強調するという点で、その底流にゲルマン的な生命の流れが流れ込んでいた。そこから、彼のキリスト教批判も、ヘヨーロッパのニヒリズムへの預言も出てきたのである。彼の宣言した「神の死」は、それ自身、キリスト教的世界観によって統一されていたヨーロッパの秩序の崩壊を表現していると同時に、自らもその崩壊を加速した。彼によれば、キリスト教の禁欲的徳は、弱者のルサンティマンの生み出したものにすぎないとみられたのである。ニーチェにおいても、本来のヨーロッパの文化構造はバラバラになり、ギリシア的・ゲルマン的要素のみが、ヨーロッパ文化の頹落と崩壊の中で、孤独な緊張を強いられている。彼は、そういうしかたで、従来のヨーロッパ文化を支えていた根底の崩壊を表現したのである。

ニーチェは、『力への意志』の序文でこう言っている。

「私は、来たるべきものを、もはや別様には来たりえないものを、すなわちニヒリズムの到来を書きしるす。この歴史はいまではすでに物語られうる。なぜなら、必然性自身がここでははたらかはじめているからである。この未来はすでに百の徴候となつてあらわれており、この運命はいたるところでおのれを告示している。……私達の全ヨーロッパ文化は長いことすでに、十年また十年と加わりゆく緊張の拷問でもって、一つの破局をめざすがごとく、動いている。不安に、荒々しく、あわてふためいて。あたかもそれは、終末を意欲し、もはやおのれをかえりみず、おのれをかえりみることを怖れている奔流に似ている。」と。

他方、キェルケゴールは、十九世紀半ばにあって、逆に、そのような神なき時代に、なお純粹にキリスト教精神を持続して、ただひとり神の前に立とうとした。そのことによって、ヨーロッパ精神にいわば終止符を打ったのである。ここには、ヨーロッパがヨーロッパとして成り立ったキリスト教精神が、それ

を支える「世界」を喪失したままで、より先鋭なしかたでその輝きを増している。ここでも、その高貴な精神は、精神の墓場と化した近代ヨーロッパに直面して、より孤独な様相を呈している。だからこそ、彼は、そのような単独者の境涯から、大衆の支配する「現代」を鋭く洞察し、これを、「分別」と「嫉妬」と「水平化」の時代として批判したのである。彼は、新聞や雑誌などのジャーナリズムが大量に撒き散らす低俗な文物の氾濫しだした十九世紀半ばのヨーロッパの精神状況を、人間精神の頹落と受け取ったのである。

一方、文化史家ブルクハルトは、同じ状況に面して、逆に徹底的に過去へ逃避し、もはやその時代のヨーロッパの状況にいかなる希望も託さなかった。彼は、一八四八年の二月革命に面して、その手紙の中で、ヨーロッパに許された未来は、ただ辛うじてローマ帝国時代のような生殺しにされた数十年であろうと述べて、ヨーロッパの未来に対する絶望を語っている。彼は、ヨーロッパを支えてきた三つの精神的力、古代神話、キリスト教そして自由精神が、多くの革命を通して解体していくのを十九世紀にみ、あとはただ文明化された野蛮のみが待っているだけであろうと考えた。彼のルネサンスやギリシア文化への憧憬は、そのようなヨーロッパの文化的頹落からの徹底した逃避だったのである。これら十九世紀半ばから末にかけての思想家達は、十九世紀前半のヘーゲル哲学に反対するという点で、その思想的境涯を共有している。彼らは、古典的ヨーロッパ思想の崩壊を自ら表明するとともに、その不可能を宣言したのである。しかし、彼らは、同時に、ヨーロッパ近代のもたらす文化的頹落に対しても、鋭敏な感受性をもって反対した。この点では、彼らは、芸術における後期印象派同様、崩れ去るヨーロッパ精神の濁流の中にあつて、なお、ぎりぎりのヨーロッパ精神を守ろうとしている。ここには、すでに不可能になってしまった古典的精神が、なお地下水のように流れ込んでいるのである。

心ある良きヨーロッパ人にとっては、十九世紀後半は、そのような頹落の時代と受け取られた。ヨーロッパ文化は、自壊しつつあつたのである。このことは、十九世紀前半にもすでに予感されていたことであつて、この世紀を凡庸な文化と軽薄な人間の時代とみたゲーテをはじめ、古典主義的な精神は、産業主義や自由主義の楽観論に対して、その当時からすでに反対していた。そして、世紀末の思想家達は、古典主義が予感し、自らの終着点とした頹落の時代を、

自らの出発点としなければならなかった。この時代の高貴な文化は、むしろ、この文化的頹落状況にあつて、これを鋭く自覚し、なおも精神の高貴を保持したこれらの孤独な例外者や単独者達によって、わずかに創造されたのだと言ふべきであろう。

7 ヨーロッパの拡大

ヨーロッパ近代文明の世界化

十九世紀後半の思想家達が、暗い運命を予感した当時のヨーロッパは、しかし、表向きは超繁栄の時代であつた。産業革命とフランス革命以来、イギリスやフランスをはじめ、ヨーロッパ諸国は、その国内体制を整備し、産業を興し、豊かな社会を目指して、急激に変貌していった。産業の変革とその膨張、つまり近代化は、十八世紀末にまずイギリスが先頭を切り、ついでフランス、ドイツ、その他のヨーロッパ諸国に波及し、十九世紀中頃には、ヨーロッパ諸国は、その経済力においても、政治力においても、軍事力においても、世界的に優位を占めるに至つた。

かくて、ヨーロッパ諸国は、この優位を背景に、競つて海外に発展していった。ヨーロッパの産業の膨張はあまりにも巨大であつたから、その力は、ヨーロッパ世界のみにとどまりえず、必然的にヨーロッパ以外の世界へと膨張、拡大していったのである。その精神的資質は卑俗であつたが、産業を興し資本を蓄えたブルジョアジー達は、争うように非ヨーロッパ世界へと雄飛し、商売に精を出して、さらに巨万の富を築いていった。ヨーロッパ近代文明の世界的拡大は、主に、このヨーロッパ諸国の経済的膨張によつてもたらされたのである。

宗教と商業主義による進出

なるほど、ヨーロッパ世界の拡大と膨張は、すでに十五・十六世紀のスペイン・ポルトガルの世界進出、つまり大航海の時代から始まつている。これは、確かに、その後のヨーロッパの全面的な世界進出を可能にしたし、ヨーロッパの世界支配を準備した。

しかし、それでもなお、それは、まだヨーロッパ近代の産業技術文明の拡大

ではなかった。それは、主として、キリスト教の宣教という宗教的動機を背景にもった商業主義の拡散にすぎなかった。確かに、このスペイン・ポルトガルの世界進出は、非ヨーロッパの土着文化と多くの摩擦を起こし、常に非ヨーロッパ諸国を植民地化しようとする意図を含んでいた。しかし、そうではあっても、それがもたらそうとしたものは、キリスト教という宗教を中心とした高い文化であって、日本の南蛮文化やキリシタン文化などにみられるように、土着文化との融合の可能性をなお残していた。特にアジアにおいては、伝統文化との衝突があったとしても、融合や反撥をしながら、まだなお均衡を保ちえたのである。

インドなどにおいては、トインビーの言うところによれば、当時はまだ、ポルトガルは、いわばお情けで住まわせてもらっていただけであって、文化的にはそれほど強い影響を与えてはいなかった。日本や中国にとっても同様であり、だからこそ、両国は、鎖国によってヨーロッパ諸国を開放することもできなかった。たとえばそうでなくとも、スペイン・ポルトガルのもたらしたキリスト教文化は、十九世紀の産業技術文明の進出と比べれば、その力と質において異なっていたと言わねばならない。

もともと、中南米においては、スペインの進出力はすさまじく、メソアメリカ文明やアンデス文明はそのため滅亡した。それは徹底的な破壊であったが、これはむしろ前近代的な征服であった。従ってまた、彼らは、この新大陸に、カトリックを支柱とした全く新しい文明を築き上げたのである。

世界中に拡散したこのスペイン・ポルトガルを中心としたヨーロッパ文化は、それ自身が中世的なものであったから、それは、行き着くところで、また中世あるいはせいせい近世をつくつたにすぎなかった。この十五・十六世紀のヨーロッパ文明の拡散は、その後のイギリス・フランスによる進出とは違った前近代的進出にすぎなかったとみてよい。それは、癌細胞のように内部に入り込んできて、非ヨーロッパの伝統文化を崩壊させていくというようなものはなかった。

産業技術文明による進出

ところが、産業革命以後のイギリスやフランスの進出は、これらとは性格を

異にした進出であった。それは、何よりも、巨大な産業技術文明を前面に打ち出した進出だからである。だから、それは、ヨーロッパ自身の伝統社会を壊したのと同じように、非ヨーロッパの伝統社会をも壊した。世界中がヨーロッパ化し、近代化していく時代としての「ヨーロッパイズム」の時代は、ここから始まる。かくて、スペイン・ポルトガルの進出が非ヨーロッパ各地に教会を建てたのに対して、十九世紀以後のイギリス・フランスの場合は、世界中に煉瓦やコンクリートの近代建築を建てた。両者の進出力と破壊力の差は、日本で言えば、「種子島銃」と「黒船」ほどの違いがあったのである。この蒸気船などで象徴されるヨーロッパ近代文明は、癌細胞のように非ヨーロッパを全面的に内部侵食し、席捲して、その物理的力のゆえに、非ヨーロッパがどうしてもそれを受け容れざるをえないようにして、そして、非ヨーロッパの文化を否応なしに壊していく性質のものであったのである。

コラールも、『ヨーロッパの略奪』の中で、こう言っている。

「アジアにおいて支配権を確立するには、(十五・十六世紀の)ヨーロッパの行動力と技術とのすばらしい優越も、十分な幅を利かすわけにはゆかなかった。その上、ヨーロッパ人は中途半端な勝利にあまんずることができず、アジア諸民族をその宗教的信仰の核心にいたるまで、屈服させずにはおかなかった。そのために、ポルトガル人とスペイン人との場合におけるヨーロッパ的・キリスト教的拡張の野心的な意図は、アジア大陸の周辺領域においてのみ成功を収めたにすぎなかった。

ところが、十九世紀のヨーロッパの攻勢は、その目標がこれまでよりも限られてはいたが、それだけに一層強力に行なわれた。この攻勢は、異民族の宗教や道徳習慣などに介意することなく、一途に技術的浸透と経済的開発とに集中された。この点においてはヨーロッパの優越は決定的であり、その軍事的・政治的効果はきわめて直接的であったため、これら異民族は逐次屈服せざるを得なかった」と。

もちろん、十七・十八世紀にも、すでにイギリス・フランス・オランダが、アメリカ大陸やアジアなど、世界中に進出している。これは、確かに、十九世紀以後のヨーロッパの全面的拡大の前段階であった。しかし、これと十九世紀の拡大との違いは、十七・十八世紀が主に商業資本による進出であったのに対

して、十九世紀は産業資本による進出であったという点にある。だから、十九世紀のそれは強力であった。そのため、例えば、十七・十八世紀のイギリスのインド進出においては、インド人との付き合いもまだ同等であったのに対して、十九世紀においては、これが強圧的・支配的となったのである。ヨーロッパの文化史において、十七・十八世紀の世俗化と十九世紀の近代化が区別されたように、ヨーロッパの拡大においても、十七・十八世紀の拡大と十九世紀の拡大とは、商業主義的と産業主義的で区別される。十九世紀のヨーロッパの世界進出は、文字通りの帝国主義的進出であり、列強の進出であった。これが、非ヨーロッパを全面的に屈服に導いたのである。

近代ヨーロッパの拡大の性格

今日、ヨーロッパ的生活様式が世界化したのは、何よりも、産業、経済、科学技術、および、それを基礎づける政治や社会や思想面における飛躍的変革が、ヨーロッパにおいて最初に出現し、これが非ヨーロッパにまで波及したことによる。それはあまりにも強力な実際のな力であったから、非ヨーロッパを刺激してやまなかった。列強の進出といわれるものも、科学技術を駆使した軍事・経済の圧倒的優位のもとでの進出であった。ヨーロッパは、科学技術を背景とした強力な組織力や経済力などにより、非ヨーロッパを圧倒し、しかも、その膨張はとどまるところを知らぬほどであった。産業技術文明は、それ自身膨張してやまないから、ヨーロッパの枠組を超えて、非ヨーロッパにまで拡散し、世界中に充満したのである。

コラールも、『ヨーロッパの略奪』の中で、

「現代への真の入口をなしている一八三〇年から一八四〇年へかけての十年間の時期以来、大陸のヨーロッパ人は、自分の生きる世界を変革しようという課題に、熱狂的に専心してきた。人口を幾層倍にも増加させ、自然征服のための技術の可能性を、予想もしなかったほどに発展させ、生産方法、風俗習慣、精神態度などの革命にのりだした。……十九世紀におけるヨーロッパ人の活動的意欲と驚くべき生産性とは、歴史的優位をいよいよ強固ならしめた……」

と言っている。

つまり、物質主義的力が、ヨーロッパ近代文明の世界中への加速度的な拡大を可能にしたのである。このヨーロッパ近代文明の世界化は、市場開放や原料調達を主にした経済的要求を先頭にしてもたらされた。だが、これは、当然のことながら、その背後の文化、教育、思想、社会構成や政治形態など、近代文化そのものをも世界中に輸出した。ひとつの文明はその構成要素が密接に関連した有機的統一体を成しているから、文明の進出においては、トインビーの言うように、ひとつの要素が入り込むと、他のすべての要素も、水が侵食するように入っていく。そのようにして、ヨーロッパは、一丸となって非ヨーロッパの各地に進出していったのである。

このヨーロッパ近代文明の世界化は、国際事業の世界化にも現われている。例えば、万国郵便連合や万国電信連合、国際オリンピック、ハーグの国際平和条約などは、まず最初にヨーロッパ社会でつくられ、その後世界中に拡散する。そして、非ヨーロッパも、このヨーロッパ的枠組の中に組み込まれていったのである。ここにも、「ヨーロッパの世界化」と「世界のヨーロッパ化」というヨーロッパビズムの現象がみられる。

啓蒙主義の歴史観にも、ヘーゲル、コント、マルクスなどの歴史観にもあった「ヨーロッパ中心史観」は、とりもなおさず、この十八・十九世紀のヨーロッパの世界的優位の表現であった。歴史観というものも、歴史の外にあるのではなく、歴史の内にあるのであって、従って、歴史観も歴史の動きによって規定される。歴史が歴史観を規定するのである。この近代ヨーロッパ人達の「ヨーロッパ中心史観」も、産業主義によるヨーロッパの世界支配に支えられていたのであり、これは、ヨーロッパの目にみえる崩壊、つまり第一次大戦までは持続されたのである。

マックス・ウェーバーは、ヨーロッパ文化が世界的な意味をもった源泉を、その文化が内包していた「内的合理性」に見出した。確かに、このヨーロッパ文化の合理性は、特に十九世紀の産業主義と結びついて、ヨーロッパ文明に巨大な膨張力を付与した。同様に、コラールは、「ヘキリスト教の此岸化」というところに、ヨーロッパ近代文化の特異性を見出し、そこに、科学、政治、経済の世界的発展のエネルギーをみている。この現象は、十九世紀の産業主義の発展とともに現われてきた現象であって、ヨーロッパの世界的拡大は、これによって

もたらされたとと言えるであろう。それは、何よりも、経済を中心とした世俗的な力であったから、非ヨーロッパも、どうしても、それに同化せざるをえなかったのである。ヨーロッパ近代文明が世界中に拡大し、非ヨーロッパをも組み込んで、地球上をその産業技術文明によって覆い尽くすという意味での「ヨーロッパ」の時代は、このようにして到来したのである。

第三章 非ヨーロッパのヨーロッパ化

—ヨーロッパ近代文明の受容とヨーロッパへの反撃—

1 十九世紀以前のヨーロッパ化

十五・十六世紀のヨーロッパ化

ヨーロッパに近代産業技術文明が最初に登場し、それが、ちょうど波が拡散していくように、非ヨーロッパにまで拡大して、非ヨーロッパがヨーロッパ化の波に洗われたというのが、ヨーロッパビズムの時代の特徴である。

もつとも、非ヨーロッパがヨーロッパと接触したのは、多くの場合、十五・十六世紀のスペインやポルトガルの世界進出に始まる。確かに、十五・十六世紀のスペイン人やポルトガル人による最初のヨーロッパの進出は、十九世紀以後のヨーロッパの拡大の前提をなすものである。しかし、これはまだヨーロッパビズムの段階ではない。

十五・十六世紀のヨーロッパの拡大は、ルネサンスと宗教改革というヨーロッパ社会の大きな変革を前提している。しかし、十九世紀以後の産業技術文明の膨張による急激な変革から比べると、なおまだ、その変革はヨーロッパの歴史的伝統とその社会の有機性を保持していた。従って、そのようなルネサンスと宗教改革期の文化を背景にした十五・十六世紀のヨーロッパの拡大も、なおそういう有機的な背景をもっている。実際、このヨーロッパの拡大において活躍したポルトガルやスペインの活動は、主にキリスト教の布教を看板にして、特に、商業活動と植民によって利益をあげることを目的としていたから、十九世紀以後の巨大な産業技術文明の怒濤のような進出とは違っていた。

なるほど、ラテン・アメリカでは、十五・十六世紀のスペインやポルトガルの進出は苛酷を極め、それは当時の土着の文化を徹底的に破壊したが、少なくとも抵抗力をもったアジア諸国では、この十五・十六世紀のヨーロッパの進出の文化的影響は、それほど破壊的なものではなく、土着の文化を席捲するという程のものではなかった。アジア諸国においては、十九世紀のヨーロッパの進

出のように、社会構造全体を揺がすほどのものではなかったのである。

例外は、ラテン・アメリカの場合であるが、逆に言えば、ここでは、土着の文化は席捲されてしまい、インディオの伝統文化が破壊されてしまったために、土着化したスペイン人やポルトガル人達は、そこにまた、キリスト教を中心とする自分達の伝統的文化を、ヨーロッパ近世文化の延長としてつくりあげていくことができたと言えよう。

ルネサンスと宗教改革および地理上の発見時代のヨーロッパ文化は、中世以来のキリスト教文化の一変転にすぎず、(近代)がここから始まったわけではない。確かに、この辺から初期資本主義の発達はかなりの程度みられるが、それとても、キリスト教を中心としたヨーロッパの伝統社会そのものを壊すものではなかった。

十七・十八世紀のヨーロッパ化

十七・十八世紀の非ヨーロッパのヨーロッパ化は、主に、スペイン、ポルトガルに代わったオランダやイギリス、フランスの西ヨーロッパ諸国の拡大進出によってもたらされたが、この場合も、彼らをもたらしたものは、当時のヨーロッパの世俗文化にすぎなかった。ヨーロッパでは、宗教戦争後、宗教の力は弱まり、むしろ、商業活動や自然科学的知識の探究など現世的な興味を追求する世俗文化の時代に入っていた。だから、彼らは、この世俗文化を非ヨーロッパにもたらし、どちらかというところ、キリスト教の布教よりも商業活動に熱心であった。なるほど、これは、後の産業主義を背景とするヨーロッパの進出を用意はしたが、まだ、この段階では、非ヨーロッパの伝統を破壊するものではなかった。

例えば、トルコは、海上の貿易路をヨーロッパ諸国に奪われ、自国の衰退があらさまになったため、ヨーロッパ近世の文明を積極的に受け入れようとした。十七世紀後半から、トルコは次第にヨーロッパ諸国に対して敗北することが多くなり、否応なしにヨーロッパの軍事的優位を認めざるをえなくなったからである。そのため、十八世紀に入ると、ヨーロッパ人の支援による砲兵・工兵軍団の設置、幾何学校や海軍数学学校の開設など、ヨーロッパを模範にした軍事改革を行なった。それは、ロシアのピョートルほど巧みなものでも、全面的な

ものでもなかった。トルコは、なお、それ以前の自国の業績を過信していたために、近世ヨーロッパ諸国の力、およびロシアに対する技術的劣勢に気づかなかった。逆に言えば、彼らは、なお自分達の文化的同一性の中に生きていたし、イスラムへの誇りを失ってはいなかったのである。

一方、インドにおいては、ヨーロッパ諸国の進出は相当なものであった。ポルトガル、スペインから海上貿易を奪ったイギリスは、十六世紀末から東洋貿易に乗り出し、特にインドに進出して、十七世紀末までに、いくつかの都市に植民地を建設した。一七五七年のブラッシーの戦いでは、進出してきたフランスと戦い、インドのフランス勢力を追放、インド支配の基盤をつくる。

しかし、このブラッシーの戦いまでの二世紀半は、ヨーロッパ諸国の進出も商業活動に限定されており、インドにとってもそれほどほどの衝撃ではなかった。ムガル帝国も、進出してきたイギリス人に対して、まだなお上位に立っていた。なるほど、かなりの都市を植民地化されたが、ムガル皇帝としては、単に領地を貸し与えているといったほどの気持であった。ムガル帝国にとつて、少なくともアウランゼブ死後、衰退するまでは、ヨーロッパの進出はさして重要ではなかった。イギリスの進出も、インドの共同社会を壊すまでには至らず、インドはなおそれ自身の内部要因で動いていたのである。

当時は、ヒンズー教の地盤の上に、これと併存する形でイスラム教が栄え、ムガル帝国はイスラム王朝として繁栄を極めていた。ただ、その衰退とともに、ヒンズー教徒やシーク教徒が割拠し、この宗教的対立や土候国の対立が、ヨーロッパ諸国の植民活動を可能にしまったのである。しかし、まだ、ヨーロッパ諸国の進出は、このヒンズー教とイスラム教の併存によって成立していた当時の社会、文化にとって、決定的なものではなかった。イギリスのインド進出の性質が変わっていくのは、十八世紀末からとみるべきであろう。

なるほど、東南アジア、特にインドネシアでは、ヨーロッパの進出、つまりオランダの進出はとどめがたいものがあった。オランダは、十七世紀初めに東インド会社を設立、イギリスと争いながら、東インド各島を征服、インドネシア経営に優位を占め、十七世紀中ごろ最盛期を向かえる。このオランダの進出に対して、ジャワのマタラム王国やバンテン王国は反抗を試みたが、どれも失敗、その内乱を利用して、かえってオランダは領土を拡大、一七七七年にはジ

ヤワ島全土を征服した。このようにして、インドネシアは、オランダの植民地になるという形で、近世ヨーロッパを受け容れざるをえなかった。

しかし、それはどこまでも政治的支配にすぎず、ジャワの民衆達はほとんどオランダ人の存在を意識せずに生きていた。彼らにとっては、統治者が異人種に代わったというだけで、社会の構造的変革はまだ起きてはいなかった。彼らのイスラム教を中心とした生活形態、文化にはなら変わりなかったたのである。政治的な力が、次第に社会生活の基礎をなす文化、つまり、価値観・世界観にまで影響を及ぼすようになるのは、これ以後、一八〇〇年前後のヨーロッパの産業主義の登場と、その非ヨーロッパへの波及があったからのことであった。

中国においても、十七世紀に入って明から清へ王朝が交代したが、文化的には、清代も、明代と同様、キリスト教の宣教師を通じてヨーロッパ文化が流入した。その知識は、地理学、天文学、砲術、洋画の手法、建築術などに及んだ。しかし、キリスト教に関しては、中国人信者が、孔子崇拜や祖先崇拜に関する中国古来の儀式に参加すべきか否かの問題をめぐってキリスト教諸派が対立。フランススコ会派やドミニコ会派など否認派は、キリスト教の布教が禁止され、やがて、布教の許されたキリスト教諸派も制限され、そのため、キリスト教の布教は極めて困難になった。この典札問題にも現われているように、キリスト教の流入は、儒教・道教を基盤とするシナ文化にとって相当に異質であった。従って、このキリスト教禁止は、伝統的文化を防衛しようとする反ヨーロッパ主義の現われと言ってよいであろう。この点でも、日本の場合と酷似している。しかし、ヨーロッパ諸国の進出は、この段階では、まだそれほど危険度の多いものではなかったし、それほど強力でもなかった。だから、この時期には、中国は、このヨーロッパ諸国の進出を阻むこともできたのである。中国は、ヨーロッパを受け容れるにしても、排撃するにしても、経済的にも、政治的にも、文化的にも、まだなおその主体性と同一性を十分保ちえた。

日本でも、江戸時代の長い鎖国下にもかかわらず、長崎の出島におけるオランダ人との交流を通して、特に、ヨーロッパ近世の学問や知識に対する関心という形で、新しいヨーロッパの世俗化時代の文物は相当程度流入していた。蘭学という名で行なわれたのが、それであった。その知識は、農学、治水、天文、

医学、地理、化学、植物学、物理学、兵学に及んだ。これらの世俗的知識は、江戸幕府の奨励の他、オランダ医官や蘭学者の私的な教育活動によって普及したものであり、鎖国下とはいえ、このヨーロッパ近世の知識の普及にはめざましいものがある。そして、この洋学の普及は、日本の近代化の準備段階として、わが国の科学や技術の発展に寄与した。

江戸時代においては、いわば、表向きの反ヨーロッパ主義のたてまえのもとで、ヨーロッパ主義はかなりの程度広まっていたと言つてよいであろう。この多岐にわたる洋学の普及は、しばしば幕府の鎖国政策への批判ともなったために、幕府は後これを度々抑圧、しかし、これらの動きは、結局、幕末の「開国」つまりヨーロッパ化政策への大きな潮流へと連なつていった。

わが国の江戸時代は、ヨーロッパやロシアの十七・十八世紀と同じく、世俗化の時代であつて、経済的には初期資本主義が発達し、文化的には町人文化が興隆し、学問においても実証的学問や実際の学問が重んじられ、かくて中世的な宗教中心の生活から世俗中心の生活への転換がみられた時代であつた。ヨーロッパ風の学問、つまり洋学の発達は、このような時代にあつて、実用的知識の流布に大きく貢献した。そして、これは、後の幕末から維新にかけてのヨーロッパ近代文明の大きな流入に対して、その準備の役割を果たしたのである。しかし、江戸時代におけるヨーロッパ近世文化の流入は、決して日本の文化的地盤そのものを壊すものではなかつた。日本のヨーロッパ主義者、つまり洋学者達も、どこまでも伝統的な儒教精神を足場にもつて、ヨーロッパの学問を学んでいたのである。

ここで特筆すべきは、この時期のロシアであろう。ロシアに近世のヨーロッパ文化が流入し、ロシアがヨーロッパ化していくのは、十七世紀に入つてからであつた。十七世紀初頭のポーランド軍によるモスクワ占領は、ロシアに衝撃を与え、ロシア人にロシアの立ち遅れを自覚させた。ピョートルの急激なヨーロッパ化政策は、このショックが遠因になつてゐる。

ピョートルは、一六九七年から八年にかけて、ヨーロッパ旅行を敢行し、オランダやイギリスで造船術や解剖学を学び、商工業を調査して、ヨーロッパ文化の輸入に努め、ロシアの後進性を打破しようとした。そのために、彼は、旧軍ストレルツイを絶滅して、ヨーロッパ式の近代軍をつくり、封建議會を廃し

て、中央集権化をはかった。また、国営工場を設立し、産業と貿易を奨励し、
（西方への窓）ペテルスブルクを建設し、ヨーロッパ文化摂取の拠点にした。ビ
ョートルのヨーロッパ化政策は、他の非ヨーロッパ諸国に比して、徹底したも
のであった。彼は、ヨーロッパ化政策を成功させるためには、これを生活の全
分野に及ぼさねばならないと考え、ロシア人の髭を剃り落とすことから、ヨー
ロッパ化運動を電撃的・心理的に行なった。

しかし、このようなヨーロッパ文化の急激な流入は、異なった種類の文化と
の出会であったから、同時に、相当な軋轢を及ぼし、それに対する反抗も招い
た。それは、あらゆるヨーロッパ化に対して、ロシア本来の伝統と独立を保全
しようとする運動となって現われた。

ロシアは、もともと、東ローマ帝国の正統な後継者であり、正教キリスト教
の正統を引き継ぐものという自覚をもっていた。それは、十五世紀に、ロシア
正教キリスト教世界を政治的に統一したときから始まり、一五八九年にギリシ
ア正教から独立してロシア総主教座を創設したとき、頂点に達する。だが、そ
の後、ロシアは、ヨーロッパ近世文明が流入するという大きな脅威を被ること
になる。ロシアの（反）ヨーロッパ主義者は、ロシア正教の正統を守るべく、こ
のヨーロッパ近世文明の流入に対抗しようとした。

それは、まず、一六五四年のニコンの教会改革に反対することから始まった。
ロシア正教の典礼と宗規を改正しようとしたこの改革に、正教からの逸脱をみ
た修道僧や信徒は、これに強硬に反抗した。それに対して、政府は、これを徹
底的に弾圧したため、教会は二つに分裂した。ビョートルの世俗化政策は、
このニコンの改革の延長上に成立していたため、分離派は、彼を（反）キリスト
の頭目とみ、ビョートルの奨励したヨーロッパの技術に対しても反撥した。彼
らは、ロシア正教の信仰を厳正に守ることによってのみ、ロシアは救われると
信じたのである。

（ヨーロッパ主義者）ビョートルは、この分離派を徹底的に抑圧した。ビョ
ートルは、ロシア帝国を、ロシア正教キリスト教国家から、近世ヨーロッパ世界
に属する世俗国家につくりかえることを目標としていたからである。ニコンの
教会改革と教会分裂は、ビョートルの世俗化政策の前段階だったとみてよいで
あろう。あるいは、ロシアにおいても、ヨーロッパと同様、宗教的分裂が世俗

化の引金となったとも言えるであろう。

しかし、教会分裂によって生じた伝統派を弾圧して徹底的に行なわれたビョートルのヨーロッパ化政策は、どこまでも世俗化政策であり、非宗教化であり、決して反宗教ではなかった。ヨーロッパの世俗化においてもそうであったように、それは、ロシアの有機的な文化構造を全面的に破壊するものではなかった。ビョートルのヨーロッパ化政策にあつては、ヨーロッパ近世の世俗化された文物、世俗的知識、政治形態が流入したにすぎなかった。その背後には、なおロシア正教を中心とした文化構造が隠然として存在し、そのもとに西ヨーロッパの世俗文化が根づいたのだといつてよい。むしろ、ロシアは、世俗的なヨーロッパ近世文化が入ってくることによつて、より文明化し発展したという面もある。ビョートルの政策は、ロシアのひとつの発展であつて、ちょうど日本の江戸時代のように、ロシアの世俗文化を形成することに寄与した。それは、なお、ロシアにとつて長い文化史の展開のうちのひとつであつた。

もちろん、他の文明を受け容れることは、その文化にとつては、ひとつの危機である。十七・十八世紀のヨーロッパ近世の世俗的文化を受容することは、ロシア正教文明にとつては、確かに尋常ならざる状況ではあつたであろう。しかし、これは、十九世紀以後の産業主義に支えられるヨーロッパ近代文明を受容するのは、質的に異なつてゐる。十九世紀のそれは、ヨーロッパのみならず、非ヨーロッパの伝統をも破壊するものであつたからである。

十七・十八世紀の非ヨーロッパのヨーロッパ化は、ヨーロッパがもたらしたものがどこまでも世俗文化にすぎなかつたから、それは、非ヨーロッパに破壊的に働くものではなかつた。むしろ、非ヨーロッパ、特にロシアや日本、中国やトルコは、いろいろなルートでもたらされたヨーロッパの世俗文化を、自分達の伝統的文化の中に取り入れ消化していった。十五・十六世紀および十七・十八世紀のヨーロッパの進出は、確かに十九世紀以後のヨーロッパビズムの時代の先駆であり、それを準備するものではあつたが、それ自身は、一部の例外を除いて、破壊的なものではなかつたとみなければならぬ。

2 十九世紀のヨーロッパ近代文明の衝撃

ヨーロッパ近代文明の非ヨーロッパへの侵入が抜き差しならぬ問題になるのは、十九世紀以後からである。それは、ヨーロッパの産業革命と自由主義革命という経済・政治・社会上の大きな変革を背景にもっている。その産業主義や科学技術の力、政治や軍事の力、思想や文化の力は、それまでと比べものにならないほど強力であった。これが、非ヨーロッパに拡大して非ヨーロッパの伝統社会を急激に変容していったのである。それは、多くの場合、軍事的・政治的衝撃によって始まり、次第に文化的深層にまで及んだ。

ロシアの衝撃

例えば、ロシアが、ヨーロッパの産業革命やフランス革命の影響を受け、産業資本主義と自由主義の洗礼を受け、近代的なしかたでヨーロッパ化していったのも、十九世紀に入ってからのものであった。なるほど、ヨーロッパ化は、ロシアでは十七世紀のころから始まって、その後、進展してはいた。しかし、ヨーロッパ社会の大変革の影響がロシアに入ってきたのは、一八〇〇年代以後である。そして、これが、ロシアの社会を根本的に変革していった。

一八一二年のナポレオンの侵入は、ロシアがその政治的独立を根底から危うくされた大きな衝撃であった。しかし、ピョートル以来のそれまでのヨーロッパ軍隊の創設努力の結果として、ロシアはこの戦いに勝つことができた。そのため、これは、むしろロシアの優秀性を主張する国粋派の抬頭を招き、他方、ドイツ・ロマン主義と結びついたスラブ・ロマン主義の抬頭をもたらした。そのため、これは日本の黒船ショックのように、急激な近代化への要請を呼び起こしはしなかった。

しかし、後、ナポレオン解放戦争に従事した貴族士官達は、ヨーロッパの自由の空気を吸い、帰国後、ツァー体制を議会議会主義的立憲君主制に改めることを目指す自由主義運動を行なうようになる。一八二五年に起きたデカブリストの乱は、これら自由主義貴族の起こした革命企図であった。なるほど、これは失敗したけれども、それは、一八〇〇年以後醸成されていたロシアの近代ヨーロッパ化の前兆ではあった。

産業革命とフランス革命から始まるヨーロッパ近代文明がロシアに流入してくるのは、この一八二五年のデカブリストの乱前後からである。そして、この

ヨーロッパ近代の受容が決定的になるのは、ロシアが、一八五六年のクリミア戦争で、フランスやイギリスの近代軍との戦いに敗北してからのことであった。ここではじめて、ロシアは、ヨーロッパ近代文明の圧倒的優勢を自覚せざるをえなかった。これは、ロシアにとって大きなショックであった。非ヨーロッパのヨーロッパ化は、多くの場合、軍事的に自国の弱さを知らされることによつて、急速化する。それが、軍備の近代化を要請し、次第に、近代ヨーロッパ風の政治制度、産業組織の導入へと拡大していくのである。

日本の黒船ショック

日本が否応なしにヨーロッパを受け容れ、ヨーロッパ化していかざるをえなくなったのも、一八五三年の黒船来航のショックを切っ掛けにしてであった。もちろん、それ以前にも、一八〇〇年前後から、ヨーロッパ諸国、特にイギリス船が出没し、またロシアやアメリカの船も、盛んに通商を求めて来航していた。これは、十九世紀以後のヨーロッパ近代文明の世界的拡大というヨーロッパイズムの世界的潮流のひとつの現われであった。

なるほど、一八五三年の黒船来航は、アメリカの日本に対する門戸開放要求に他ならず、この点では、正確にはヨーロッパの襲来とは言えないかもしれない。アメリカは、必ずしもヨーロッパそのものではないからである。しかし、アメリカは、同時に、ヨーロッパの近代産業技術文明がある意味で純粹なしかたで推し進めた国でもあった。だから、日本からみれば、それは、ヨーロッパ近代文明の襲来以外の何ものでもなかった。同じことは、ロシアについても言える。ロシアは、ヨーロッパからみれば、地理的に言っても、文化的伝統から言っても、非ヨーロッパである。しかし、日本からみれば、ロシアは、ヨーロッパ近代文明を背負ってやってきている以上、一種のヨーロッパと受け取られる。実際、日本にとっては、アメリカの黒船来航以来、イギリスやフランスそしてロシアが、ひとかたまりになって、同じ黒船で門戸開放を要求してやってきたのである。

これ以来、日本は、決定的にヨーロッパイズムの時代の波にもまれるようになる。日本はこのショックを機に極度に動揺し、日本の国論は、開国論つまりヨーロッパ主義と、攘夷論つまり反ヨーロッパ主義の二つに分裂した。幕府は、

アメリカの圧力に屈し開国を決断、後、イギリス、フランス、オランダ、ロシアに対しても門戸を開放した。それに対して、攘夷論者つまり反ヨーロッパ主義者は、尊皇論と結びついてヨーロッパ排撃運動を展開するようになる。

この攘夷論は、強硬なヨーロッパ列強の進出に対する自国の独立の保全意志を表現したものであり、わが国の政治や文化の根源である天皇擁護論と結びついていたのはそのためである。尊皇思想は江戸時代の初期からすでに出現していたが、これが政治的な運動としてはっきりした形で表出されてきたのは、対ヨーロッパ、つまり攘夷との関係が生じてからであった。

だが、この尊皇論と結びついた攘夷論は、その後、ヨーロッパ諸国との部分的交戦によって、ヨーロッパ諸国の排撃が不可能であることを知らされ、それ以来、国内の体制を充実強化した上でヨーロッパ諸国に対抗しようとするようになる。そのため、これは、むしろ弱体化した幕府を倒そうとする討幕論に傾いていった。日本の幕末から維新の時代は、日本がヨーロッパ諸国の激流の中に巻き込まれた時代であり、ここから日本にとっての〈近代〉あるいは〈現代〉が始まったと言えよう。

中国のアヘン戦争の衝撃

中国が、否応なしにヨーロッパ諸国の大波をかぶって、その主体性を保つことが不可能になり、ヨーロッパ諸国を追い返すことができなくなったのも、十九世紀になって、産業革命を経験したヨーロッパ諸国の産業主義が流入してくるようになってからであった。ここでは、もはや宗教は背後に隠れ、それに代わって物量や軍事面が出てくる。それは、具体的には、十九世紀半ばのイギリスとのアヘン戦争という形で現われたが、このアヘン戦争の敗北を切っ掛けにして、中国はそれまでの主体性を失なって極度に動揺し、その結果、否応なしに近代ヨーロッパを受け容れざるをえなくなったのである。これが、中国にとってのヨーロッパ産業技術文明の最初の侵入であった。それは、日本の黒船来航に当たるひとつの衝撃であった。しかも、不幸なことに、ロシアや日本と違って、それは、ヨーロッパ諸国の共同植民地になるという形においてであり、自主的選択によるものではなかった。

十九世紀中頃に起きた太平天国の乱は、それ自身は、外来政府である清朝に

対する漢民族の農民反乱であった。しかし、この背景には、ヨーロッパ列強の中国進出による清朝の権威喪失や、ヨーロッパ産綿製品の流入による農村の荒廃などがあり、ヨーロッパの流れと無関係ではない。しかも、清朝の無力な正規軍に代わって、この太平天国の乱を鎮圧するために組織された軍隊には、各地の豪族が組織した義勇軍など多くあったが、なかでも、上海の買弁達の資金でつくられた軍隊は、ヨーロッパ風の近代的組織をもった最初の軍隊であった。この時期に洋式軍隊が初めて形成されたということは、その後の軍の近代化・ヨーロッパ化の切っ掛けとして、大きな意味をもつものと言えるであろう。

東南アジア諸国の開国と植民地化

他方、東南アジア、特にタイでは、アユタヤ王朝滅亡後成立したチャクリ王朝が、一八五五年、香港総督ポウリングを通して、イギリスとの友好通商条約を締結、これを切っ掛けにして、その後、アメリカをはじめ他のヨーロッパ諸国とも同様の条約を締結し、タイは全面的に開国した。この開国によってもたらされたヨーロッパの近代文明は、タイの伝統社会を揺るがし、タイの近代化を促す外発的契機となった。そして、ヨーロッパ列強の圧力のもと、国家体制を再建すべく、その対策が要請された。実際、十九世紀の前半以来、すでにピルマ（ミャンマー）は、イギリスとの数度に及ぶ戦いの結果、イギリスの植民地になってしまっていた。

一方、ヴェトナムでは、十九世紀初頭、阮福映が、フランス人神父ビニョーの援助で阮朝を創設、中国の諸制度を採用して国家建設をはかったが、ヨーロッパ諸国に対しては一貫して鎖国政策をとった。さらに、儒教を背景にしたヴェトナムの文人とキリスト教の宣教師が対立、そのため、儒教を重んじた明命帝はキリスト教の布教活動を禁止した。これらの動きは、清や日本同様、ヨーロッパの近代文明の襲来に対する伝統の側からの反撃であり、反ヨーロッパ主義的な動きであった。

しかし、中国のアヘン戦争で、清朝がヨーロッパ諸国の圧倒的力の前に屈したのを見た阮朝は、これを脅威と感じて、ヨーロッパ諸国と和解しようとしたが失敗。その後、フランス軍によるダナン砲撃事件を出発点にして、ヴェトナムはフランスの艦砲外交の前に次々と屈し、一八八七年には、フランスの植民

地にされてしまった。ヴェトナムは、植民地化という形で、ヨーロッパ近代を受け容れざるをえなかったのである。

インドの植民地化

インドにとつて、ヨーロッパの進出、特にイギリスの進出が抜き差しならぬ問題になるのは、十八世紀の末ごろからである。その点で、ブラッシーの戦いでイギリスの勝利と、その後のイギリスの支配権の拡大は、大きな意味をもっている。これをメルクマールにして、インドも、植民地化という形で、次第にヨーロッパ近代文明に侵食されていくようになる。

実際、十八世紀末ごろから、イギリスは、産業革命を他のヨーロッパ諸国に先駆けて開始し、生産力を増大させていた。それにともなつて、イギリスはインドを完全支配するようになっていく。トインビーも、『歴史の研究』の中で、むしろ初めのうちはイギリス人もインド社会に溶け込んでいたが、十八世紀の後半以降溶け込まなくなり、次第にイギリスの近代文明が優位を占めてくるようになる有様を叙述している。現に、この時期に、イギリス人のインド出向の足も、帆船から汽船に転換している。インドのヨーロッパ化の観点からすると、これは、イギリスの支配が商業主義的なものから産業主義的なものに変化し、その支配が政治的・文化的なものにまで及んでいったことを示す。このころから、イギリスは、産業技術文明の絶対的な優位を背景にして、次第に威圧的になっていったのである。

事実、イギリスは、一七七三年にはベンガル地方の永代租借を取り付け、さらに、産業主義の進展にともなつて、一八一三年には東インド会社の貿易独占権を廃止して、自由貿易を推奨し、インドをイギリス本国の自由市場として開放するに至つた。こうして、一八二〇年ごろまでには、大部分の藩王国がイギリスに降り、ムガル皇帝も東インド会社の年金受領者となつた。また、数度に及ぶマラータ戦争やシーク戦争によって、イギリスはマラータ同盟やシーク教徒を破り、一八四九年までにインドの国土の大部分を占領し、インドの植民地化は完了した。

中東諸国の衝撃

トルコが十八世紀前半の部分的改革の無力を悟ったのは、十八世後半の露土戦争の敗北によってであった。これを契機に、セリム三世を中心に、帝国を復興するため、より大がかりな改革に乗り出した。それは、「新体制」と言われ、トルコの本格的なヨーロッパ化はここから始まる。時あたかも、ヨーロッパ諸国は、産業革命や自由主義革命によって、近代的な経済組織や政治組織を構築しつつあるときであった。

一方、エジプトは、トルコの属領となっていたため、ヨーロッパ諸国との関係もトルコとほぼ同じ関係をもっていた。だが、属国化していたということもあって、十八世紀後半の露土戦争でのトルコの敗北も、ナポレオンのマルタ占領も、イギリス艦隊の出没も、エジプトはそれほど脅威だとは受け取らなかった。

しかし、一七九八年のナポレオンのエジプト侵入の際のアブキール湾の海戦は、エジプトにとって、日本の黒船ショックと同じようなショックを与えた。フランス人の侵入と、このフランス人を追って現われた二十五隻のイギリス船に対する驚きと戸惑いについて、トインビーは、『試練に立つ文明』で、アル・ガバルデイの回想録を引用して生々しく報告している。アル・ガバルデイは、さらに、フランス人が見せた科学器械類に驚嘆し、その現地で見せた公正な裁判のやり方に感服している。エジプト人は、このとき、初めて近代ヨーロッパ文明に対する脅威を自覚したのである。ナポレオンは、大陸のヨーロッパ諸国に近代自由主義文明を輸出したばかりでなく、ロシアやエジプトなど、非ヨーロッパにも衝撃を与えた。ナポレオンの襲来は、エジプトにとって近代ヨーロッパ文明の進出に他ならなかったのである。かくて、日本同様、この衝撃が切っ掛けになってエジプトの激動が始まる。

アフリカの衝撃

アフリカにとってのヨーロッパ近代文明の衝撃は、他と違って、内陸部へのヨーロッパ人達の探検隊の進出という形でもたらされた。それまでのヨーロッパ人達の進出は、どちらかと言えば、海岸部が主であったが、十九世紀になると、ヨーロッパ諸国は、暗黒大陸といわれたアフリカに対する具体的知識を求めて、盛んに内陸部に侵入してきた。沿岸地帯の首長達は、ヨーロッパ人から

銃火器を手に入れるために、内陸部で捕虜をつかまえてこれを奴隷として売り、利益を得ていたが、この利益がヨーロッパ人にとられるのを恐れた。十九世紀のヨーロッパ人のアフリカ探検熱は、新しい市場を求めるヨーロッパの産業主義に支えられたものである。この探検隊のもたらした知識は、奴隷貿易が罪悪であるという認識をもたらした。しかし、やがてヨーロッパ諸国の進出に利用されていった。また沿岸部においても、イギリスやフランスの進出は激しく、次第にその植民地とされていった。

非ヨーロッパ諸国は、このような一連の大きな衝撃を通して、ヨーロッパ近代文明の優位を自覚せざるをえなかった。これらのヨーロッパからの衝撃の背後には、当時ヨーロッパで進展しつつあった産業主義と自由主義に支えられた全く新しい文明があった。そして、これ以来、非ヨーロッパのヨーロッパ化は、二つの方向に分かれる。ひとつは、自主的ヨーロッパ化であり、もうひとつは植民地化、あるいは植民地政策の強化としてのヨーロッパ化である。

3 自主的ヨーロッパ化

上からの近代化

ヨーロッパ近代文明の襲来という大きな衝撃を受けた非ヨーロッパ諸国のうち、特にロシアや日本、そして、一時期の中国、タイ、トルコ、エジプトなどでは、外から襲ってきた圧倒的なヨーロッパ近代文明に対して、それを否定なしに受け容れなければ生きのびていけないという自覚のもとに、このヨーロッパの近代文明を受容して自立をはかるという方向がとられた。つまり、積極的なヨーロッパ化による近代化策がとられたのである。ヨーロッパの近代化は、ヨーロッパ自身の内部構造からいわば内発的に起きたものであったが、非ヨーロッパの近代化は、いわば外発的に強制されるという面があった。この点で、ヨーロッパと非ヨーロッパでは全く異なっている。それにもかかわらず、否、それゆえにこそ、これらの非ヨーロッパ諸国は、生きのびていくために積極的な近代化策をとったのである。

しかも、非ヨーロッパのこの自主的な近代ヨーロッパ化は、大概共通した特徴をもっている。そのうち、最大の特徴は、それがどこでも「上からの近代化」

であったという点である。外発的な近代化の場合、経済をより発展させ、軍備を強化し、政治、社会、文化一般にわたって全面的に近代化するには、上からの近代化によって急速にヨーロッパ化する以外に方法はなかった。これが、ヨーロッパと非ヨーロッパの違いであって、内発的に近代化の要請が起きてきたヨーロッパと、外発的に近代化を行なわざるをえなかった非ヨーロッパとの相違点である。当然、両者は異なっており、非ヨーロッパの場合、下から起きてこなかったからといって非難することはできないであろう。むしろ、外発的にショックを受けて、上から近代化せざるをえなかったというのが、非ヨーロッパの共通した運命だったのである。

ロシアと日本のヨーロッパ化策

例えば、ロシアでは、クリミア戦争の敗北を切っ掛けとして、アレキサンダル二世の治下、一八六一年に農奴解放が行なわれ、その他、地方議会の設置、司法制度の改革、大学令の発布、国民皆兵制の創設、貨幣の整備、鉄道敷設、出版の自由の保証、教育改革など、急速な上からの近代化策が行なわれる。

これを境にして、ロシアの産業は、急激に発展していく。一八八〇年代にはこれが本格化、世紀末にはロシアの産業主義が高度の成長をみるようになった。

同じく、日本の明治新政府も、積極的にヨーロッパ近代文明を取り入れた。当時は、ヨーロッパ諸国の植民地獲得の活動がアジア各地で活発に行なわれた時代であった。そのため、日本が植民地化しないためには、積極的にヨーロッパの近代的な技術や組織を、軍事、産業、政治、社会一般にわたって導入し、日本自身を早急に近代的国民国家に仕上げる必要があったのである。明治政府は、〈富国強兵×殖産興業〉をスローガンに、近代産業の育成をはかり、中央集権的官僚機構を整備し、近代的常備軍を組織して、上からの近代化を急いだのである。明治新政府が行なった近代化政策、内閣制度の創設、版籍奉還、廃藩置県、国民皆兵制の創設、四民平等策、交通・通信網の整備、金融制度の改革、学制の公布による国民皆教育の実施などは、組織だった近代国家を形成し、生産力を高め、生活水準を上昇させるのに適った政策であった。

しかも、この各方面にわたる上からの近代化策が、日本では、相当早い速度で進展したのは、江戸時代にすでに発達していた諸制度の前提があった。明

治新政府は、これらを大きく再編成するだけでよかったのである。こうして、多方面にわたる近代化政策を講じたために、日本の近代化は急速に進展し、明治の後半には、重工業を中心とする第二次産業革命を完了、ヨーロッパ諸国と対等の位置を占めるに至った。

中国の洋務運動と変法自強運動

アヘン戦争後の中国においても、当時無力化しつつあった清朝は、同治帝のとき、ヨーロッパ諸国との親善をはかり、ヨーロッパ近代文明の摂取に努め、国家体制の再建を目指した。この「同治中興」における洋務運動は、ヨーロッパ式軍制を採用し、造船所を建設し、産業構造を整備し、留学生を派遣し、外国語学校を開設するなど、ヨーロッパ主義にもとづく動きであった。十九世紀後半以降、中国も、日本同様、ヨーロッパ近代文明を受け容れることによって自立していこうという方向に変わったとみてよい。

しかし、中国は、近代ヨーロッパを受け容れて富国強兵を実現していくには、ヨーロッパの実用的な技術のみを取り入れるだけでよいと考え、中国の社会構造や、政治組織、文化の面では、頑固にその伝統を墨守し、これを改変しようとはしなかった。そのため、中国のヨーロッパ化には自ずから限界があり、この段階では、まだ全面的なヨーロッパ化には至らなかった。

ところが、一八九四年に朝鮮の内乱を切っ掛けに起きた日清戦争が、清の敗北に終わる。なるほど、これは非ヨーロッパ同志の戦いではあったが、しかし、清にとつては、これは、ヨーロッパ化した日本の進出であり、同時に、日本という非ヨーロッパを通してのヨーロッパ近代文明の進出でもあった。清は、ヨーロッパ諸国ばかりでなく、非ヨーロッパ・ロシアにも、そして、同じアジア人の小国・日本にまでも進出され、近代ヨーロッパ化に遅れた自国の過誤を否定なしに自覚せざるをえなかった。実際、日清戦争の敗北は清朝の無力を世界に暴き、そのため、列強は競って中国分割に乗り出し、列強による中国の共同植民地化はより一層進んでいった。かくて、中国は、この戦争の敗北を契機に、より一層の近代化を推し進めねば立ち行かないことを学んだのである。

同治中興における洋務運動がヨーロッパの技術の輸入にのみとどまったことの失敗を自覚したのは、康有為やその弟子梁啓超など一部の知識人・官僚らで

あった。そこで、彼らは、変法自強運動を起こして、政治制度の改革の必要を説き、日本の明治維新を模範に立憲君主政体の樹立を目指した。康有為や梁啓超は政治改革を重んずる公羊学の儒学者であり、この点では、日本の明治維新の政治家同様、彼らの考えは、背後に伝統的儒教精神を維持しながら近代ヨーロッパ化をはかろうとするものであつて、伝統と近代のひとつの融合形態であつたと言えよう。

しかし、康有為らの改革運動は、朝廷の保守派の廷臣達のために失敗、保守勢力は排外主義をとり、義和団事件で列強に敗北した。義和団事件の後、保守派は失脚、代わつて康有為の考えを受け継ぐ開明的官僚が立憲運動を起こし、日本への留学生や調査団の派遣、国会開設の準備、科挙制度の廃止、新式学校の設立、新軍の編成などを行ない、一九〇八年を期して憲法大綱を発表し、後、国会を開くことを公約した。しかし、この動きも時すでに遅かつた。ただ、このとき、日本が中国のヨーロッパ化のモデルになり、日本からその方法を輸入しようとしていたことは注目に値する。これは、いわば、日本という非ヨーロッパを通してのヨーロッパ化運動だったのである。

タイのチャクリ改革

タイでは、ヨーロッパ列強に門戸を開いた開明君主モンクット王が、積極的にヨーロッパの文物を取り入れ、国民啓蒙に努めるとともに、ビルマ（ミャンマー）のように植民地化されることを警戒して、自らの手で運河の開削事業などを行なつて、生産の拡大に努めた。タイは、日本と同じように、自主的にヨーロッパ産業主義の方法を取り入れ、自主的にヨーロッパ化し、独立を保とうとしたのである。かくて、タイは、ヨーロッパ近代文明を受け容れ、近代国家への道を歩んでいくことになる。

モンクット王の薫陶を受けた王子チュラロンコンは、一八六八年、ちようど日本の明治維新と同じ年に国王に即位、ジャワ・シンガポール旅行とインド・ビルマ旅行を行なつて、オランダやイギリスの植民地統治の実際を見聞し、ヨーロッパ近代文明に触れ、強烈な刺激を受けた。タイの周辺諸国は、植民地統治の強化という形でヨーロッパ近代文明を受容し、ヨーロッパ化の最初の道を歩んだのに対して、タイの場合は、このヨーロッパの植民地を経由して、それ

を模範として、自発的なヨーロッパ化を推進したことになる。

かくて、チュラロンコンは、帰国後、タイの大改革に乗り出す。道路の整備事業、行政組織の刷新、司法制度の改革、債務奴隷の解放など、抜本的改革を行なった。新たに十二省を設置するとともに、地方行政組織を改革して、日本が廃藩置県を行なったように、全国をモントンと呼ばれる州に編成しなおし、中央政府の支配力を強め、また、王子達のヨーロッパ派遣などを行ない、王族の教育と啓蒙に努めた。これらの改革がチャクリ改革といわれるものである。それは、単に産業を興すばかりでなく、政治、軍事、教育、全般にわたる広範な改革であった。非ヨーロッパのヨーロッパ化は、例外なく、上からの近代化という形で行なわれるが、タイの場合も例外ではなかったのである。

チュラロンコンにこのヨーロッパ化政策を促したのは、当時、東西から進出しつつあったフランスとイギリスによって挟撃されているという事実であった。チュラロンコンは、タイの植民地化を避けるために、急いで国内体制を整え、中央集権国家をつくり、ヨーロッパ風の近代国家に仕立てあげるために、上からの改革を押し進めたのである。

タイが、ヨーロッパ諸国の脅威の中で周辺諸国が植民地化されている時期に、最後まで独立を保ちえたのは、イギリス・フランス両国の緩衝地帯になったことや、巧みな外交によってヨーロッパ各国と公平に交わって、ヨーロッパ諸国の力の相殺をはかったことなどにもよるが、何よりも、自発的にヨーロッパ化運動にいち早く着手し、俊敏にヨーロッパ化のための諸政策を実行し、近代国家体制を整えたことによるであろう。

トルコとエジプトの改革

他方、トルコも、これより早く、セリム三世のもとに大改革に乗り出していた。セリム三世の改革は、ヨーロッパ式軍制の創設、造兵廠の建設、陸海軍学校の開設など、軍事改革から出発し、行政、財政制度の改革に及ぶ広範なものであった。また、ヨーロッパ諸国に在外公館を常設、近代ヨーロッパの知識の摂取に努めた。これらの改革によって、ヨーロッパ風の近代思想や諸制度を学んだ世代が輩出し、トルコの近代ヨーロッパ化を推進した。セリム三世の改革は、日本の明治維新同様、ヨーロッパ文明を積極的に受け容れることによる立

国を目指したものであった。

さらに、マフムト二世の治世でも、旧軍イエニチエリ軍団を解体、新規軍団を組織して国民皆兵制を布き、中央官制を再編し、教育制度を改め、ヨーロッパ諸国に留学生を送って、ヨーロッパ近代文化の受容に努め、近代化のための進歩的官僚を育成した。

これと同じ時期に、エジプトにもめざましい動きがあった。トルコ軍の一員としてフランス軍と戦ったアルバニア商人、ムハマド・アリが、エジプトの実権を握ってエジプトのパシヤとなり、ムハマド・アリ朝を築いたのは、ナポレオンの侵入による混乱期においてであった。彼は、十九世紀の中頃までに、エジプトの近代ヨーロッパ化を目指して、次々と国政改革のための諸政策を打ち出した。

アリは、エジプトの強化のために、ヨーロッパの諸制度を導入して国力をつけようとした。日本同様、ヨーロッパ近代文明の受容による文明開化と富国強兵策をとったのである。その際、エジプトは主にフランスにその範をとり、まず、徴兵制による陸海軍とそれに必要な兵学校を創設、国民にヨーロッパ式訓練を施した。これによって、エジプト軍は、トルコからのギリシアの独立運動を鎮圧することができ、ヨーロッパ諸国を驚愕させた。その後、ヨーロッパ各国の干渉のため、一時後退せざるをえなかったが、アリは、ヨーロッパ諸国との融和策をとって自国の安全をはかり、農業改革をはじめ富国策を講じた。そのために、行・財政改革など近代化策を推進、地方行政組織の再編の他、近代産業を育成し、多くの学校や病院を建設した。アリの改革は、他の非ヨーロッパ同様、ヨーロッパ列強から受けた衝撃から出発した一連の近代ヨーロッパ化策であり、これは、トルコのセリム三世の改革よりも、より徹底していた。それは、ヨーロッパ列強から自国を守るために行なった徹底したヨーロッパ化だったのである。

相克する伝統と近代

このように、一部の非ヨーロッパ諸国では、ヨーロッパ近代文明を積極的に受容し、近代化することによって自立をはかるということがなされたが、この場合、非ヨーロッパの伝統的な文化構造は、この否応なしのヨーロッパ化によ

って、大きく変容されていった。多くの場合は、自分達の伝統的な文化を背景にして、これを変容させて新しいものにつくりかえ、その中に近代的なヨーロッパ風の文化を取り入れることがなされた。同時にまた、受け容れられたヨーロッパ近代文化の方も、非ヨーロッパの伝統に合わせて変容されていった。そのようにして、両者を融合し、非ヨーロッパとヨーロッパとを接木する努力がなされた。非ヨーロッパのヨーロッパ化とは、そのような接木の努力に他ならなかった。

この点が、ヨーロッパ自身とは全く違っていた。ヨーロッパ自身は、自分達で内発的に伝統的部分を壊して、新しい自由主義的・産業主義的文明をつくりあげ、近代国家を形成していった。それに対して、非ヨーロッパは、外発的に近代化・ヨーロッパ化をしていかねばならなかったから、二重、三重の苦闘を演じなければならなかった。自分達の伝統的な文化の根幹は残さねばならない。しかしまた、近代ヨーロッパ化のためには、同時にこれを変革しなければならぬ。しかも、ヨーロッパ近代文明の方もそのまま受け容れることはできず、受け容れられやすいように変容しなければならないという矛盾に面して、この矛盾の調和をはかることに苦闘した。非ヨーロッパのヨーロッパ化に伴う苦闘は、ここにあった。大概の場合には、この矛盾の解決は、 \wedge 和魂洋才 \wedge へ中体西用 \wedge といわれるように、近代化初期においては、自分達の伝統文化の根幹のところは生かして、その上に、ヨーロッパの近代産業技術文明を変容して受け容れるということがなされたと言えよう。

日本の場合

日本でも、近代の国民国家をつくるために、旧来の伝統的構造を破壊するとともに、同時に、伝統的精神は残して、その地盤にヨーロッパ近代文明を受け容れ、それとともに、ヨーロッパ風の近代文化を、日本の伝統に合わせて変容するということがなされた。そのようにして、日本は独特の近代文化をつくりあげていたのである。

実際、明治新政府の成立そのものが、そのような構造をもっていた。明治近代国家は、それ以前の封建社会の構造を破壊するとともに、同時に王政を復古させることによって、近代ヨーロッパ化を目指すという、ある意味で矛盾した

もの統一の上に成り立っていた。〈維新〉という概念は、この〈復古による革新〉という歴史のダイナミズムを表現しており、伝統と近代の対立の調和を指すものであった。それは、伝統的なものを保存しながら、ヨーロッパ近代との融合をはかろうとする非ヨーロッパとしての工夫であった。

日本は、明らかに矛盾に面していた。つまり、ヨーロッパ化せず自国の伝統を守り抜こうとすれば、ヨーロッパ諸国の圧倒的な軍事的優位によって植民地化されてしまい、自国の政治的独立を失う恐れがあった。また、逆に、植民地化を避け、自国の独立を保全するために、積極的にヨーロッパ近代文明を受け容れれば、政治的独立は保っても、文化的精神的に植民地化され、自国の文化的独立は失われてしまうことにもなる。日本は、植民地化を避けるためには、近代化しなければならぬし、近代化すれば、それまでの伝統的文化を壊さねばならないという矛盾に面していたのである。

この矛盾の解決策は、両者を調和させようとした明治新政府の諸政策として現われた。明治政府の打ち出した政策は〈欧化政策〉と言われ、ヨーロッパ主義に根差すものであるが、しかし、これを推し進めるに当たったの精神的バックボーンは、伝統的な儒教精神にあった。また、国家の精神的統一のために、伝統的な天皇制を近代国家に合うように仕立て、その背後に神道を置くという復古的な側面があったことも見逃せない。つまり〈和魂洋才〉だったのである。近代化初期においては、何よりも、国家を国家たらしめるために、その同一性を求める必要があり、近代化を推進するには、民族主義的エネルギーを必要とする。そうしてはじめて近代的国民国家が成立する。日本でも、伝統的な文化と近代的組織の融合の上に、かろうじてそれは成立していたのである。

中国、トルコ、ロシアの場合

中国は、自主的なヨーロッパ化と植民地化としてのヨーロッパ化の中間に属するが、自主的な部分では、洋務運動や変法自強運動などにみられたように、なおその背後に儒教的精神をもってヨーロッパ近代技術を受け容れようとする面があった。中国も、伝統的基盤のもとに、近代的なヨーロッパの組織を受け容れようとしていたのである。

このヨーロッパ近代技術受容の精神は、〈中体西用〉というスローガンで表現

された。これは、日本の「和魂洋才」の精神に当たるものであり、伝統と近代の融合を目指すものであった。しかし、日本と比較するならば、中国の場合、伝来の中華思想が災いして、中国的伝統の方が重きをなし、近代ヨーロッパの受容は単なる技術面にのみ限られたために、日本ほどの全面的なヨーロッパ化をもたらすはしなかった。ヨーロッパ化は、技術のみに限ることはできない。技術ひとつをヨーロッパ風に近代化するにも、それに付随して、その背後にあるヨーロッパ風の政治体制、社会組織、思想、文化、教育、すべてのヨーロッパ化が必要であった。だが、中国はそこまで踏み越えなかった上に、伝統と近代の融合も十分ではなかったために、日本と違って、近代ヨーロッパ化が相当遅れてしまった。日清戦争での敗北の原因もここにあった。そのため、結局、中国が本格的に近代化するためには、孫文の革命を待たねばならなかったのである。

しかし、この清政府の部分的なヨーロッパ化という政策の背後には、やはり、ヨーロッパ近代文明を全面的に受け容れると、どうしても伝統を壊さねばならないという文化的抵抗もあったであろう。全面的にヨーロッパ近代を受け容れれば、伝統が破壊されるし、伝統を破壊しないでおこうとすれば、せいぜい部分的なヨーロッパ化にとどまり、どうしてもヨーロッパに対抗するだけの力をもつことができない。非ヨーロッパのヨーロッパ化において共通して現われてくる矛盾を、清政府も味わざるをえなかったのである。

トルコでも同じことが言える。例えば、セリム三世の改革は、その後、急激なヨーロッパ化に反対する伝統派の抵抗に会い挫折する。トルコでは、何しろそれまでのヨーロッパへの光栄ある優位があったから、トルコにおける近代ヨーロッパ化の動きは、絶えず旧体制の側から牽制され、絶えず停滞した。その点、中国に似ていると言えよう。それ以後も、トルコでは、近代派と伝統派が絶えず相克し、両者のバランスはとれず、そのためトルコのヨーロッパ化は遅れ、結局、ケマルの暴力的革命を待たねばならなかったのである。

ロシアの場合も、同様のことが言える。確かに、アレクサンドル二世の改革はロシアを近代ヨーロッパ化するのに成功したが、しかし、なお伝統の側からの抵抗は強力であり、また農民の意識も停滞していた。ロシアでも、伝統と近代の融合は必ずしも十分ではなく、それが十九世紀末の混乱を招くことになり、結局は共産革命という暴力的手段によって、遅れた調整をしなければならな

ったのである。

4 植民地化としてのヨーロッパ化

植民地政策としてのヨーロッパ化

一方、植民地化という形でヨーロッパ化をせざるをえなかったところでは、植民地化あるいはその支配の強化という形で、ヨーロッパ近代文明の圧倒的強さを経験せざるをえなかった。そのため、不幸なことに、自主的にヨーロッパ近代文明を受け容れて自国の独立を保つということはできなかった。というのは、それ以前にすでに相当な領土を占領されてしまっていたり、アフリカ諸国のように、伝統的な文化構造が極めて脆弱であったために、容易にヨーロッパの植民地にされてしまったからである。

ただ、この場合でも、ヨーロッパ諸国は、植民地支配のために、十九世紀以後の産業主義的構造を植民地経営に適用していった。ヨーロッパの産業主義の膨張とともに、植民地においてもその経営規模は膨大になっていったから、ヨーロッパ列強は、それまでの旧態依然たる植民地支配では間に合わず、植民地の社会構造そのものを変革していかざるをえなかったのである。そのために、植民地の村落共同体は、近代的な社会組織の中に組み込まれていった。

かくて、例えば、イギリスがインドに行かない、オランダがインドネシアで行なったように、ヨーロッパ諸国は、植民地経営のために現地人を官吏や軍人に採用していった。このような形で、現地人のエリート達がまずヨーロッパ近代文明に触れていき、やがてそこから、自分達もヨーロッパ化して近代国家をつくりあげていかねばならないという民族意識に目覚めていくという現象がみられた。これが、植民地化としてのヨーロッパ化の最初の現われであった。

インドネシアの場合

例えば、インドネシアでは、十九世紀初めオランダがフランスの支配下に降つたため、東インド総督として派遣されてきたダンデルスが、植民地支配の腐敗を排するためのいくつかの政策を実行した。汚職を摘発し、機構を改革し、道路や要塞を建設し、地方領主の力を弱めて、彼らを植民地官僚組織の中に組

み入れた。このようなしかなかったで、ヨーロッパの自由主義的風潮と新しい植民地支配方式が入ってきて、ジャワ社会の構造そのものが次第に変えられていった。その後、しばらくイギリス支配の時期があるが、その期間の事実上の支配者ラッフルズも、自由・平等を導び、自由主義的な政策を施行した。ジャワ社会の詳しい調査を行なって、土地制度を改革し、土着君主の圧政を廃し、農民の福祉をはかった。ラッフルズの改革も、ジャワ社会を一種の近代社会にしていく上に貢献し、そういう形で、ジャワ社会は、インドと同様、植民地化としてのヨーロッパ化をしていったのである。

その後、オランダの支配に戻っても、この方向は維持され、ジャワの伝統社会は次第にヨーロッパ風の近代組織の中へ組み込まれて、大きく変貌していった。宮廷貴族も漸次オランダに仕える植民地官僚になっていき、官吏登用も、世襲ではなく、個人の能力が重んじられるようになっていった。十九世紀後半からは、官吏登用試験制度も整えられ、原住民官吏も登用されるようになった。ここでは、数の知識、文字の習得、オランダ語の心得が要求され、上流階級の子弟はこの試験を受けた。また、強制栽培制度もジャワの村落共同体を解体させ、こうして、ジャワの伝統的村社会は、政治的にも経済的にも近代的に組織づけられていった。このような形で、インドネシアのヨーロッパ化が進んでいったのである。

また、原住民子弟のための教育制度も順次整えられ、初等教育もようやく普及、さらに、小学校教員養成のための師範学校、初歩の医学知識を授ける医学校、また、原住民官僚養成学校なども設けられ、中等教育機関も整備されてきた。こうして、上流階級から下級官吏階級へと逐次近代的教育が普及したために、インドネシア社会のエリート層が形成され、この層からインドネシアの内的なヨーロッパ化と民族意識が芽生えていった。

インドの場合

インドにも同じような構造がみられる。インドは、イギリスの産業の発展と併行して、綿織物の市場としても、また原料の綿花の大量生産地としても重要な位置を占めるに至り、それに伴って、インドの産業構造そのものも変わっていき、一種の近代化がなされていった。それとともに、多くの近代的な施設も

建設され、近代的な教育も普及して、植民地化という形ではあるが、ある意味でヨーロッパ化は進んでいった。

イギリスの支配の結果、公用語はベルシア語から英語へ、高等教育はベルシア文学やサンスクリット文学からヨーロッパ文学へ変わっていき、この支配政策はインドの特に上流階級には大きな影響を与えた。インドネシアと同じように、インドの上流階級はヨーロッパ風の教育によって子弟を育て、イギリス政庁の官吏や軍人にすべく熟中した。イギリス政庁は、英語や英文学に熟達することを官吏や士官登用の条件としたからである。

こうして、インドは、エリート層から次第にヨーロッパ化し、以前の伝統的な身分制度は次第に変質していった。そして、ヨーロッパ風の教育に親しんだインド人は、ヨーロッパ主義のインテリゲンツィアとして、次第にヒンズー教的伝統から離れていった。一般に、非ヨーロッパのヨーロッパ化は、官吏階級や知識階級、地主階級や士官階級などのエリート層からヨーロッパ化していき、それが次第に下層にまで及ぶという形で進行していくが、インドでは、これが植民地支配によってなされたのである。

いずれにしても、植民地化としてのヨーロッパ化の場合は、ヨーロッパ列強が主体になって、非ヨーロッパの支配組織を近代化していくことがなされた。これは、自主的なヨーロッパ化とは相当に構造が違っている。何よりも伝統的なものとの融合が難しく、近代ヨーロッパ風のやり方が強制的に接木されるという面があったから、その衝撃も相当大きかった。それが、逆に、後の民族独立運動という形で反ヨーロッパ主義を生み出す原因にもなっていたのである。

アフリカの植民地化

アフリカにおいても、ヨーロッパ諸国の植民地化の動きは激しくなり、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ベルギーなどが、それまでの探検の延長として、アフリカ各地にその侵食の手を広げていった。かくて、十九世紀から二十世紀にかけて、アフリカは植民地化の嵐にみまわれ、二十世紀の初めまでに、イギリスの優勢のもとに、ヨーロッパ諸国によるアフリカ分割は完了した。

このヨーロッパ諸国によるアフリカの植民地化は、確かにアフリカの伝統社

会を打ち壊すことになったが、しかし、逆に言えば、アフリカは、このヨーロッパ諸国の植民地統治によって、近代文明に触れたとも言える。それは、アフリカ人にとっては、自由主義や産業主義を本質としたヨーロッパ近代文明の進出に他ならなかった。実際、この植民地の経営に当たって、鉄道や道路が建設され、新しい世界市場向けの農産物が開発され、教育施設も次第に整備され、厳しい風土のためにヨーロッパ人から各種管理業務が委任されていた。このようにしてヨーロッパの近代文明に触れたアフリカ人達は、やがて自分達の真の近代化のためには、民族の自立なくしては得られないということに気づき、次第に、ヨーロッパ人の植民地政策の枠を打破する要求をしていくようになったのである。

5 ヨーロッパ主義の系譜

ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義

違った文明が別の文明に侵入してきたとき、受け容れた側では、必ずそれに対して相反する二つの反応が出てくる。侵入してきた文明を積極的に受け容れようとする同化主義と、それに反撥して自分達独自の文化構造を守ろうとする反同化主義の二種類である。トインビーは、これを、ヘレニズム時代のユダヤ民族の相反する二つの反応に象徴させて、ヘロデ主義とゼロト主義と名づけたが、ヨーロッパイズムにおいては、これはヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義と名づけることができる。自主的ヨーロッパ化においても、植民地化としてのヨーロッパ化においても、この二つは共通して現われてくる。

ヨーロッパ主義の動きの方では、まず、知識人をはじめとするエリート層の間にヨーロッパ文化に同化していこうとする傾向が共通してみられる。彼らは、優れたヨーロッパの文物を積極的に受け容れ、自国の伝統社会を打ち壊して、大改革していかなばならないと考えた。このような意識変革は、知識人や官僚、軍の士官クラスなど広い意味での知識層から起きてくることが多い。この知識層達が、まずヨーロッパの新しい文明に触れ、それを自分達の文化に接木しようとして、啓蒙運動や革命を起こしていく。

ロシアのヨーロッパ主義

ロシアにおいても、このヨーロッパ主義の系譜は、デカブリストの乱を起した自由主義貴族達から始まって、急激な近代化策をとったアレクサンドル二世へと引き継がれていった。そして、この急激なヨーロッパ化とともに、ヨーロッパ近代思想がどつと流入し、その結果、インテリゲンツィアの中に、ペリンスキーやゲルツェンなど、ザパドニキと呼ばれた多くの「ヨーロッパ主義者」が登場してくる。彼らは、ロシアの後進性を強調し、ロシアには保存すべきいかなる価値もないと考えた。そして、ヨーロッパ近代文化を積極的に受け入れることによって、専制主義的農奴制を廃し、立憲主義的近代体制をつくるべきことを主張した。近代ヨーロッパ化、つまり政治・社会・経済の組織的改革のためには、何よりも意識革命が必要である。ヨーロッパ主義のインテリゲンツィア達は、この啓蒙の役割を演じた。非ヨーロッパでは、一般に、広範な知識層エリートがヨーロッパ化のための啓蒙運動の先頭を切ったのである。

十九世紀後半のロシアの近代化・ヨーロッパ化は、そのような多くのヨーロッパ主義者達によって推し進められたが、それでもまだ遅れをとっていたために、さらに、ヨーロッパ近代主義者のひとつである自由主義者達は議会主義運動を行ない、社会主義者は暴動を起こした。このロシアの立ち遅れをロシアに最終的に知らせたのは、二十世紀初頭の日露戦争の敗北であった。結局、これと第一次大戦での疲弊が、ツァー体制を崩壊に導くに至る。かくて、一九一七年には共産主義革命が成功し、正教キリスト教文化としてのロシア文化は破壊され、ロシアは、全く新しいヨーロッパ由来の異端の思想で武装することになったのである。

ロシア革命は、共産主義というヨーロッパ由来の思想が非ヨーロッパに拡散していった、非ヨーロッパに受け容れられた最初の例である。共産主義も、また、ヨーロッパ主義のひとつの現われだったと言わなければならない。

しかも、ここで、共産主義は、非ヨーロッパの後進国が近代化していくための一方法という意味をもつようになり、本来の共産主義の考え方からは大きく変質する。そのような変容を可能にしたのは、レーニンである。レーニンによって、マルクスの共産主義思想は、後進国の近代化に合うように変容されている。彼は、成熟した資本主義の試練を経なくても共産革命が可能であり、最

も遅れたロシアの現状と最も進んだヨーロッパの最先端とが結びつけられると考えた。彼の努力は、マルキシズムというヨーロッパ由来の思想、しかもヨーロッパの産業資本主義の発達の頂点で出てきた革命的思想を、後進国ロシアの身丈にも合うように、その意味を解釈しなおそうとすることに向けられたのである。

専制主義も、自由主義も、共産主義も、ロシアでは、どれも、いかにして近代化し、生産性を向上させるかというところに目標をおいていた。それらは、同じ近代化・ヨーロッパ化という主旋律の中の一変奏にすぎなかったのである。

日本と中国のヨーロッパ主義

非ヨーロッパ化では、ヨーロッパ化を推し進めていくために、ヨーロッパの文物を紹介する啓蒙運動が何よりも必要であるが、日本でも、開明派の知識人がこの仕事に従事した。この運動はすでに幕末の開国派の動きにその源泉をもっているが、明治に入ってからでは、福沢諭吉を中心とする明六社の活動がめざましい。この「開明派」の仕事は、「脱亜入欧」をモットーに、ヨーロッパを日本に紹介し、近代ヨーロッパ化のために必要なものの方・考え方を流布させようとするものであり、ヨーロッパ主義の流れの中に属するものである。

自由民主主義の思想も早くから流入してきており、自由民権運動の思想的支柱をなした。なかでも、中江兆民や植木枝盛らは、フランス流の天賦人權説をとり、ルソーの思想を取り入れ、民主的平等、土地の公平分割、思想の自由、普選選挙などを主張した。彼らの思想は、確かに明治政府を批判するものであったが、しかし、どちらも近代ヨーロッパ化の流れの中にあつたことには変わりはない。明治政府の上からの近代化策を批判して、むしろ下の方から起きてきた自由民権運動は、ヨーロッパビズムの観点から見れば、ヨーロッパの自由民主主義的政体を模範としたより一層のヨーロッパ化運動であつた。

さらに、日露戦争以後、大正時代に入ると、それまでの近代ヨーロッパ化の結果として、純粹のヨーロッパ主義が登場してくる。大正デモクラシーの運動もそのひとつであり、これは、明治の頃の自由民権運動を継承してはいるが、しかし、この運動は、本格的な大衆運動という形態をとつたという点で、日本における大衆社会の出現を告げるものであつた。ここでは、自由民権運動には

まだあった伝統的な精神は薄れ、そういう意味で、これは、伝統的な背景をもたない純粋のヨーロッパ主義だったと言えるであろう。

中国におけるヨーロッパ主義運動は、洋務運動や変法自強運動での清朝官僚の考え方の中にすでに現われ、孫文の革命思想の中にもあるが、純粋な形で現われるのは、二十世紀初めの文学革命や五・四運動においてであろう。

一九一五年、陳独秀は、雑誌「新青年」を発行して、民主主義と科学の立場から、個人の自由の解放を唱道し、中国の家族制度の支柱である儒教を徹底批判、言論・思想の自由を目指して文学革命を起し、思想上の啓蒙運動を開始した。これの延長上に起きた一九一九年の五・四運動は、北京大学の学生が、第一次大戦終結時に大国の利害のみによって結ばれたヴェルサイユ条約反対と、対日強硬交渉を要求して反政府運動を展開したものであった。これは、確かに、それ自身民族主義的運動であり、それによって半植民地的状態からの脱却を目指すものであったが、しかし、この運動も、近代ヨーロッパ主義に基づくものであった。

タイのヨーロッパ主義

タイにおけるヨーロッパ主義は、開明君主チュラロンコンの改革で開花したが、この改革によって敷かれたヨーロッパ化の動きは、その後も引き継がれていく。事実、チュラロンコンを継いだワチラウット王は、ヨーロッパ留学をした最初の国王であり、純粋のヨーロッパ崇拜主義者であった。王は、ヨーロッパ文学作品の紹介や政治評論をもした文人国王であったが、政治家としては無能で、放漫な政治を行ない、国家財政は破綻、折からの世界恐慌も手伝って社会不安を招いた。

この社会不安から、特にブリディ・パノムヨンら留学生グループから絶対王政に対する批判が起こり、それが、軍人の不満分子と合流して「人民党」の結成に至り、一九三二年無血クーデタが成功、立憲君主体制が樹立され、憲法が制定された。この憲法は、チャクリ王朝の国家建設の努力を評価したうえで、その結果、教育水準の高まりとともに、有能な官僚と国民とが国政に積極的に参加する時にきたという認識のもとに制定されたものである。

この変革は、日本の大正デモクラシー運動、中国の五・四運動同様、自由民

主義によってより一層の近代ヨーロッパ化を目指そうとするものであり、純ヨーロッパ主義的動きであった。このような動きは、近代化・ヨーロッパ化がいくらか進んだところで起きてくる非ヨーロッパに共通した現象である。非ヨーロッパでは、大概、最初上からの近代化が行なわれ、その近代化によって育った知識層や官僚、士官が、今度はより一層の自由を求めて改革に乗り出すという現象がみられるのである。

トルコ他のヨーロッパ主義

トルコのヨーロッパ主義は、セリム三世やマフムト二世の改革にすでにみられるが、特にこのマフムト二世の改革を通して、積極的に受け容れられたヨーロッパ文化によって育ったタンジマート官僚は、トルコのその後の一層のヨーロッパ化を推し進めるのに貢献した。

タンジマート運動は、トルコが十九世紀前半のヨーロッパやロシアとの戦いで常に敗れ、近代ヨーロッパの強さを身をもって知ったことから起きてきた。

この運動は、自ら積極的にヨーロッパ化することによって、この危機を救おうとした。かくて、一八三九年のギュルハーネ勅令によって、イスラム、非イスラム教徒の法の前の平等、生命、名誉、財産の保障、裁判・徴税の公正などの保証が行なわれた。さらに、クリミア戦争の危機から、一八五六年に出された新しい改革勅令と合せて、政治、軍事、司法、財政全般にわたって近代化を行ない、ヨーロッパ列強の干渉をかわそうとした。トルコは、自らヨーロッパ近代風の法を導入することによって、自らを守ろうとしたのである。どれも、非ヨーロッパに共通した行動であった。トルコはこの改革運動によって、軍のみならず、法のヨーロッパ化を行なった。タンジマート運動は法による改革であり、それだけ一層近代ヨーロッパ化が浸透したと言えよう。

その後、タンジマート運動は官僚から知識人の運動へと拡がりをみせ、さらに政治運動へと発展していった。かくて、一八六五年に結成された「新オスマン人協会」は、立憲君主制の樹立、議会政治の開設、責任内閣制の実現を目指した。これは、日本の自由民権運動やロシアの立憲主義運動に当たる。その結果、一八七六年には、ミトハト憲法が公布され、人格、良心、言論の自由、課税の適正化、二院制による議会政治などが謳われ、スルタンの力がある程度抑

制された。これは、日本の明治憲法発布と同様、立憲君主制による近代国家樹立を目指したものであった。

インドネシアやインドなど植民地化されたところでも、まずエリート層が植民地支配体制の中に組み込まれ、官僚や軍人になることによって、ヨーロッパ主義者になっていった。それは、ややもすると、ヨーロッパのものは何でもすばらしいものと考え、自国のものはすべて遅れていると卑下する皮相なヨーロッパ主義になりがちであった。しかし、優勢な文明が押し寄せてきている場合には、どうしてもその優勢な文明を受け容れることによって自国を強化していかなければならないから、そのような皮相なものも含めて、当然、ヨーロッパ主義的考えが出てこざるをえなかったのである。

6 反ヨーロッパ主義の系譜

このようなヨーロッパ主義の動きに対して、あまりにもヨーロッパの近代文明を受け容れると、自国の伝統文化が壊れてしまい、自分達の根本の精神がなくなってしまうという危機感を感じて、ヨーロッパ近代文明に対して反抗していかうとする反ヨーロッパ主義が現われてくる。この反作用運動は、自国のヨーロッパ主義者に対する反抗、あるいは、ヨーロッパの支配者に対する直接の反抗という形になって表現された。

ロシア・日本・トルコの反ヨーロッパ主義運動

例えば、ロシアのスラブ主義は、ロシア正教を中心としたスラブ文化の方がヨーロッパの近代文明よりも優れていると考え、これを守り抜くことが大事であるとして、流入するヨーロッパ文明にことごとく反抗をした。そして、自国の近代ヨーロッパ主義者をも、スラブの伝統を破壊するものとして、これを批判した。彼らは、ロシア正教の復興を目指し、西洋風の官僚政治による社会の腐敗に抵抗したのである。

日本でも、これは、幕末の攘夷派に源泉をもち、さらに明治のころの日本主義という形で現われている。彼らは、日本の文化の方が精神的により高く、ヨーロッパの文化は単に技術的物質的なものにすぎず、程度の低いものだと考え

た。これは、いわば異種文化が入ってきたことに対するアレルギー現象、あるいは拒絶反応、または不消化現象と言えるであろう。

このような近代ヨーロッパ化に対する反作用、つまり反ヨーロッパ主義の運動は、政治的にも、明治のヨーロッパ化策が始まると同時に、いくつかの土族の反乱となって現われた。それらの土族の反乱は、近代化策で疎外されてしまった階層の反抗であったが、そこには、また、急激なヨーロッパ化に対する一種の文化的な反抗もあったとみななければならないであろう。

例えば、一八七六年の神風連の乱は熊本の神官・土族の結社の起こした鎮台襲撃事件であったが、これは、廃刀令やその他の明治政府の近代化・ヨーロッパ化策に対する優れて文化的・精神的反抗であった。それは、日本の近代化・ヨーロッパ化が本来の古きよき美風を打ち壊してしまうことへのひとつの警告でもあった。彼らは、配設された電線の下を扇をかざして渡ったという。それは、刀と槍のみをもって、西洋風に大砲と鉄砲で組織化された近代軍つまり官軍に立ち向かって自ら滅ぶという形で、その文化的危機を表現した。

西郷隆盛らが征韓論に敗れて下野したのも、討幕維新運動は本来へ攘夷つまりヨーロッパ諸国への反抗が目的であったのに、それを忘れた明治政府への不満を表明したものであった。この考えは、西南の役を終止符として結局敗北、近代化策・ヨーロッパ化策を推し進め、国力をつけることが先決ということになった。これらの動きは、どれも、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の間で絶えず揺れ動く日本の苦悩の表現であった。

トルコでも、すでにセリム三世の改革の当時から、この反ヨーロッパ主義の動きはみられる。セリム三世の急激なヨーロッパ化策は、当然、旧来の伝統を破壊するものであったから、このヨーロッパ化に反対する伝統派の抵抗が起きてきたのである。

この伝統派からの抵抗は、旧軍イエニチェリ軍団の反抗となって現われた。イエニチェリ軍団は、オスマン・トルコの全盛期に多くの功績を立て、祖国をよく防衛したから、その誇りは高いものがあった。しかし、このころにはすでに軍団は腐敗していたために、セリム三世はこれを骨抜きにし、新軍団の創設をはかった。一八〇七年のイエニチェリの反乱は、この新軍団の解散を要求して起きたものである。

この反乱には、セリム三世の改革をイスラム聖法に反するものと考えたイスラム諸派も同調した。彼らは、オスマン皇帝を、ヨーロッパ文明によってイスラム世界を汚染させる罪、そのためにヨーロッパに対する主導権を失う罪を犯したとみなした。これは、ロシアで言えば、時代は遡るが、ロシア正教徒のピョートルに対する反抗にも比すことができる。

この反乱によって、セリム三世の創設した新軍団は解散、セリム三世も廃位させられ、後、殺害された。このイェニチエリの反乱は、日本の明治維新で言えば、旧武士階級の不満分子によって引き起こされたいくつかの反乱に当たり、ロシアで言えば、ピョートル時代のストレツコフの反乱に比すこともできよう。この反乱は、急激なヨーロッパ化に対する反ヨーロッパ主義的抵抗であった。

中国・ヴェトナムの反ヨーロッパ主義反乱

このような現象は、植民地化または半植民地化としてのヨーロッパ化が進んだところでは、特にヨーロッパの支配者に対する多くの反乱となって現われた。例えば、中国では義和団の乱、インドネシアではバドリ戦争やジャワ戦争、インドではセポイの反乱、エジプトではアラビの反乱などがその代表である。これらは、どれも、ヨーロッパ列強の過酷な植民地支配と、それに伴う伝統社会の構造変革に対する反抗から起きている。

事実、中国で十九世紀から二十世紀への変り目に起きた義和団の乱は、中国民衆から興こった反ヨーロッパ主義運動であり、中国を次々と駆逐していくヨーロッパ諸国、または、いちちはやく近代ヨーロッパ化して、ヨーロッパ諸国と同じ行動をとる日本やロシアなどに対する民族主義的反抗であった。この反抗が起きた背景には、キリスト教徒や宣教師が儒教や道教を基盤とする中国の伝統社会の慣習を無視したため、紛争が絶えなかったこと、日清戦争後列強の進出が激しくなり、民衆の排外感情が高まったことなどがあった。そのため、これは、キリスト教撲滅（外人排斥）を目標にしたが、そういう点から言っても、これはすぐれて文化的な反抗であった。

清政府は暗にこれを助けたので、義和団は（扶清滅洋）を叫んで列国公使館区域を占領、鉄道・電線を破壊し、教会・病院を焼き、外国人を襲い、外国文化を一扫しようとした。列国は、自国人を保護するために連合軍を組織、清はこ

れに宣戦したが惨敗した。そのため、清はさらに列強に対して不利な条件を呑まざるをえなくなった。この（攘夷）の失敗は、中国が近代ヨーロッパ化し、あらゆる面においてヨーロッパ式の近代的組織を備えない限り、列強に対抗できないことを再び教えた。

ヴェトナムも長い抵抗の歴史をもっている。実際、それは、フランスの植民地になるとすぐ起きている。ヴェトナムの農村は、儒教を背景にした知識人へ文伸によって支配されていたが、彼らがまずフランスの植民地主義に抵抗したのである。一八八五年、咸宜帝が全国の文伸に勤皇抗仏の檄を飛ばすと、これに応じて文伸達は決起し、各地で壮絶な戦いを展開した。フランスはこれを弾圧したが手を焼き、やがて融和策に出たために、文伸達は抵抗をやめたが、しかし、一部の文伸は山岳部に立て籠り、その後数年にわたり戦いをやめなかった。この文伸の反乱は乙西の国難と呼ばれるが、これは、ヴェトナムにおける最初の大規模な反ヨーロッパ主義戦争であった。

インドネシアの反ヨーロッパ主義戦争

オランダの植民地になったインドネシアでも、主にイスラム教徒による反オランダ闘争が繰り返された。そのうち最も大規模だったのは、パドリ戦争と、ジャワ戦争であった。これは、オランダの支配がインドネシア社会の内部構造にまで及び、その価値観まで揺り動かすことになったことへの反ヨーロッパ主義的戦いであった。

十九世紀初頭、スマトラでは、イスラムの戒律を重んじるパドリ派と、祖先伝来の慣習法を重んじるアダット派が対立、内戦の様相を呈していた。この内戦に、アダット派を支援してイギリス、後オランダが介入。しかし、イスラムへの無知から、神聖なモスクを汚し、住民の反感を買い敗退した。この戦いを指導したイمام・ボンジョールは、ボンジョールに善政を布いたが、その後、オランダは再びボンジョールを包囲し、一八三七年ボンジョールは降伏。この十七年にも及んだ抵抗は、インドネシアの民族主義運動の先駆をなしたが、これは、植民地支配という形でヨーロッパ近代文明の侵入に対するイスラムの伝統的精神からの文化的闘争でもあった。

パドリ戦争と同じころ、中部ジャワにも、ディボネゴロを指導者とする同じ

ような武力抵抗が起こった。イギリスからオランダへの統治権返還に伴う農園経営方式の改変のため、困窮した王侯、貴族、農民達は、王位継承の約束を破られたデイボネゴロを中心に集まり、山に籠って、アラアの神のお告げにより聖戦を決意、武装した群衆はオランダ軍を攻撃、オランダ軍を悩ました。やがて次第に圧迫され、一八三〇年敗北。このジャワ戦争も、パドリ戦争同様、ジャワ社会の内部構造を侵食していたオランダの支配に対する伝統からの戦いという意味をもっていた。しかし、これも、このへ攘夷運動、つまり反ヨーロッパ主義運動は、他の非ヨーロッパ同様、失敗に終わった。このことは、ヨーロッパ化の過程のなかでは、いつも伝統は、近代との融合をはからぬ限り、近代ヨーロッパに対して敗北するということの意味している。

しかし、これらの戦いは、オランダの植民地支配にも大きな衝撃を与え、東インド政庁は財政難に陥る。この財政難の危機打開のために、オランダは、強制栽培制度を導入。これは、農民に多くの負担を課し、過酷を極めた。なるほど、この制度で農民達が新しい農作物の栽培法を覚え、米生産も効率化はしたが、しかし、この制度によりジャワの村落共同体は大きく変貌した。つまり、村落単位の栽培や労役の徹底、個人の土地利益権の消滅、オランダ植民地行政の機構の中に組み込まれた村長と村民の遊離という現象などをもたらした。一般に、近代ヨーロッパ化は、共同体を破壊し、近代産業社会に変えていくが、ここでは、植民地支配の強化という形で、旧秩序の破壊が行なわれ、不幸にも、そういうしかたでのヨーロッパ化が行なわれたのであった。

インドネシアの反ヨーロッパ主義運動は、その後も各地で度々繰り返される。一八六九年のスエズ運河の開通とともに、ヨーロッパ直輸入の制度や文物を、ヨーロッパ人達は露わにインドネシア社会に持ち込むようになった。それと同時に、インドネシアのイスラム教徒のメッカ巡礼も急増し、帰郷したイスラム教徒および彼らを尊敬する信徒達は、キリスト教文明の圧倒的優位に対する聖戦を決意し、何度も反乱を起こした。十九世紀末から二十世紀の初頭にかけてのアチェー戦争は、その最大のものであった。この戦いも、他の反ヨーロッパ主義運動と同様、最終的にはイスラム勢力の敗北に終わるが、オランダ側の犠牲も大きかった。これもまた、ヨーロッパ近代文明に対する伝統文化からの反撥であった。

インドの反ヨーロッパ主義反乱

インドのセポイの反乱も、代表的な反ヨーロッパ主義的反抗であった。イギリスの支配が強化されるに従って、それに対するインド人の不満が噴出、そのため、一八五七年、東インド会社のインド人傭兵（セポイ）が反乱を起こしたのである。このセポイの反乱は、マラータ戦争やシーク戦争とともに、浸透してきたイギリスに対する社会的、文化的、民族的な反抗であり、中国やインドネシアなどと共通した反ヨーロッパ主義的抵抗であった。この乱は、二年間各地に拡大したが、徹底的に鎮圧され、ムガル皇帝は退位させられて、その結果、インドはイギリス政府の直接支配下におかれ、インド帝国が成立した。

このセポイの反乱は、日本で言えば幕末の攘夷運動に当たるが、他の非ヨーロッパ諸国同様、インドでも、最初のヨーロッパへの反抗は失敗に終わる。この乱は、イギリスがインドの習慣を無視したために、ムガル帝国復活を目的として起こったものである。その点から言っても、これは、すぐれて文化的な問題であり、イギリスの近代産業主義の進出によって、インドの伝来の生活様式が壊されることへの危機感からの反抗であった。

実際、自由貿易により、大量のイギリス綿製品がインドに流入し、そのため、前近代的な産業しかもたなかったインドの村落共同体は崩壊、農村は困窮した。イギリスの産業革命を契機に、インドは、商品買い付け市場からイギリス製品の販売市場に変わり、同時に原料生産地に変わっていったのである。その結果、インドの農村の生産形態や生活形態が大打撃を被った。しかも、十九世紀の中頃からは、植民地政府による鉄道・運河・電信の建設および教育の普及によって、インド社会は根底から変革されていった。その際、イギリスの利益が何よりも重んじられたために、反英感情が激化し、これがセポイの反乱の背景となったのである。

このような形で近代ヨーロッパ文明の流入は、インドの文化そのものを侵食した。インド自らの決断によって、その独立を保ちながら、進んでヨーロッパ化したのなら、まだその破壊はそれほど急激ではなかったであろう。インドでは、ヨーロッパ化が植民地化というしかたで行なわれたために、ヨーロッパ化と反ヨーロッパ主義が、分裂した形で出てきたのである。

エジプトの反ヨーロッパ主義反乱

エジプトにおける反ヨーロッパ主義も、ムハマド・アリの改革とともに起きている。非ヨーロッパでは共通してみられることだが、急激なヨーロッパ化は、当然のことながら、その伝統文化を破壊した。トインビーも、例えば、一八二五年にアリが軍隊の健康管理のためにフランス人医師を招聘したことから、次第にイスラムの風習が一変していく過程を叙述している。つまり、アリのつくった海軍工廠を維持するには、フランス人をはじめとしてヨーロッパの技術者や将校やその家族を呼ばねばならなかったが、そのために、病院を建て、医師を招いた。ところが、この医師はこの病院内の産院をエジプト人に公開、その結果、異性には肌をみせないというイスラム教婦人の伝統的戒律が破られていったのである。軍の近代化は、単に軍だけにとどまらず、これが出発点になって、あらゆる面に及び、そのため伝統的美風が崩壊、それを憂えた伝統主義者達はこれに反対した。例えば、ターバンやヒゲが禁止され、フランス式軍服が採用されたことに対しても、これを批判し、これに反対した。

このヨーロッパ化に対する反動は、アリの継いだアッバースに至って急激に現われた。彼は、諸悪の根源はヨーロッパからくるという信念によって、アリのつくった海軍や工場などを破壊し、フランス人顧問を追放して、イスラム世界に沈潜した。彼は、非ヨーロッパのヨーロッパ化の過程ではいつでも現われてくる典型的な反ヨーロッパ主義者であった。

その後、サイドやイスマイルは逆方向に舵を取ったが、しかし、その急激なヨーロッパ化策が失敗。そのため、エジプトはイギリスとフランスの管理下におかれてしまった。アラビの反乱は、このような状況から起きたものである。

アラビはエジプト民族主義の父と言われるが、この反乱の基盤には、思想家アフガーニーやアブドゥーの影響がみられる。彼らは、ヨーロッパ列強からイスラムを解放し、イスラム共同体を復興すべきこと、また、エジプトの内政改革はエジプト人自身の手で成されねばならないことを説き、知識層をはじめアラビら軍の有志の間に影響を及ぼした。この思想は、第一に、民族の伝統を重んじる反ヨーロッパ主義であり、第二に、それによって民族の独立を回復し、立派な近代国家をつくらうとする近代主義でもあった。その意味では、これは、

反ヨーロッパ主義とヨーロッパ主義の融合、あるいは、伝統と近代との融合形態であったともみてよいであろう。それは、ヨーロッパの支配という衝撃に対応して、土着の伝統文化が自己を自覚した形式であった。

一八八一年、アラビは、アブドゥーの援助を得て革命政権の基本綱領を発表。しかし、イギリス、フランスは、この革命が他のイスラム諸国に飛火するのを恐れて、軍事介入という強行手段で臨んだ。そのため、アラビのエジプト軍は潰滅。エジプトはイギリスの支配下におかれ、以後七十年余りにわたってイギリスの支配が続くことになる。こうして、他の非ヨーロッパ諸国同様、最初のヨーロッパへの反抗は失敗に終わった。

このアラビの反乱は、中国の義和団の乱や、インドのセポイの反乱同様、ヨーロッパ諸国への反抗という意味で、反ヨーロッパ主義的運動であった。しかし、同時に、アラビ自身は近代主義者でもあり、むしろ、伝統と近代を調和させることによってヨーロッパへの反抗を目指したものであったとみてよいであろう。

ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の対立抗争

このように、非ヨーロッパにおいては、どこでもヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の二つの反応が起きているが、結果的には、大概の場合、両者の融合あるいは折衷という形で近代化は進められていくことが多い。この融合主義は、日本の和魂洋才の系譜に現われているように、その精神において伝統精神を守り、それを、むしろ近代ヨーロッパ文明の受容に生かしていき、伝統と近代をともに変容させ、近代化を進めていこうという立場である。これがバランスよく行なわれたときには、非ヨーロッパの近代化は成功する。このバランスがとれなかったときには、多くの場合、その近代化の過程は、急進主義つまりヨーロッパ主義と、反動主義つまり反ヨーロッパ主義の対立抗争を繰り返し、難波を極める。そして、この場合、非ヨーロッパの近代化は大巾に遅れることになる。

7 ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の交叉

このように、ヨーロッパ近代文明の衝撃に対して、非ヨーロッパは、ヨーロ

ツバ主義と反ヨーロッパ主義という相反する二つの応戦を繰り返した。しかし、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の結合という第三の立場からなめるなら、実は、ヨーロッパ主義の中にも一種の反ヨーロッパ主義が潜み、反ヨーロッパ主義の中にもヨーロッパ主義が潜在していることに気づく。ヨーロッパ主義、反ヨーロッパ主義とも、互に自分と反対するものの性格を備えているという両義性をもっている。非ヨーロッパのヨーロッパに対する反応は、複雑な構造をもっていると言わねばならない。

ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の結合

非ヨーロッパにおいては、ヨーロッパ近代文明を積極的に受け容れようとするヨーロッパ主義の場合も、そのことによって自国を近代化し、ヨーロッパ列強と対抗、あるいはそこから自立していこうとしている以上、そこには反ヨーロッパ主義の意図が隠されていると言わねばならない。

例えば、十九世紀初頭のロシアのデカブリストの乱なども、自由主義者達の起こしたものであり、彼らはヨーロッパ風の自由主義的立憲君主制を求めようとしていた。その点で、これはロシアのヨーロッパ主義の系譜に位置づけられるべきものである。しかし、彼らは、また、ヨーロッパ風の自由主義によってロシアを近代国家化し、それによってロシアの主体性を保とうともしていたのである。

アレキサンドル二世の近代化策の中にも、ヨーロッパの産業主義を積極的に受け容れながら、これによって国力をつけ、軍を強化し、ロシアをヨーロッパ列強と対等にしようという意識があった。実際、これによってロシアが相当近代化していくと、ヨーロッパ列強と対等に對外進出を企てていく。このロシアの對外進出も、非ヨーロッパがヨーロッパに伍せうとする動きであり、ヨーロッパへの対抗であった。

日本の幕末から維新にかけての開国論と攘夷論の間の葛藤は、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の間で揺れ動く日本全体の矛盾の表現であったが、この中の開国論、つまりヨーロッパ主義も、同時に、それによってヨーロッパ諸国に対抗していこうとする動きでもあった。従って、この開国論の背後には、逆の攘夷論が隠されていたとも考えることができる。ヨーロッパ主義の中にも反

ヨーロッパ主義があるという複雑な心理構造があったのである。

そのような心理構造をもって成立した明治政府は、積極的な欧化主義つまりヨーロッパ化政策をとったが、しかし、それによって最終的にはヨーロッパ列強に伍していこうともしていた。自主的にヨーロッパ化した非ヨーロッパ諸国においては、多くの場合、そのようなヨーロッパ主義によってヨーロッパ化は進められていったが、同時に、その背後には、そのことによってヨーロッパ風の近代国家をつくりあげて、ヨーロッパ諸国に対抗していこうとする強烈な意識があったのである。わが国でも、明治の近代化策がある程度進展してくるに従って、このヨーロッパ諸国に対する対抗意識は、その外交政策となって具体的に現われた。

明治の中頃から展開された日本の朝鮮政策にも、そのことによってヨーロッパ列強に対抗しようとする意図があったことは否定できない。そのことは、また、その後長い時間と多大の犠牲を要した条約改正の努力にも現われている。そして、この意識は、日清・日露の二つの戦争となって、明確な形をとって表出された。

日清戦争は、確かに日本と清との戦いではあったが、同時に、そこには、清に進出しつつあったヨーロッパ列強や、その後を追うアメリカやロシアに対する対抗という目的があった。だからこそ、この日本の進出に不安を抱いたロシア・ドイツ・フランスは三国干渉を行なって、日本を牽制したのである。日本は、まだこれに対抗するだけの国力を持っていなかったから、やむなく引き下がったが、これを切っ掛けに日本のナショナルイズムが抬頭、近代の国民国家としての意識は、ヨーロッパ諸国に対する対抗意識という形で現われたのである。日露戦争もこの流れの中にあつたことに変わりはない。確かに、ロシアのアジア進出も、非ヨーロッパ・ロシアがヨーロッパ諸国に伍し対抗しようという意図からなされたものであるが、日本もまた同じ意識でアジアに進出した。これは、非ヨーロッパ日本が、ヨーロッパ化することによって、ヨーロッパ列強に対して行なった権利主張であり、遅れて近代化した国の、先んじて近代化した国に対する対抗でもあった。

他の非ヨーロッパ諸国の開明君主にしても、知識人にしても、ヨーロッパを積極的に受け容れることによってヨーロッパと対等に与していこうという考え

をもっていた以上、その裏には反ヨーロッパ主義的意識があったとみななければならぬ。この点では、中国の洋務運動や変法自強運動、タイのチャクリ改革、トルコのセリム三世やマフムト二世の改革、タンジマート運動、エジプトのムハマド・アリの改革など、同じ動機をもっていた。また、その後起きてくる植民地化された非ヨーロッパ諸国のヨーロッパ列強からの自立運動の中でも、このことは変わりがない。

一方、反ヨーロッパ主義の方は、ヨーロッパ化という衝撃があつて、それに對抗するという形で出てくるものであるが、これとてもヨーロッパ化ということなくしては生まれてはこないものであり、従つて、それ自身近代的形態をとっている。例えば、日本の幕末の攘夷論つまり反ヨーロッパ主義にしても、これは、同時に、自国の独立の保全が目的であつたから、すぐさま開国論、つまりヨーロッパ主義に変貌する可能性をもつものでもあつた。

このように、反ヨーロッパ主義の中にも一種のヨーロッパ主義がある。自主的ヨーロッパ化を果たしたところでの反ヨーロッパ主義にしても、植民地化されたところでの反ヨーロッパ主義的反乱などにおいても、初期は別として、時代が降るに従つて近代ヨーロッパ風の体裁をとるようになり、近代的な武器をとつて戦うことが多かつた。それだけ、ヨーロッパ化されてもいたのである。また、イスラム共同体の復興を目指したエジプトのアラビの反乱などは、ヨーロッパ的な自由主義と結びついていた。特に、ヨーロッパ化が進むに従つて、このような傾向は顕著になる。

近代主義と伝統主義の結合

このヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の結合は、また近代主義と伝統主義の結合となつても現われた。

例えば、ヨーロッパの自由主義を積極的に受け容れ、デカプリストの乱を起こしたロシアの自由主義貴族士官達も、ヨーロッパ近代主義を奉ずるとともに、同時にまた、敬虔なロシア正教徒でもあつた。彼らの自由主義的主張の背後には、ロシア正教への強烈な信仰があり、ある意味で伝統主義的な考えがあつた。彼らは、国家と教会の分離を主張して、国家から独立した教会の樹立を目指していた。これは、ヨーロッパ主義における伝統主義的面と言うことができる。

同様に、日本の自由民権論者の背後にも、民生を重視する伝統的な儒教精神が生きており、彼らは、必ずしも純粹のヨーロッパ主義ではなかった。その点で、これは、ロシアのデカブリストの貴族士官達に似ている。わが国の自由民権運動も、むしろ、自由主義というヨーロッパ由来の思想が伝統的儒教精神の土壌の上で受け取られ、両者が結合された形態であったと言つてよいであろう。ヨーロッパ近代文化を積極的に受容しようとしたヨーロッパ主義者達の精神的な基盤にも、なお、伝統的主体を持続しようとする精神があったと言わねばならない。少なくとも、近代化初期においてはそうであった。

日本で代表的なヨーロッパ主義者は、福沢諭吉を代表とする開明派であったが、彼らも、ヨーロッパ風の合理主義を主張しながら、その背後には意外と伝統的な儒教的精神をもっていた。確かに、これは、ヨーロッパを唯一の尺度とする純粹のヨーロッパ主義の先駆ではあったが、しかし、今日からみれば、むしろ、彼らの中に江戸以来培われてきた伝統的な儒教の実学精神がなお生きつづけていたことの方が目立つ。

明治政府の施策や、それに反対した自由主義を、単なるヨーロッパ的尺度だけから、遅れているとか進んでいるとかのみみることはできない。非ヨーロッパでは、もつと複雑な伝統との結合がなされているのである。しかも、この伝統主義はヨーロッパへの対抗意識と深く結びついていた。

伝統と近代の融合

つまるところ、ヨーロッパ主義も反ヨーロッパ主義も、近代主義も伝統主義も、それぞれの極端を別にすれば、それほど明確に区別できるものではなく、むしろ両者が錯綜しながら、非ヨーロッパのヨーロッパ化は進む。現実のヨーロッパ化は、両者の中間形態をとつて進んでいくとみてよいであろう。そして、この中間形態をとつて、両者のバランスがうまくとれたとき、非ヨーロッパの近代化は進展する。

いわゆるわが国の(和魂洋才)の考え方は、日本の伝統的精神を守りながら、技術の面でヨーロッパを受け容れようとする一種の折衷案であったが、しかし、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義、または近代主義と伝統主義の矛盾の調和をはかろうとする苦肉の策でもあった。そして、おおむね、明治政府はこの折

裏案によって成立したのである。

このことは、例えば、明治政府の教育改革にも現われている。明治政府は、教育の近代化のために文部省を設置し、学制を公布して、四民平等の原則のもとに、フランスの学校制度を参考にして、国民皆教育を目指した。その教育の根本理念は、内容的には、ヨーロッパの新しい知識の習得であり、精神的には、神道と儒教の精神を強調するものであった。非ヨーロッパにおいて近代ヨーロッパ化を果たすためには、ヨーロッパの思想、文物、技術を取り入れて、それを習得していくとともに、同時に、近代国家として精神的にまとまったあり方をつくらねばならない。そのため、教育においても、国民主義を高揚し、伝統精神を強調し、国民の精神的同一性への意識を醸成しながら、それによってヨーロッパの文物を受容するという二つの面の融和が必要だったのである。ここにも、伝統と近代、あるいは反ヨーロッパ主義とヨーロッパ主義の融和という形での近代化がみられるが、明治の教育政策はこれをよく行なっている。特に、学制では新しい知識の摂取を強調し、教育勅語では伝統的精神を強調している。

一八八九年発布された帝国憲法においても、同じことが言える。それは、主にプロシア憲法を模範としていたという点で、確かにヨーロッパ化の流れの中にあるが、同時に、ここには、近代ヨーロッパの法観念ばかりでなく、わが国の伝統的国家のあり方も明確に示された。その意味では、これも、ヨーロッパ的なものと非ヨーロッパ的なもの、伝統と近代、あるいは反ヨーロッパ主義とヨーロッパ主義の融合の努力であったとみてよいであろう。

他の非ヨーロッパ諸国でも、特に植民地化されたところでは、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の対立抗争を繰り返しながら、結局はこの両者の中間形態に収斂し、ヨーロッパからの自立を果たそうとするようになったところが多い。

例えば、インドネシアでは、植民地福祉のために推進された近代教育によって上流階級が次第に目覚め、彼らは、インドネシアの近代化のために啓蒙活動をするようになる。例えば、ラデン・アジェン・カルティニは、女性としてのわずか二十五年の短い一生の中で、ジャワ人の民族的覚醒と団結を説き、自ら学校をつくって子女の教育に当たった。彼らにとって、ヨーロッパ近代文明と伝統文化との相克は重要な関心事であったが、これに対して、彼らは、伝統的

精神を重んじながら、その上に近代ヨーロッパの文物を受け容れることによつて、両者の調和をはかり、こうしてヨーロッパからの自立を目指そうとした。その点で、彼らは、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の宥和を目指した日本の明治維新の和魂洋才の系譜の人々と同じ道を歩もうとしたと言えるであろう。

8 非ヨーロッパの近代文化

非ヨーロッパにおける近代ヨーロッパ化は、単に軍事、政治、経済のみにとどまるのではなく、すぐれて文化的な問題であった。軍事、政治、経済の近代化・ヨーロッパ化のためには、伝統的なものの見方・考え方、つまり文化から根本的に変えていく必要があったし、また、軍事、政治、経済が変われば、否応なしに人々のものの見方・考え方が変わらざるをえなかったからである。

近代ヨーロッパ化は、単に表面にとどまらず、次第に深層部にまで達し、精神面にも深刻な影響を及ぼした。そして、このヨーロッパ文明の衝撃に対して、文化面でもヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の二つが現われ、ヨーロッパを積極的に受け容れようとする考えと、伝統精神の危機を訴える考えとが錯綜する。

文化的ヨーロッパ主義の系譜

ロシアでのナロードニキ運動は、社会主義を受け容れたヨーロッパ近代主義の知識階級（ザヴァトニキ）が、ヴ・ナロードの標語のもとに、当時知識水準の低かった農民の啓蒙に努めようとした運動であつて、ヨーロッパ主義の系譜に属するものである。これは、ロシアのヨーロッパ化、近代化の一表現であつた。この運動は、ロシア特有の村落共同体、ミールに社会主義の基礎を求めたが、しかし、農民達はナロードニキを拒絶した。ナロードニキは絶望し、十九世紀末特有のニヒリズムやアナキズムに陥つていく。

ロシアのインテリゲンツィアは、近代ヨーロッパ化の過程の中でヨーロッパ近代文明の強烈な影響を受け、その囚になつてしまつたために、伝統社会の規範を墨守する民衆から乖離し、孤独感に噴まれることになつたのである。民衆との精神的疎外感に悩むインテリゲンツィア達の生態は、ロシア文学の好んで

描くところのものである。彼らは、トインビーの言うように、二つの文明が正
式の結婚によらず慣れ合いによって生み落した私生児であり、どちらからも排
斥され、奇形扱いされる混血児であり、その生まれながらの不幸に苦しめられ
る存在であった。¹⁾

十九世紀末、ロシアのインテリゲンツィアに蔓延したニヒリズムは、自分自
身はヨーロッパ近代に尺度をもちながら、それがロシアには理解されず、自分
達は絶えず民衆から浮き上がってしまっているという不安定な分裂状態から出
てきている。しかも、自分達が尺度としてしているヨーロッパは、決して自分達が
突き破り乗り越えることのできるものではなかった。そこに、ヨーロッパへの
劣等意識が生じる。人民に理解されないという苛立ちとともに、この劣等感も
手伝って、ますます彼らは自分自身の存在基盤を失っていった。これがロシア
のニヒリズムの由来であり、それは「ヨーロッパ主義」というものが内包してい
る矛盾からくるものであった。

それに対して、日本の知識人も同じような啓蒙運動に従事したが、彼らの仕
事は、ロシアと比べれば、民衆の抵抗にもそれほど会わず、むしろ、成功し
ざる程成功したと言えよう。この仕事には、民間では、特に福沢諭吉をはじめ、
多くの開明派の知識人が従事した。これは、政治、経済、社会、思想、文化全
般にわたってヨーロッパを紹介する啓蒙運動であった。ヨーロッパ風の学問や
思想、科学・技術は、これらの啓蒙主義者をはじめ、ヨーロッパ諸国から招聘
された外人教師や技術者、また、ヨーロッパ諸国へ派遣された大量の留学生達
によってもたらされ、日本の近代ヨーロッパ化は、文化的面においても急速に
進んでいった。

ところが、この近代ヨーロッパ化が進展してくると、やがて、ヨーロッパを
唯一の尺度とする純粋のヨーロッパ主義者が登場してくる。それは大正時代に
入って特に著しくみられる。明治の少なくとも日露戦争までは、たとえ、ヨー
ロッパ近代文化を積極的に輸入しようとしたヨーロッパ主義者でも、日本の伝
統的精神に基盤をもった者が多かった。しかし、日露戦争以後、特に大正にな
って、そのような日本の主体性をほとんど失い、認識や判断の尺度を、従って
自分の依って立つ基盤をすべてヨーロッパ近代の価値観においたヨーロッパ主
義者が登場する。

より近代化しヨーロッパ化した制度によって育てられた知識人達は、その制度を創設した前時代の人々とは違って、その生みの苦しみを知らないから、その創造の基本になつた精神を忘れてしまう。このような知識人群は、日本で言えば大正教養派あたりから始まると言えよう。彼らは、自分達の精神的基盤をも、すべて、極度に理想化されたヨーロッパにおくようになつた。これが、近代化の第二段階になつて現われてくる考えであり、純粹のヨーロッパ主義と言えよう。

彼らは、ヨーロッパ近代を崇拜し、そこから、伝統的な日本のあり方を日本の後進性として批判する。しかも、彼らが思い描いたヨーロッパは、それ自身彼らの幻想にすぎないか、あるいは、極端に理想化されたヨーロッパにすぎなかつた。ヨーロッパ自身は、実際には、彼らが思い描いたよりもっと複雑で、過去のしがらみに拘束されていたのだが、彼らはそれを認識しようともせず、ヨーロッパ近代思想をすべて善として、純粹化して受け取り、それに対比して、自分自身が体験している現実の日本を非難した。大正教養派ばかりでなく、大正時代に登場した自由主義者やマルクス主義者らは、これら主体性を失つたヨーロッパ主義の代表者であつた。文学における白権派、新思潮派、プロレタリア文学、演劇における自由劇場運動なども、この精神的基調に根差している。ただ、この日本のヨーロッパ主義者は、ロシアのそれとは違つて、むしろ、日本の大衆には積極的に受け容れられたために、ロシアほど深刻なニヒリズムに陥ることは少なかつた。

中国でも、そのころ、陳独秀らによつて、文学革命が起こされ、魯迅など多くの知識人がこれに続いたが、これも、中国の近代ヨーロッパ化を目指す思想上の啓蒙運動であつた。このような知識人による啓蒙運動は、非ヨーロッパにおいて、伝統から離脱しようとするときにいつでも起きるものである。ここでは、ヨーロッパ近代の価値観が唯一の尺度になり、非ヨーロッパの伝統的価値観は否定される。中国においても、このころから、純ヨーロッパ主義者が登場してきたとみてよいであろう。

トルコにおいても、事情は同じであり、それまでの諸改革運動の成果として、ヨーロッパ文明に感化された知識人が続々と生み出され、いわゆるタンジマート文学が興隆した。この切つ掛けになつたのは、一八六〇年にシナーシーなど

が発行した最初の民間新聞、「諸情勢の翻訳者」であった。これも、ヨーロッパ近代文学にならって新しい文学形式を生み出そうとした動きである。同時に、それはまた、西洋事情を紹介し国民の啓蒙をしようとする知識人運動でもあった。非ヨーロッパでは、ヨーロッパ化は、進歩的な知識人・官僚・士官などによる啓蒙運動を通して、ヨーロッパ近代文明が紹介され、そこから、政治、社会一般のヨーロッパ化、近代化が行なわれていくという共通した性格をもっている。

文化的反ヨーロッパ主義の系譜

しかし、他方、非ヨーロッパでは、急激なヨーロッパ化は、その反作用として、伝統主義的な反ヨーロッパ主義をも生み出した。それは、ヨーロッパ化の衝撃に対して、急に自国の伝統と同一性、つまり自国の中心的な核を自覚しようとしたものである。

例えば、ロシアでは、スラブ主義者、つまりスラヴオフィルと呼ばれた知識人群像がこれに当たる。彼らは、ロシア正教によって形成されたロシア文化の純粋性を強調して、ヨーロッパ化に反対した。ホミヤコフやキレエフスキーらによって代表されるスラブ主義者は、ロシアの民族性の精髓が信仰を中心とした共同体精神にあると考え、西洋の個人主義や合理主義を批判した。そして、ロシアはビョートル以前に帰るべきで、国家は社会の共同生活にあまり干渉してはならないと主張した。この運動は、異質な文化、つまりヨーロッパ近代が入ってきたことに対する自国の文化の自己保存意志を表現したものであると見えるであろう。

日本でも、文化面における全面的なヨーロッパ化の流れに対して、同様に、伝統の側からの拒絶反応が現われた。それは、明治三十年代初めに日本主義を唱えた高山樗牛らの反ヨーロッパ主義者達によって代表され、昭和初年の保田與重郎らの日本浪曼派の運動にまで引き継がれた。これらは、ロシアで言えばスラブ主義に当たるが、しかし、スラブ主義同様、ドイツ・ロマン主義と結びついたという点で、これとてもヨーロッパ文化の影響を被ったという面は見逃すことができない。彼らは、ヨーロッパ近代がもたらした自然と人間の分裂からくる故郷喪失を深く自覚し、日本の伝統の中に自らの同一性を求めようとし

た。

インドにおいても、上流階級は、多くの場合、徹底的なヨーロッパ主義をとったが、それに対して、同じように、その反動として、インドの伝統を尊重する伝統主義者が出てくる。これは、ロシアのスラブ主義、日本の日本主義などに当たり、反ヨーロッパ主義の系譜に属するものである。彼らは、カーリー女神の崇拜を復活し、ヴェーダの伝承を再掘し、インドの伝統文化の優秀性を強調した。彼らは、イギリス人と同席することさえ嫌ったという¹⁾。

ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の融合

しかし、非ヨーロッパでは、文化的面においても、このヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義という相反する二面の融合をはかろうとすると、むしろ創造的近代文化が形成されたと言わなければならない。自らの伝統を生かしながらヨーロッパ的精神を受容しようとする融合主義が、新しい形の創造的な哲学や芸術、学問を生み出し、非ヨーロッパの近代文化をつくりあげていったとみてよいであろう。事実、ヨーロッパ近代文化の衝撃に対して、ヨーロッパの方法を積極的に学ぶとともに、それを通して自国の文化的伝統を解明し、そこから優れた思想や芸術を生み出す人々が、非ヨーロッパに次々と現われてくる。しかも、それがヨーロッパにさえも影響を及ぼすようになる。例えば、ロシアの十九世紀に現われた多くの文学者達、なかでもトルストイやドストエフスキーなどがそれである。

日本でも、例えば、西田幾多郎は、西洋の哲学を十分咀嚼しながら、その論理によって東洋の精神を明らかにし、独創的な哲学を生み出した。彼は、『働くものから見るものへ』の序文でこう語っている。

「形相を有となし形式を善となす泰西文化の絢爛たる発展には、尚ぶべきもの、学ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが、幾千年来我等の祖先を学み来った東洋文化の根底には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと言った様なものが潜んで居るのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めて已まない。私はかゝる要求に哲学的根拠を与えて見たいと思ふのである」²⁾

この西田の言葉は、西洋の思想に対する西田の態度を端的に表わしている。

西田哲学も、伝統と近代、非ヨーロッパとヨーロッパの融合形態とみてよい。芸術の分野においても、ヨーロッパ流の手法はどっと入って来ると同時に、東洋の芸術も見なおされ、両者の融合のもとに、明治の絵画の新形式が作り出された。明治の優れた文化は、和魂洋才の系譜、つまり、ヨーロッパ的なものと伝統的なものとの融合の流れの上に成り立っていたのである。

大正時代にも、和魂洋才の系譜は、獨創性をもった思想・文化をつくりあげた。彼らは、根本の精神のところでは日本的なるものを持ち、それを明らかにする表現法、技術、方法論において、西洋の論理や手法を用い、両者を巧みに融合させた。それは、主に漱石や西田を継ぐ系譜の人々によって作り出されていったが、それらの人々は、ヨーロッパ近代の文化的危機を、自国の伝統文化の危機から読み取るとともに、その西洋近代文化の超克を東洋的なものうちに見出そうとした。

中国においても、例えば、胡適は、白話文学を提唱、古い文語文学を改め、口語によって新しい思想・感情を自由に表現することを唱えたが、これも、日本の言文一致運動同様、文学における近代化運動であった。新しいヨーロッパ的形式を取り入れながら、中国の伝統精神を明らかにしようとした優れた思想家であった。その意味では、胡適は、日本の和魂洋才の系譜の知識人と同じく、伝統と近代の融合の上で独自の思想を展開したと言えるであろう。

インドにおいても、このころ、ヒンズーの伝統に深く根差しながら、それをヨーロッパ的教養で表現し、ヨーロッパ人にも通ずる優れた文学や思想が生み出された。タゴールの文学や思想は、そういうヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の融合の上に成立した偉大な創造であった。タゴールは、西洋の思想を学びながら同時にその限界を知り、インドの思想の深さを明らかにしている。それがまた、ヨーロッパにも影響を及ぼすことになったのである。

タゴールは、「東洋と西洋」と題する小論で、インドの高潔な人達が、東と西を結びつけることを仕事とし、東を捨てることなく西を受け容れ、両者の間に橋をかけ、創造的なものを生み出して来たことを跡づけ、次のように言っている。

「これ（苦しみ）がなくなるのは、両者のあいだで内面的な調和が遂げられた時である。その時こそ、東洋と西洋とが、国と国とが、民族と民族とが、

知識と知識とが、努力と努力とが、インドにおいて結合するのである。その時こそ、インドの歴史の現在の章が終わり、新しい章―人間の物語における高貴な章が始まるのである」と。

一般に、これらの非ヨーロッパの偉大な芸術家や思想家は、どれもヨーロッパ近代と非ヨーロッパ的伝統の出会いの中から生まれ出てきている。

文化的危機の自覚と高貴な精神

しかし、急激なヨーロッパ化は、非ヨーロッパにとって、なお大きな文化的危機であった。もともと、流入してきた文化がヨーロッパ(近代)文化であったために、それは、ヨーロッパにおいてそうであったように、非ヨーロッパにおいても、伝統的なものの方・考え方を根本的に変革することを要求した。それゆえ、伝統的文化に根差してものをみ、考えようとする者にとっては、それは自分の存在にかかわる重大な問題となった。彼らは、流入するヨーロッパ近代文化によって自国の文化の廃れゆくことを嘆くとともに、同時に、そこから近代文化一般の危機を読みとる。かくて、ちょうど、ヨーロッパにおけるニーチェやキェルケゴールやブルクハルトなど、危機の時代の思想家と同じ位置を占める精神が、非ヨーロッパにも出現した。

ロシアのドストエフスキーや日本の漱石などは、そのようなヨーロッパと非ヨーロッパの両文化のせめぎあいの中で、近代文明の危機を深く自覚した独創的な思想家であった。ニーチェやキェルケゴールの場合は、ヨーロッパが自己崩壊を起こしていくことに対する危機意識から独自の思想を生み出したが、ドストエフスキーや漱石の場合は、外発的にヨーロッパの崩壊現象が輸入されて、自国の伝統が破壊されていくという危機意識から、その独自の思想を生み出した。両者には内発的と外発的の違いがあるが、結果は、近代文明の批判から自己一個の現実存在に集中していくという点で共通している。

ドストエフスキーは、ロシア近代において、その精神的基盤を正教キリスト教的伝統精神に見出しながら、同時に、これが近代ヨーロッパ文化によって破壊されていくことを知る。しかも、彼自身も社会主義運動を通して近代ヨーロッパの合理主義にかかわっていったから、ここに魂の自己分裂が生ずる。そういう二つに引き裂かれた自己の問題を、ドストエフスキーは追求した。彼は、

ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の対立の中で、その矛盾に苦悩し、その苦悩から近代文明の危機を自覚した思想家であった。彼の作品は、どれもこの文化的問題状況から出ている。例えば、『罪と罰』のラスコーリニコフや『悪霊』のピョートル・ヴェルホーヴェンスキー、スタヴローギン、キリーロフ、『カラマゾフの兄弟』のイワンなどは、それぞれヨーロッパ近代の合理主義や社会主義の矛盾に悩む分裂した精神を代表しており、ドストエフスキーは、これを徹底することによって、それらが至りつく狂気じみた結果を予言し、それはただ、正教キリスト教の信仰に立ち帰ることによってのみ解決されうることを示した。彼は、自己のうちに形成されたヨーロッパ近代とロシア的伝統との葛藤の中から、両者の止揚を目指して苦闘したのである。

日本においても、近代ヨーロッパ文化の流入は怒濤の勢いであった。そして、それは日本の文化的伝統を破壊しつつもあつたから、それに対する危機感が生まれてくるのも当然であつた。確かに、日本は、流入してくるヨーロッパ思想を伝統的精神のもとに受け取り、これとの融合の努力によって、わずかに持ち耐えてはいた。しかし、その底流においては、これら伝統的精神が次第に背景に押しやられ、廃れていくという現象がすでに進行していたのである。近代化のための犠牲は、それ相応に大きかつた。日本は、近代化のために、ヨーロッパがそうであつたのと同じように、その均衡ある社会秩序を解体して、これを平均化し、再組織化しなければならなかつたし、また、精神的にも、伝統的精神を相当程度犠牲にして、新しいヨーロッパ近代思想を受け容れねばならなかつた。そのための大きな精神的混乱と主体性の喪失は、近代化の進むに従つて露になつてこざるをえなかつた。

近代ヨーロッパ化によって古きよき日本が失われるという危機感は、すでに、日本にきたイギリスの反近代主義者ラフカディオ・ハーンによって指摘されていたことであつたが、夏目漱石は、日本人でこの近代文明の危険性を自覚し、独自の文学をつくりあげていった高貴な精神であつた。

文学においても、この時期には、ヨーロッパ近代文学の方法が取り入れられ、盛んに新形式の文学が行なわれたが、漱石は、わが国の文学者や知識人達が自己本位つまり日本の主体性を失つて、何もかもを西洋の価値観に仰ぐようになってしまったことを批判する。しかも、彼自身がそういう西洋の英文学という

学問を身につけたエリートでもあったため、当然、彼自身の中で日本の伝統とヨーロッパ近代とが矛盾葛藤を起し、その相克の場で、漱石は苦惱せざるをえなかった。

彼は、文明開化に酔いしれて軽薄な風潮の蔓延する日本近代の皮相さや、産業主義による低俗な人種の跋扈を非難する。例えば、彼は、『それから』の中で、代助の思想という形でこう言っている。

「代助は……、互を腹の中で侮辱する事なしには、互に接触を取てし得ぬ、現代の社会を、二十世紀の墮落と呼んでゐた。さうして、これを、近來急に膨張した生活慾の高圧力が道義慾の崩壊を促がしたものと解釈してゐた。又、これを此等新旧両欲の衝突と見做してゐた。最後に、此生活慾の目醒しい發展を、欧州から押寄せた海嘯と心得てゐた」と。

だが、時代の墮落は避けることのできない運命でもあったから、漱石は逆に精神の孤高の極みに閉じ籠り、この自己そのものに固執する。そして、その孤独な自己の問題を分析し、その抛つて立つ場所をみつけようとする。彼が見出した「天去私」という東洋的な理想は、そういう救い難い自我の超克の場であった。彼は、ロシアのドストエフスキー同様、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の葛藤の中に苦悩したひとつの高貴な精神であった。

同じことは、森鷗外についても言える。彼は、儒教的精神の背景をもちながら、これが、特に大正期の日本の近代化によって次第に空白化していくことを嘆く。しかし、同時に、彼自身この近代化に貢献しているために、この矛盾から、彼はどうにもならない時代に対して諦観する。かくて、彼は、一連の歴史小説の中で、まだ規範と型を備えていた武士道の精神の中に、古典的な美を見出そうとしたのである。

これらの非ヨーロッパが生み出した偉大な文学者達は、単なる文学者にとどまらず、とめどなきヨーロッパ近代文明の流入によつてもたらされた文化的危機から、近代文明一般の危機を深く自覚したという点で、今日においてもなおその高貴さを保っている。

9 ヨーロッパへの反撃

非ヨーロッパでは、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義が錯綜しながら、近代化は進んでいくが、これはやがて、二十世紀になって、ヨーロッパへの反撃とヨーロッパからの自立となって現われてくる。十九世紀がヨーロッパの拡大の時代であったとすれば、二十世紀は、それに対して、へ非ヨーロッパからの反撃の時代であった。

このうち、植民地化せずに自主的にヨーロッパ化したところ、例えば、ロシア、日本などは、ヨーロッパに対して反撃していった。また、必ずしも非ヨーロッパとは言えないが、アメリカのように、純粹にヨーロッパ近代を継承して、純粹に自由主義的・産業主義的近代文明を打ち立てたところも、次第にヨーロッパ諸国と対抗し、それと対等の立場に立ち、これを凌駕していくようになる。

日本の場合

明治以来、日本は、積極的にヨーロッパを受け容れるとともに、同時にそのことによって、ヨーロッパ諸国に対抗しようとしていた。事実、日清、日露両戦争は、直接は中国やロシアとの戦いであったが、それと同時に、それによってヨーロッパ諸国に自国の力を認めさせ、ヨーロッパに伍せようとする動きでもあった。このヨーロッパへの対抗は、もともと幕末の攘夷運動に萌芽もっているが、この動きは、日清・日露後も、第一次大戦から、さらに第二次大戦に至る動きとなって現われた。

大正から昭和にかけて次第に日本が世界史上に抬頭してくると、ヨーロッパ諸国は、これを快しとせず、日本の進出を警戒し、抑圧するようになった。そして、それが、結局、第二次大戦における日本による反抗を生み出した。日本は、第二次大戦における絶望的な戦いを通して、ヨーロッパへの反撃を行なうとしたのである。これは、ある意味で、幕末維新以来の攘夷論の系譜に属するものであり、いわばその最終的結果であった。しかも、日本は、ヨーロッパに対抗するのに、またヨーロッパ由来の近代的な武器や組織をもってするという矛盾をもっていた。

なるほど、日華事変から第二次大戦は、直接には、中国およびアメリカとの戦いを中心であったが、しかし、それは、また、マレーシアやビルマ、インドを植民地化していたイギリス、およびヴェトナムやインドネシアを植民地化し

ていたフランスやオランダとの戦いをも含んでいた。その点では、これは、同時に、当時の国際関係からみて、アジア諸国を植民地化していたヨーロッパ列強に対する戦いという意味をももっていたと言わねばならない。

この日本のヨーロッパ列強への反撃は、軍事的にも文化的にも敗北を喫したが、しかし、これが切っ掛けになって、少なくともヨーロッパ諸国は疲弊、このヨーロッパの弱体化に乗じて、第二次大戦後、アジア・アフリカ諸国はヨーロッパの支配から離脱し、アジア・アフリカ諸国の自立が可能になった。ここでは、(ヨーロッパへの反撃)と(ヨーロッパからの自立)という非ヨーロッパにおける二つの運動が、微妙に連動していたのである。

アメリカとソビエト・ロシアの場合

ヨーロッパと非ヨーロッパの中間に位置するアメリカも、十九世紀の末にはすでにヨーロッパを凌ぐほどの生産性を誇るに至り、それは、二十世紀に入つて、特に第一次大戦後ヨーロッパに対する債権国になるという形で現われた。第一次大戦そのものも、アメリカの参戦なくしては連合国の勝利はもたらされなかったし、その後も、アメリカの経済援助なくして、イギリス、フランスは立ち直ることはできなかった。このようにして、アメリカは次第にヨーロッパに対する優位を確立していくようになったが、それが決定的に現われたのが第二次大戦であった。そして、第二次大戦後は、アメリカは、ヨーロッパ諸国に代わって世界の覇権を確立した。

さらに、第二次大戦以後は、アメリカとともに、ソビエト・ロシアが抬頭してくる。第二次大戦を境にして、ソ連は、共産主義によってヨーロッパへの逆襲を果たし、急速に世界史の前面に登場してきたのである。実際、ソビエト共産主義の世界革命の動きは、一九一九年にコミンテルンが結成されて以来すでに始まっており、ハンガリー革命の指導、フィンランドの支配、バルト三国の併合、ポーランド・トルコ・中国の民族運動の支援、そして第二次大戦における東欧の獲得へと続いた。共産主義国においても、資本主義国同様、ある程度の生産の発展がみられると、外への膨張を始める。

ソ連の膨張は、それ自身形を変えた世界政策であり、同時に、それは、ツァー時代以来続けられてきたヨーロッパへの対抗であり、ヨーロッパへの反撃と

いう意味をもっていた。ロシアは共産主義というヨーロッパ由来の思想を積極的に受け容れ、これによってさらに近代化しようとしていた以上、これは徹底したヨーロッパ主義の系譜に属するが、しかし、このことによってヨーロッパを中心とする資本主義国に対抗していこうとしていた限り、そこには強烈な反ヨーロッパ主義があつたとみななければならない。特に、スターリンあたりからロシアの共産主義が特にロシアのナショナリズムと結びついたのは、そのためである。なるほど、共産主義はインターナショナリズムを唱えているが、しかし、それは同時に裏返されたナショナリズムでもある。ヨーロッパ主義の視点から眺めるなら、ツァー・ロシアからソビエト・ロシアに至るまで、ロシアは一貫してヨーロッパ化の中にあり、かつ、それによってヨーロッパに対抗しようとする動きの中にあつたとみることができであろう。

ヨーロッパへの反撃の意味するもの

かくて、二十世紀の後半、つまり第二次大戦後のヨーロッパは、東欧がソ連の影響下におかれ、西欧がアメリカの影響下におかれた。ヨーロッパは、むしろ米ソという非ヨーロッパ諸国によって分断されたのである。そして、第二次大戦以後は、このヨーロッパに逆襲した非ヨーロッパの強国、アメリカとソ連が対立するようになる。おそらく、この段階でヨーロッパ主義の時代の第二期に入つたと言つてよいであろう。

ヨーロッパ人の目からみれば、ヨーロッパ文明を学んでいった生徒が、急にヨーロッパという先生を殴打したり、これを凌駕することになったわけで、ヨーロッパ人としては理解に苦しむ状況になる。第一次大戦と第二次大戦という二十世紀前半に惹き起こされた二つの戦いを通して、それまでのヨーロッパの絶対的優位は衰え、ヨーロッパ由来の近代文明は、非ヨーロッパを通して、ヨーロッパに対する逆作用となつて襲つてきたことになる。シェングラの「西洋の没落」という考えや、トインビーの「ヨーロッパの矮小化」という認識や、コラールの「ヨーロッパの略奪」という見方が出てくるのは、このような現象を自覚してのことであつた。いずれにしても、ヨーロッパ文明を積極的に受け容れ自らヨーロッパ化したところ、またはヨーロッパ以上にヨーロッパ近代文明を発展させたところが、二十世紀になつて、ヨーロッパに逆襲してきたので

ある。さらに、それに、アジア・アフリカ諸国のヨーロッパからの自立が加わり、ヨーロッパは後退していかざるをえなくなった。このヨーロッパへの逆襲やヨーロッパからの自立のイデオロギーが、あるいは民族主義と結びついた反ヨーロッパ主義であり、あるいは資本主義からの解放という共産主義のイデオロギーだったのである。

10 ヨーロッパからの自立

一方、植民地化としてのヨーロッパ化をせざるをえなかったところでは、植民地経営の中に組み込まれるという形で、ヨーロッパ化はかなりの程度進んでいたが、しかし、これに対する伝統の側からの反抗が、反ヨーロッパ主義として、植民地列強に対する叛乱という形で現われていた。これは、最初のうちはほとんどの場合失敗するが、この失敗の反省から、自分達も結局ヨーロッパ風の近代的な社会組織、政治形態を取り入れて、そのことによってヨーロッパから自立していかねばならないという考えが出てくる。そして、それが、非ヨーロッパの植民地化されたところでは、独立運動という形で出てくるのである。この非ヨーロッパの自立という現象こそ、二十世紀の半ばにあって、二十世紀を象徴する事件であった。バラクラフも、『現代史序説』の中で、次のように言っている。

「今世紀の歴史は、西洋がアジア・アフリカに与えた衝撃と、同時に西洋に対するアジア・アフリカの反逆という、この両者を最大の特徴としている」と。

このアジア・アフリカの自立運動の中には、トルコのように、ヨーロッパ風の自由主義によって自立を果たしていかうとする系譜もあれば、インドのガンジーのように、強烈な反ヨーロッパ主義によって自立を果たしていかうとするものまで、大きな振幅があるが、その中では、このヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の中間に立って、その融合をはかりながら自立を果たしていかうとするものが、多くを占めたとと言えるであろう。

中国の自立運動の中で特に注目される孫文の三民主義は、その典型である。それは、満洲民族や諸外国の支配からの独立を目指す〈民族主義〉、政治的平等と権力分立を目指す〈民権主義〉、生活上の不平等をなくそうとする〈民生主義〉からなり、実際には、滅満興漢、立憲政治の確立、民族資本の育成、土地所有の均等化などを目標としていた。この孫文の三民主義は、中国の伝統的儒教精神と近代ヨーロッパ思想との融合のもとに出てきたすぐれた実践的思想であった。

民族主義も、民権主義も、民生主義も、一面では、どれもヨーロッパ近代の政治思想の本質を衝いている。近代ヨーロッパの政治は、何よりも自由民主主義を確立し、国民がこぞって政治に参加する権利をもつとともに、そのことによって国民国家を形成し、国民の生活水準を向上させることを目的としていたからである。その意味で、この三民主義には、ヨーロッパ主義的側面があると言える。しかし、同時に、そこにはまた、民生を重んじ、人民のための政治を行なうという理想がある限り、儒教によって培われた中国の伝統的政治思想が生かされているとも言わねばならない。彼は、民権の伝統はすでに中国の古来の道徳の中にあり、三民主義はこの中国固有の道徳によって基礎づけられ、そのことによって民族の統一と諸階層の大同を実現するでなければならぬと考えたのである。孫文の三民主義は、儒教的な伝統の基盤に近代の自由民主主義的な方法を受け容れていったという点で、非ヨーロッパの伝統とヨーロッパ近代との融合形態とみてよいであろう。非ヨーロッパの伝統の中にヨーロッパ的形態を取り入れることによって、ヨーロッパから自立していこうというのが、孫文の運動であった。

日本においても、明治維新以来、伝統と近代の融合によって近代ヨーロッパ化が進められたが、日本では、それが明確な政治思想にまでは高められないまま、現実的に諸政治の改革が行なわれたのに対して、ここでは、それがひとつの明確な思想体系となって現われている。孫文の三民主義は、それ自身、革命運動の実践を通して次第に形づくられてきたものであるが、それは、何よりもヨーロッパ近代文明と非ヨーロッパの伝統文化との出会の中で生まれた思想であった。それは、ヨーロッパ近代思想を受け容れることによって、旧来の中国の陋習を変革するとともに、同時に、その背後で伝統的精神を維持しようとし

たひとつの成果であった。そこには、ヨーロッパ近代思想の中国化がみられると同時に、中国の伝統思想のヨーロッパ化がみられる。

実際、一九一一年の辛亥革命によって、孫文を中心にして中華民国の建国が宣言されるが、それは、三民主義に基いてヨーロッパ風の近代国家を形成するとともに、ヨーロッパ列強からの自立をはかろうとするものであった。この革命事業は、紆余曲折を極め、十分成功したとは言えなかったが、しかし、軍閥間の抗争が続く中で、孫文は、三民主義に基づいて国民党を結成し、一九二二年、中華民国政府を立てる。これとともに、孫文は、三民主義を厳密に定義しなおし、〈民族主義〉は中国全民族の列強からの独立と共和、〈民権主義〉は、司法、立法、行政、考試、監察の五権の分立、〈民生主義〉は土地の公平な再分配をはかるものとしたのである。

スカルノの五原則―独創的な国家理念

インドネシアの自立運動の中でも、例えば、ストモとスラジによって一九〇八年につくられた「ブデイ・ウトモ（最高の英知）」という団体は、ヨーロッパ的近代教育の普及とともに、ジャワの文化的伝統の尊重を二大方針とした。これも、伝統と近代の融合によるヨーロッパからの自立を目指すものであった。なるほど、この運動は、やがて穏健中立化し、オランダとの協調をはかりつつ、上からの近代化をしようとする方向をとるようになっていったが、これを切っ掛けにして、インドネシアでは各種の団体が結成され、オランダからの自立運動が盛んになった。

後、スカルノによって提唱された五原則（パンチャ・シラ）も、これらの運動の発展形態として創造されたものだと言えよう。五原則は、民族主義、国際主義、民主主義、社会福祉、神への信仰を謳い、インドネシア共和国の建国の理念となったものである。それは、全インドネシアの統一と独立を目指すとともに、排外主義を排して国際的友愛を強調し、ナシヨナリズムとインターナシヨナリズムの調和を理想とし、代議政治の原則を示し、経済的平等を強調し、イスラム教徒もキリスト教徒も相互信頼に基づいてそれぞれに神を尊崇し、この信仰を国家形成に組入れるべきことを説いたものであった。これは、イスラム教をはじめ、共同体の伝統的慣習を重んじながら、同時に、そこへヨーロッパ

バ由来の民主主義の理念をみごとに盛り込んでいるという点で、孫文の三民主義同様、伝統と近代の融合の上につくりあげられた独創的国家哲学であった。

ガンジーとネルー—不服従運動とスワラジ運動

インドにおいて、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義がからみあい、それがインドを自立した近代国家にしていく運動へと結集していったのは、セポイの反乱の失敗以後、一八八五年、国民会議が成立してからのことであった。これは、後、二十世紀の初頭、スワデジ運動（国産愛用運動）とスワラジ運動（自治要求運動）となって、より反英色を強めていった。近代という時代は、ヨーロッパでも非ヨーロッパでも民主主義の時代であり、これによって近代国家は成立するが、インドでは、これが国民会議運動という形で開始されたのである。

非ヨーロッパでは、ヨーロッパ近代文明の流入という文化的・社会的・経済的な危機が契機になって、近代国家への国民的自覚が促される。しかも、ここには、自らヨーロッパ風の近代国家の形式を獲得しようというヨーロッパ主義と、同時にそのことによってヨーロッパから自立していこうとする反ヨーロッパ主義の両方がある。インドでも、両者の結合によって近代化への動きが開始された。インドの近代国家としての枠組は、ある意味で、イギリスの統一と支配によってすでに用意されていた。このことによって、かえってインドは民族的同一性を再自覚するとともに、土侯国的あり方を打破して自ら近代国家になるとう目指したのである。

この反英運動の指導者として登場してきたガンジーの非暴力による不服従運動は、より反ヨーロッパ主義的方向をとった。ガンジーは、宗教的信念にもとづく徹底した伝統主義者であり、反近代主義者であり、頑固な反ヨーロッパ主義者であった。インドの自立を目指すには、どうしても民族的自覚が必要であった。その民族的同一性の自覚のための精神的指導者がガンジーであった。彼の中には、古来のヒンズー教、なかでもインドの下層民に根づいていたバクチの教義が甦えつつある。それが、インドのヨーロッパからの自立の精神的エネルギーになったのである。

彼は、インド人は近代文明の示す方向を歩むべきではないと考え、ヨーロッパの近代技術の侵入はそのままインドの伝統の破壊につながるとみた。彼が、

イギリスの機械的綿製品生産に対抗して、手紡ぎ車による綿製品生産で対抗しようとしたのは、そのためである。彼は、機械は近代文明の象徴であり、重大な罪悪であり、インドばかりでなく、ヨーロッパをも荒廃させていると考えた。文明は、人間の徳性をなくさせ、文明自身を破滅に追いやるとみたのである。そのようなガンジーの反近代主義は、民族的同一性の自覚を促すには意味があった。しかし、すでにインドでも、植民地化という形ではあるが、特に都市部では、インド人自身の手で機械生産も行なわれていた。それだけ、インドはすでにヨーロッパ化していたのである。そのため、インドの都市部の商人達は、この点では必ずしもガンジーに従わなかった。ここに、ガンジーの悲劇がある。

ガンジーのナショナルイズムは、確かに、イギリスへの反逆から独立へと向かう精神的運動としては、大きな力を発揮した。しかし、このヨーロッパからの自立が、同時にヨーロッパ的近代国家の建設を目指していた以上、インドのヨーロッパ化は避けることのできない流れであった。それは、ちょうど、日本で言えば、尊皇攘夷によって維新は成就できたが、その後は、開国によってヨーロッパ化していく以外にはなかったのと同じである。近代ヨーロッパ文明の前では、伝統文化のままでは生きのびることはできない運命にある。

かくて、インドの自立への意志結集のためにガンジーが何度か展開した不服従運動は、やがて内部分裂を起して挫折、その後、議会参加に同意したネルーらのスワラジ党が国民会議派を指導することになった。ネルーは、ガンジーとは反対に、徹底したヨーロッパ主義者であった。彼は、インドの伝統社会は盲目的で、遅れていると考え、インドはこの桎梏から離れて近代化しなければならぬと考えた。従って、具体的にはイギリスとの協調をはかり、ヨーロッパ近代風の政治形態を導入しながら、インドの自立と近代国家化をはかろうとした。このように、インドにおける反ヨーロッパ主義とヨーロッパ主義、伝統主義と近代主義は、独立運動の中では、ネルーとガンジーの違いとなって現われた。もっとも、それは力点をどこにおくかの違いであって、両者ともそれぞれ相反する別の面をもっていたことは注目しておく必要はあろう。

エジプトにおける自立運動

エジプトでも、イギリスの支配が強化されるに従って反英感情が醸成され、

イギリスに対する反抗が起きてきた。その先頭に立ったのは、パリ帰りの留学
生達であった。彼らは、イスラム教徒であると同時に、フランス流教育によつ
て自由・平等の思想を学び、ヨーロッパ風の自由主義思想に慣れ親しんだ。ア
ラビ時代の国民クラブを再編成して国民党を組織したカメールも、このような
自由主義的・民族主義的・反英主義を代表している。彼らは、イギリス軍の撤退、
憲法の制定、独立した議会の設立などを政策に掲げた。その限り、これは、ヨ
ーロッパ主義的政策であったと言えるが、そこには同時に、エジプトの自立を
目指す民族主義的精神があつたと言わねばならない。

つまり、エジプトの反英主義は、反ヨーロッパ主義であるが、同時に、その
政策においては、ヨーロッパ主義という面をもつ。ヨーロッパ的な近代国家を
つくることによつて、ヨーロッパから自立し、独立を回復しようとしたのであ
る。非ヨーロッパのヨーロッパ化の中では、いつも、ヨーロッパ主義にして反
ヨーロッパ主義という相反する二面をもつた複雑な動きがある。イギリスへの
抵抗詩を作つて尊敬された詩人イブラヒムも、フランス式の教養を身につけな
がら、同時にエジプトの民族主義者でもあり、反ヨーロッパ主義者でもあつた。
このような知識人像は、日本の明治の知識人には多くいたが、エジプトも同様
であつた。ここには、ヨーロッパ的なものと非ヨーロッパ的なものの融合形態
がみられる。第二次大戦後、エジプト革命を起こして、イギリスからの自立
を果たしたナセルも、若い時からアファガニーやアブドゥー、カワーキビーやカ
メールらの著作の影響を受けている。彼は、エジプトを強化するためには、革
命によつて真の独立を達成し、エジプトを近代的な国家に仕上げる以外にな
いと考へた。その限り、それはヨーロッパ主義的・近代主義的方向をとつてい
るが、それとともに、そこには、それによつてイギリスから自立し、民族の自
尊心を回復しようとするものがあつた。その点では、伝統主義的・反ヨーロッ
パ主義的側面を同時にもつている。

二面をもつイブン・サウドの政策

サウジ・アラビアを建国したイブン・サウドも、アラビアの伝統とイスラム
精神を復興するとともに、同時に、そのもとに近代ヨーロッパ風の国家をつく
ろうとした。彼も、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の両面をもつ。イスラ

ム聖地を奪回したり、偶像崇拜を禁止したりしたという点では、伝統主義であり、反ヨーロッパ主義である。それに対して、ベドウィンを定着させ、農業を興し、近代産業を興そうとした点では、近代主義であり、ヨーロッパ主義であった。イブン・サウドも、他の非ヨーロッパの建国者がそうであったのと同じように、近代と伝統の融合の上に国家をつくろうとしたのである。

彼は、砂漠の砂のように離散してしまうベドウィンをひとつにし、統一国家をつくるために、力と公正による政策を実行し、社会事業としてベドウィンの定着化をはかった。ベドウィンの定着化は、アラビアの近代化事業として、イブン・サウドが初めて行なったことである。近代化によりヨーロッパ風の国民国家をつくるには、まずもって離散している部族をまとめ上げる必要があった。彼は、まず宗教上の長老の協力を得て、屯田兵組織の同胞団を募り、農耕を教え定着させた。その数は次第に数を増し、屯田兵は王国建設のための軍隊の中心になっていった。しかも、この近代主義的政策が、イスラム精神の復興とひとつになっていたのである。

ケマルの青年トルコ党の革命―徹底した伝統からの離脱

このように、多くの非ヨーロッパ諸国では、伝統と近代の融合によって近代国家をつくり、そのことよってヨーロッパからの自立を果たすということがなされたが、トルコにおいては事情は大きく違っていた。

トルコが近代ヨーロッパ化にさらに追い立てられたのは、一八七七年から七八年の露土戦争の敗北を切っ掛けにしてであった。それ以来、憲法の復活や議会再開を要求する自由主義青年達の運動が進展し、その結果、一九〇八年のケマルによる青年トルコ党の革命が成功する。ところが、第一次大戦でトルコは敗北。イギリス、フランス、イタリアに占領され、独立を失い、中国やインドのような状態になる。ケマルを主導者とする民族解放運動が起きたのは、この時点であった。第一次大戦までは、トルコは、むしろロシア・日本型の近代ヨーロッパ化を進めていたが、これ以後、トルコは中国・インド型の自立運動に入っていた。

ヨーロッパ諸国も第一次大戦ですでに疲弊していたから、この民族解放運動は短期間で成功した。独立を回復したケマルは、主権在民を確認、ついでスル

タン制を廃止、共和国宣言をし、カリフ制も廃止、国家を宗教から分離した。

この民族解放闘争は、他の植民地化された非ヨーロッパ諸国同様、ヨーロッパからの自立運動であった。ただ、他の非ヨーロッパ諸国と大きく違っている点は、このケマルの民族自立運動が、ケマルの事実上の独裁を前提していることではあるが、徹底した自由主義革命によってなされたという点である。それは、共和主義、民族主義、民衆主義、国有産業主義、世俗主義、革新主義の六原則からなる徹底した革命であった。

他の非ヨーロッパでは、多かれ少なかれ、伝統的精神を加味した上で、それとの融合のもとで近代ヨーロッパ化が行なわれたが、ここでは、むしろ、ロシアや中国における共産革命に匹敵するほどの徹底した伝統からの離脱が行なわれた。宗教と国家を厳しく分離し、政治の非宗教性を宣言し、イスラムの伝統を破ったのである。この点で、同じイスラム圏でも、エジプトやアラビア、インドネシアとも違った際立った特徴をもっている。彼は、トルコ人民を強力にするためには、彼らができるかぎり純粋にヨーロッパ化する必要があると考えた。ところが、イスラムは、彼にとつて強さの要素ではなく、むしろ弱さの要素であった。ケマルの改革は、近代化・ヨーロッパ化が、結局のところ、伝統の破壊なくしてはありえないという面を表現している。それは、徹底したヨーロッパ主義であり、徹底した文化破壊であった。ただ、ケマルは、そうしなければ国家は成り立たないと考えた。

ケマルの内政改革は徹底したものであった。神祕主義教団・僧院の閉鎖、女性のベールや男性のトルコ帽の禁止、一夫多妻制の禁止、グレゴリウス暦の採用、スイス民法の採用、イタリア刑法の翻案、ドイツ、イタリアに習った商法の発布、イスラム国教化条項の削除、ローマ字をもとにしたトルコ文字の採用、婦人の選挙・被選挙権の承認などであった。どれも、政治と宗教の分離を目指し、イスラムの伝統文化からの離脱を目標にしたものであった。それによって、彼は、近代ヨーロッパの産業技術を習得し、トルコを近代化しようとした。トルコの革命は、衣服からアルファベット、政治、立法まで、ヨーロッパのルネサンスから産業革命までの大変革を一度に行なおうとするようなものであった。

当然のことながら、この急激な改革に対しては、反ケマル派から反対運動が起き、カリフ制の復活と共和制打倒が唱えられた。これは、ケマルの徹底した

ヨーロッパ主義に対する反ヨーロッパ主義的運動であったが、鎮圧された。また、必ずしもこのような反ヨーロッパ主義ではないが、ケマルとともにトルコ革命に貢献したゴカルプは、ケマルと違って、ヨーロッパの科学技術の導入にあっても、その基盤には民族文化の興隆がなければならないと考えた。彼は、イスラム以前の古代トルコの歴史と文化を再掘するとともに、イスラムの精神もまた精神的土台として認められるべきだとした。彼は、トルコのアイデンティティを確立することなくして、西洋の価値を教条的に導入することは危険だと考えた。その点では、彼は、ケマルの急進的改革には批判的であった。だが、このゴカルプの考えは、ケマルの改革においては生かされることはなかった。

共産主義による自立

共産主義による非ヨーロッパの自立も、ケマルの自由主義による自立と同様、ヨーロッパ主義による自立に属するであろう。中国における毛沢東の共産主義運動も、直接はソ連からの波及であるが、遠くフランスをはじめヨーロッパの共産主義に源泉をもっている。毛沢東は、第二次世界大戦中、ソ連の援助のもとに、日本軍と日本軍の援助する汪兆銘政権、および、アメリカ・イギリスの援助する蒋介石政権と戦いながら、第二次大戦後、国共内戦に勝利し、中華人民共和国を樹立した。

かくて、戦後の中国は、共産主義による近代ヨーロッパ化の道を歩むことになった。ヨーロッパ主義の観点からみれば、ロシア同様、これは、ヨーロッパ由来の共産主義の非ヨーロッパへの拡散現象であり、中国のヨーロッパ化のひとつ々の表現である。実際、共産中国は、その成立当初から工業化の促進と農業生産の向上を目標としていた。人民公社方式による「大躍進」政策にしても、文化大革命の失敗後の開放政策にしても、あらゆる面における「現代化」つまり近代化を目標にしていることに変わりはない。しかも、それはまた、同時に、このことよって、ヨーロッパ諸国、および、すでにヨーロッパ化した先進国に対抗していこうとするものでもあった。

ヴェトナムにおけるホー・チ・ミンの共産主義運動も、中国同様、ヨーロッパ主義による自立に属すると言えよう。ホー・チ・ミンは、フランス、ソ連、中国を経て、その間マルクス主義を受容、フランス支配からのヴェトナムの解

放を目指してインドシナ共産党を成立させた。そして、フランス帝国主義打倒、民族独立、土地再分配をスローガンとして抗仏運動を展開。フランスは、これを徹底的に弾圧。そこへ日本軍が進出し、フランス軍は敗退、これを契機に、ホー・チ・ミンの共産ゲリラも蜂起、フランスと日本を打倒するために、ヴェトナムを結成、日本軍の敗退とともに、一九四五年、ヴェトナム民主共和国成立を宣言した。

このヴェトナムへの共産主義の流入も、共産主義というヨーロッパ由来の近代主義の非ヨーロッパへの波及の一環であり、やはりヨーロッパの拡散現象のひとつとみなければならない。逆に言えば、これはまた、共産主義という近代主義によって自国を独立した近代国家にしようという努力である限り、非ヨーロッパのヨーロッパ化の一形態でもある。しかも、そのような形でのヨーロッパ化を目指すことによって、同時にヨーロッパに対して反抗し、ヨーロッパからの自立を果たそうとした点でも、非ヨーロッパ一般に共通した動きであった。

アフリカの自立運動

アフリカの自立運動は、他のアジア諸国とは相当遅れたが、ヨーロッパ諸国の植民地化を通して近代化を意識したアフリカ人達は、第一次大戦後、民族主義に目覚め、第二次大戦後にかけて、特にヨーロッパのそれぞれの植民地領土の境界内で民族国家を形成しようとしていった。

ヨーロッパからの自立運動は、第一次大戦前では、北部、西部アフリカの極く一部に限られていたが、第一次大戦後、次第にこの意識は高まり、第二次大戦によるヨーロッパ諸国の疲弊とともに、異常な高まりをみせた。かくて、第二次大戦後、アフリカ人は次第に植民地政府の内部でより大きい発言権を要求するようになった。特にイギリスやフランスの勢力圏内では、政府の中にアフリカ人の代表者も参加するようになった。

独立への動きは、地域によって様々の方向を辿った。北アフリカは、比較的早く、モロッコやチュニジアが独立した。サハラ砂漠以南のヨーロッパ人入植者が少ない地域では、第二次大戦直後から、ある程度現地人代議制が導入され、それは民族主義運動と直結した政党の形成へと拡がりをみせたが、ヨーロッパ人の入植者の多いところでは、この現地の代議制政治は、形式的なものにとど

められることが多かった。だが、これらの動きを通して、ガーナやナイジェリアは独立にこぎつけられた。かくて、一九六〇年代には、中部アフリカ、東部アフリカにもこの独立の動きは広まり、一九七〇年までにはほとんどのアフリカ諸国が独立した。

このアフリカの自立運動をみると、北アフリカや西アフリカの比較的強い伝統文化をもった諸国では、そのもとにかなり早くからヨーロッパ近代の諸制度が受容され、他と比べて早めにヨーロッパからの自立が達成された。逆に、東部の伝統文化の弱かったところでは、急激なヨーロッパ主義の流入によって、かえって混乱し、ヨーロッパからの自立はかなり遅れたことが分かる。

11 二十世紀後半の非ヨーロッパ

東西問題の中のアジア・アフリカ

二十世紀後半、つまり第二次大戦後の非ヨーロッパを規定したのは、アメリカとソ連の対立であった。このいわゆる東西問題は、ヨーロッパビズムの視点から眺めるなら、自由主義と共産主義という近代ヨーロッパの生み出した相対立する二つの思想の非ヨーロッパへの拡散と、その抗争とみることができる。第二次大戦後のアジア・アフリカ諸国は、どこでも、この二つの近代主義の間に立たねばならなかった。第二次大戦後のアジア・アフリカ諸国が、米・ソという非ヨーロッパの超大国の対立に巻き込まれたという現象の背後には、そのような意味があった。

それは、中国の国共内戦、朝鮮戦争、コンゴ紛争、その他中東紛争などとなつて、アジア・アフリカの非ヨーロッパに現われたが、特にヴェトナム戦争は、この二つの近代主義の戦いと、その勢力圏争いを象徴するものであった。そして、それらは、また、ソ連という、より遅れて世界史に登場してきた国家の権利主張でもあった。アジア・アフリカの非ヨーロッパ諸国は、かつてヨーロッパ諸国の勢力圏争いに組込まれたように、第二次大戦後は、アメリカを中心とする自由主義陣営とソ連を中心とする共産主義陣営のはざまに立たざるをえなかったのである。しかし、どちらの主義をとるにしても、それらによって、より一層の近代化を目指していたことには変わりはない。

しかも、二十世紀の世紀末にあたる今日、この第二次大戦後の米ソの世界支配構造は、すでに崩壊しつつあり、従って、自由主義圏と共産主義圏の明確な区別も次第に難しくなり、相互に入り乱れて混乱しつつある。共産圏における中国の抬頭や、自由圏における日本の抬頭は、これを物語っている。しかも、今日、ソ連も中国も、一時的後退はあるにせよ、その自由化政策や開放政策によって、ともに、より自由主義圏に近づきつつある。東西の対立という第二次大戦四十年程続いた世界図式も終焉を迎えているのである。アジア・アフリカ諸国も、これに応じて、新しい時代への対応を急いでいるのが、今日の状況である。

南北問題の中のアジア・アフリカ

第二次大戦後のもうひとつの目立った現象は、米ソ二大陣営のいずれにも与せず、積極的中立策をとろうとした非同盟諸国が、相当な発言権をもつようになったということである。もちろん、完全な中立はありえず、非同盟諸国も絶えず米ソのどちらかに片寄り、動揺しつつではあるが、しかし、ここには、より近代化しヨーロッパ化した先進国に対する、それにより遅れた後進国の権利主張がみられる。このいわゆる南北問題も、戦後の世界を規定したもうひとつの大きな要素であった。

それは、具体的には、アジア・アフリカ会議の開催、アフリカ統一機構への動き、イランの石油国有化戦略やエジプトのスエズ運河国有化戦略、さらにアラブの石油戦略などとなって現われた。これは、ヨーロッパ諸国とその延長上にある先進国に対する第三世界からの挑戦であった。そこで示されたスカルノやネルーやナセルの主張は、確かに、米ソの冷戦構造を破る第二次大戦後の新しい動きであった。

アジア・アフリカなど非ヨーロッパ諸国がヨーロッパからの自立を果たしたことが明確に表明され、ヨーロッパの退潮が確認されたのは、一九五五年に、スカルノのイニシアティブのもと、インドネシアのバンドンで開催された第一回アジア・アフリカ会議においてであった。

また、第二次大戦後独立が相ついでアフリカ諸国でも、アフリカの統一を目指す会議が開かれた。一九五八年のアフリカ諸国会議をはじめ、一九六三年の

アフリカ統一機構の形成に至るまでの一連の動きの中で、植民地主義からのアフリカの解放とアフリカの政治的統合が目標として掲げられた。

さらに、一九五一年のイランの石油国有化戦略も、ヨーロッパ先進国への挑戦のひとつであった。ソ連寄りになったモサデグ首相のアングロ・イラニアン会社の国有化宣言に対して、イギリスは、米ソの冷戦の中で、大きな力を発揮することができず、撤退せざるをえなかった。

一九五六年のナセルのスエズ運河国有化も、同じく、ヨーロッパ諸国とヨーロッパ化した先進国の支配への挑戦であった。このスエズ運河国有化に対して、イギリス、フランスは軍事介入に出たが、米ソの力の前に撤退せざるをえなかった。ヨーロッパ諸国は、すでに世界史から後退し、代わって、米ソという巨大な非ヨーロッパ諸国の対立の時代に入っていたのである。

このエジプトの反撃は、一種の形を変えた戦争であり、ヨーロッパ諸国への逆襲であった。ナセルは、第二次大戦後の米ソの冷戦の谷間にあって、積極中立政策をとり、インドのネルーらとともに、第三世界独自の路線を打ち出した。この第三世界の自立の主張は、ヨーロッパ諸国、あるいはヨーロッパ化した先進国に対する権利主張であり、そのように先進諸国を揺さぶりながら近代化を果たすのが第三世界の狙いでもあった。もちろん、エジプトも、純粹に非同盟中立を守れたわけではなく、ナセルはソ連寄りになり、その後のサダトはアメリカ寄りに転換し、絶えず動揺してきた。しかし、どの方向をとるにしても、軍をはじめ、経済、社会の近代化が主眼であったことに変わりはない。

また、六〇年代は、アラブの石油ナシヨナリズムが抬頭した時代であった。一九六〇年にはオベックが成立し、産油国を中心とする第三世界の統一戦線ができる。一九七三年、第四次中東戦争と同時にアラブが発動した石油戦略は、イランの石油国有化戦略、ナセルのスエズ国有化戦略とともに、一種の形を変えた戦争であり、ヨーロッパ諸国とその延長上にある先進国に対する新しい挑戦であった。それは、とりもなおさず、アラブ諸国がいかにして近代化をしていくかという過程の中にあり、その中で起きた「持たざる国」からの逆襲だったのである。この問題は、米ソ二大国による世界支配構造が崩壊しつつある今日においても、否、そうであればなおのこと、世界史を動かす大きな動因として、二十一世紀にも、なお絶えず形を変えて現われてくるであろう。

伝統と近代の相克

非ヨーロッパ諸国には、ソ連や日本のように、すでにヨーロッパ諸国を凌いで近代化したところもあれば、アフリカ諸国のように、まだ近代化途上にあるものまで様々な段階があり、国情はそれぞれの段階で違っている。しかし、これらの途上国は、どれも、より一層の近代化に向かっていくことに変わりはない。そして、今日、これら後進国・中進国は、かつてロシアや日本が苦闘した伝統と近代の相克に直面し、苦悩と混迷を深めているのが現状であろう。

例えば、戦後のイランの動きは、伝統と近代の相克を最もよく表現している。イランでは、二十世紀初頭、レザー・カーンによって樹立されたパーレヴィ王朝は、トルコのケマルの革命にならった積極的な近代ヨーロッパ化策によってイギリスからの自立をはかり、第二次大戦後もこの近代ヨーロッパ化を推進した。石油国有化政策もその過程の中にあつたが、これを進めたモサデグ首相はソ連寄りにこれを進めたために、アメリカは青年皇帝ムハマド・パーレヴィを後援してモサデグを追放。イランは、アメリカの援助のもとで急激な近代化策を急ぐことになった。パーレヴィは、イラン人の手で石油を開発し、石油産業を経営するために、教育、政治、軍事、すべてにわたる急激な近代化を行なおうとした。

しかし、それはまた、急激なイスラムの伝統の破壊につながったから、この近代化策の反作用として、一九七九年、イスラム共和国化を目指すホメイニーの反革命が起きる。これは、パーレヴィの急進ヨーロッパ主義に対する伝統の側からの反抗であり、徹底した反ヨーロッパ主義であつた。もつとも、それは、同時に、石油を中心とする工業化と矛盾するものではなく、宗教と政治を合体させ、自らのナショナル・アイデンティティを再確認しながら、近代化を果たそうとするものではある。

しかし、イランは、この急激なヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義、近代化と伝統復帰指向の間で絶えず動揺し、バランスがとれていない。これが、イランの近代化・ヨーロッパ化を遅らせている原因である。実際、ヨーロッパ化を進めれば、例えば、女性はチャドルを脱ぎ、働かねばなくなるが、しかし、そうすると、伝統的なイスラムの風習は壊れる。これを壊わさないで

とすれば、近代化は遅れることになる。今日のイランは、なお伝統と近代の相克の中で、混迷を深めていると言わねばならない。

このことは、また、トルコでも言えることであって、戦後、トルコでは、ケマルの独裁による急激なヨーロッパ化、近代化策に対する反作用が現われ、イスラム教を国教に近いものにする政策がとられた。もともと、それは、民主化運動、自由主義経済政策とひとつになったものであったが、ここにも、伝統と近代の間でいかにして均衡をはかつていくかの苦悩がみられる。一九七〇年代になって登場してきたN・エルバカンの救国党の政策、つまり、イスラムの世界観の再確立と工業化の促進、および社会福祉と社会的道義心の育成などは、この伝統と近代の均衡をはかろうとする努力に他ならない。

組織化と自由化の相克

また、同じ近代化・ヨーロッパ化を推し進めていくとしても、その方法には組織化と自由化の二通りがあり、非ヨーロッパの発展途上国は、多かれ少なかれ、この両者の矛盾に直面せざるをえなかった。近代化・ヨーロッパ化には、より一層の能率化・組織化を目指して近代国家建設を行なおうとする方向と、より一層の自由化・民主化を求める方向と、二つの方向がある。それは、ヨーロッパ十九世紀の国民主義と自由主義の二つの要素に対応する。このバランスをとっていくのも、非ヨーロッパの途上国にとっては、なお重大な課題として残されている。

例えば、戦後のタイでは、組織化の方向を軍部が代表し、自由化の方向を学生、知識人、文民政治家などが代表し、二つは絶えず相対立しながら、ともに近代化を目指した。これは、日本で言えば、明治藩閥政府による上からの近代化と、自由民権運動や大正デモクラシーの下からの近代化の対立に当たるものであり、非ヨーロッパの近代化前期に共通する特徴だと言える。タイにおいても、相続く軍部政権は、より一層の能率化と組織化のために、独裁的方法によって、行政機構の集権化、経済開発、産業投資奨励、義務教育の充実、大学の設置など諸改革を行なった。それに対して、逆に、これらの政策で育っていった学生、知識人は、より一層の民主化を求めて、軍部独裁を批判し、一切の封建的制度の追放を掲げ、社会的公正・平等の必要を強調した。また、労働組

合や農民連盟も組織化され、その運動は、労働関係法や土地改革法の制定となつて実を結んでいる。この自由化の動きは、ある意味で、軍部独裁によつてつくれた近代的組織による社会的な富のより広範な配分を要求するものであつた。その意味で、それは、より一層の近代化・ヨーロッパ化であるが、両者のバランスを保つのは、必ずしも容易ではない。

インドネシアでも、バンドン会議後、反乱が相継ぎ、議会も少数政党が乱立し、政情不安定が続いた。スカルノは、秩序の回復のために政党解消論を持ち出し、ヨーロッパ型議会民主主義の無批判な受け容れが混乱の原因であるとし、一国一党の立場に転換。議会を解散して、国民評議会に移行、多数決ではなく、話し合いによる全会一致制を採用、内閣から国民生活のあらゆる面における「一致協力」のスローガンを掲げた。ここにも、途上国における自由化と組織化の矛盾が現われており、非ヨーロッパの近代化の少なくとも初期においては、上からの近代化のために、一種の独裁制が必要であることを物語っている。スカルノの共産党寄りの姿勢を批判して、西側寄りの姿勢を打ち出したスハルト政権も、組織化という点では同じ方向をとっている。

今日、アジア・アフリカの多くの発展途上国では、より一層の近代化のために、独裁的な手法によつて、国家の組織化が行なわれているが、これによつてある程度の近代化が成功すれば、やがて自由化の要求が高まっていくであろう。それは、すでに、タイ、フィリピン、韓国などでみられたことであり、ビルマ（ミャンマー）でもその兆候が現われている。共産主義を採用した諸国家の独裁制についても、ソ連や中国などですでにみられるような複数政党制導入などを要求する急速な自由化への胎動は、これと同じような近代化の過程の中で捉えることもできるであろう。

へ非ヨーロッパのヨーロッパ化への力学

一般に、異なった文明がひとつの文明の中に流入してくると、必ずそれへの同化と反撥の運動が起き、受け容れた方の文化は動揺し、変容していく。非ヨーロッパのヨーロッパ化において、共通してみられた二通りの反応、ヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の抗争は、流入するヨーロッパ近代文明をどのような受け留め、受け容れるかの苦悩の表現であつた。非ヨーロッパでは、この二

つの反応を交互に繰り返しながら、それぞれが次第に変容され、時に融合し、時に反撥しながら、結局ヨーロッパ近代文明へ同化していくという過程を描いている。

そして、この二つの相反する動きの調整をどのようにとっていくかというのが、非ヨーロッパ諸国の最も苦闘した点であった。日本の場合は、少なくとも近代化初期においては、どちらかというと、伝統と近代、反ヨーロッパ主義とヨーロッパ主義の間で動揺しながらも、両者の融合、折衷に成功し、ヨーロッパ近代文明への同化を果たした例であろう。

タイでも、伝統を基盤としながら積極的にヨーロッパ化を推し進めていくとするヨーロッパ主義運動が主流を占め、多くの政情不安にもかかわらず、どちらかと言えば、伝統と近代、また、組織化と自由化との対立の調和をはかりながら、ヨーロッパ化を推し進めようとしているとみてよいであろう。

同様に、インドネシアの場合も、イスラム教を中心とする反ヨーロッパ主義の挫折から、植民地政策を通してのヨーロッパ主義の普及を通して、イスラムの伝統と近代ヨーロッパを融合させ、近代国家を形成していった。このことによつて、インドネシアは、ヨーロッパからの自立を果たすとともに、近代ヨーロッパ化していくこうとする流れの中にあつたと言えるであろう。

一般に、日本を中心として、韓国、台湾、アセアン諸国は、伝統と近代の折衷・融合のもとに、近代ヨーロッパ化を推進してきた。それが、今日の自由アジアの抬頭をもたらした秘密であつたであろう。しかも、それは、今日、大西洋から太平洋への世界史の重心の移動をもたらしつつある。アジア・太平洋の時代の到来である。

それに反して、ロシアや中国やヴェトナムでは、この伝統と近代、反ヨーロッパ主義とヨーロッパ主義の調和・融合が必ずしもうまくいかず、両者が分離してしまつた。それが近代化の立ち遅れとなつて現われ、後になって、共產革命による急激な近代化の道、つまりへ遅れて出てきた調整を行なわねばならなかつた原因だつたと言えよう。

中東諸国でも、このヨーロッパ主義と反ヨーロッパ主義の融合は、必ずしも成功してはいない。トルコやイランなどにみられるように、ここでは、急激なヨーロッパ主義改革がなされたかと思えば、またそれに対する反ヨーロッパ主

義的抵抗が繰り返され、しかも、両者が十分かみあわず、絶えず動揺し、そのため、これが近代ヨーロッパ化を遅れさせる原因となった。

文化的伝統は、ヨーロッパ化にとつて障害になるとともに、また、自由アジア諸国にみられたように、それをうまく変容していけば、逆にヨーロッパ化のエネルギーにも利用していくことができるものである。

（非ヨーロッパのヨーロッパ化）という現象は、そのような力学をもつて動いてきた。その結果は、程度の差こそあれ、世界中がヨーロッパ風の近代文明によって覆い尽くされるという現象であった。しかも、ヨーロッパは、その過程において次第に空白化し後退していったというのが、特に二十世紀後半の目立った現象であった。だが、そのことによって、かえって、ヨーロッパが生み出した産業組織、自由主義や平等主義を旗印とする社会組織などは、地球上に充満することになったのである。

補遺 ヨーロッパにして非ヨーロッパ — アメリカ —

アジア・アフリカを中心に非ヨーロッパのヨーロッパ化の過程をみると、特に、アメリカは、特殊な地位を占めているように思われる。それは、ヨーロッパでもなく、非ヨーロッパでもなく、両方の性格を同時に兼ね備えている。従って、これは、ヨーロッパと非ヨーロッパの両面から、特別に取り出して考察するのが適当であろう。

二つの顔をもつアメリカ

ヨーロッパ諸国の植民活動によって成立したアメリカは、近代のヨーロッパ文明を、それ以前の桎梏なしに純粹なしかたで実現した。その意味で、アメリカは純粹のヨーロッパ近代である。

もしも、ヨーロッパ諸国の植民活動によって、インディアン諸部族が滅ぼされずに、少なくとも今日のアフリカのように、二十世紀になってヨーロッパの支配から自立するようないことが仮に可能であったとすれば、アメリカは、むしろ非ヨーロッパとして、アフリカなどと同じ運命を辿ったであろう。しかし、アメリカにおいては事情は違い、インディアン達は自立する力のないほど打撃を受け、今日ではアメリカ近代文明の中に吸収され、文明の担い手としては滅亡してしまった。アメリカは、かくて、ほとんど非ヨーロッパ諸民族の近代的抵抗なしに、純粹にヨーロッパ近代の物質文明を体現して登場した。だからこそ、日本や中国などからみれば、十九世紀末の門戸開放を要求してのアメリカの来航は、ヨーロッパ近代文明の襲来に他ならなかった。アメリカは、ヨーロッパ近代文明をヨーロッパ以上に実現し、巨大な実用主義的文明をつくりあげ、ヨーロッパを凌いで超近代国家をつくりあげたのである。

しかし、同時にまた、アメリカは、地理的にみれば、ヨーロッパにとって一種の非ヨーロッパである。そればかりでなく、二十世紀、特に第一次大戦以後は、ヨーロッパの支配力が弱まり、ヨーロッパは、一方ではソ連、他方ではアメリカに凌駕され、その直接的・間接的影響力のもとに立たねばならなかったから、ヨーロッパからみれば、アメリカは巨大な非ヨーロッパとして映る。こ

のように、アメリカは、「ヨーロッパにして非ヨーロッパ」という二つの顔をもったヤススである。非ヨーロッパからみればヨーロッパであり、ヨーロッパからみれば非ヨーロッパであった。

十七・十八世紀のアメリカ文化

アメリカ大陸へのヨーロッパ人の進出は、他の非ヨーロッパ諸国と同じように、地理上の発見時代に始まっている。そして、十六・十七世紀にかけては、スペイン、オランダ、イギリスが進出し、十七世紀前半には、イギリス国教会の信仰を拒んでオランダに逃れたピューリタンの他、多数のピューリタンが渡来し、植民地を建設した。その後、イギリスは、スペイン、オランダ、さらに、カナダや北アメリカ中部に進出してきたフランスと勢力圏争いをして、これに勝利、北アメリカへの支配権を確立した。

このようにして、十八世紀の中ごろまでには、北アメリカはほとんどイギリスの植民地になった。しかし、このころまでのヨーロッパ諸国の進出は、他の非ヨーロッパ地域と同じく、商業中心であった。なるほど、北アメリカは植民地になったが、もともと、ここには、それほど伝統のある反撥力をもった文化が存在しなかったから、ヨーロッパ諸国が持ち込んだ文化が、そのままアメリカの文化となった。そのようにみれば、アメリカの十八世紀までの文化は、ヨーロッパの十七・十八世紀の世俗主義的文化と同じであり、その延長にすぎなかった。ヨーロッパが重商主義的経済によって世俗文化を築き、その後でなおキリスト教文化を持続していたように、アメリカでも、彼らはピューリタニズムを中心に同じような種類の文化を形成した。

特に、荒野に植民していく時には心細さが伴うから、彼らはまず教会をつくり、深く神を崇敬し、これを中心にしてヨーロッパ風の共同体をつくった。彼らがヨーロッパでもっていた生活習慣を、なるべくそのまま持ち込もうとしたのである。その意味では、当時のアメリカは、まだ中世的な名残をもった文化をつくらうとしていたと言つてよいであろう。アメリカは伝統をもたない国だと言われるが、しかし、十七・十八世紀の間には、一種の伝統文化が形成されようとしていたのである。

これが、さほどの抵抗もなしに壊れていくのは、十九世紀の産業主義が勃興

してからである。伝統は短かかったから、壊れるのも早かった。アメリカは、伝統を形成し終わるまえに、現代の自由主義的産業主義文明に突入してしまっただのである。それだけに、アメリカは、また、何の伝統の足枷もなく、純粹の市民社会として成立したから、アメリカでは途方もない産業の発展が可能であった。アメリカは、十九世紀以後、精神的にも地理的にも何の障害もない場所で、純粹な形でヨーロッパ近代の物質文明を体現し、発展させていった。

ヨーロッパからのアメリカの自立

十八世紀後半、産業主義を進展させつつあったイギリスは、時を同じくしてアメリカの植民地に対して強圧的態度をとるようになり、様々の搾取を行なうための条令を出した。つまり、このころから、アメリカのイギリス植民地は、アジア諸国のような植民地的状況に落とされそうになったのである。それに反抗して起きたのが、アメリカ独立革命であった。だから、このアメリカのイギリスに対する反抗は、アメリカが一種の非ヨーロッパ的勢力になっていく過程の出発点であったと言ってもよい。しかも、このアメリカの独立革命が近代国家建設を目指していたという点でも、後に出てくるアジアにおける諸独立運動と一脈通じたものがある。それは、ヨーロッパからのアメリカの自立であり、ヨーロッパの原理によるヨーロッパへの反抗だったのである。アジアの非ヨーロッパ諸国が、ヨーロッパ的原理を受け入れることによつてヨーロッパに反抗し、ヨーロッパから自立し、ヨーロッパに逆襲したように、アメリカもまたこれと同様な道を歩んだ。アメリカ人にそのような自覚はなくとも、純粹な非ヨーロッパからみれば、そのようにも解釈することができる。

もちろん、アメリカが産業主義を背景にした近代文明を携えてアジアに進出してきたときは、アジアの非ヨーロッパ諸国にとつては、それは一種のヨーロッパ近代の侵入であった。その意味で、アメリカは、ヨーロッパにして非ヨーロッパ、非ヨーロッパにしてヨーロッパという二重性格をもっている。

一七七六年の独立宣言は、基本的人権の擁護、人民主権、革命権、連合諸州の自由独立など、ロックの社会契約説や自然法思想、さらに啓蒙思想に基づく民主主義に根ざすものであった。さらに、一七八七年に制定された合衆国憲法では、共和制による連邦国家制が規定された。これらは、どれも、アメリカが

近代的な原理によって統一ある近代国家として自立していくための基本精神であった。イギリス、フランスと大体時を同じくしていた。あるいは、それより早かった面もある。これ以来、アメリカは、民主主義を国家的同一性を保つ精神的基盤にした。そして、これが後の近代産業の発展に大きく寄与した。かくて、アメリカは産業主義と自由主義の純粋培養地となった。社会的にも、信仰の自由が確立され、半封建的遺制が廃止され、自営農民が大量に育成され、重商主義的規制が排除され、商工業が進展した。アメリカは、より純粋なしかたで近代ヨーロッパ文明を実現していくことになったのである。この点では、アメリカはヨーロッパの延長にあった。

アメリカの産業革命

かくて、アメリカは、一八一〇年ころから産業が著しく発達する。アメリカは、もともと市民社会として出発し、旧制度の規制がなかった上に、広大な国内市場をもち、資源が豊かであったから、産業主義が典型的なしかたで発展した。

一八四〇年代には、西部発展が目覚しく、フロンティアは急速に拡大し、アメリカは、十九世紀中頃までに、大西洋と太平洋にまたがる大陸国家を形成した。この広大な大陸国家を形成したこと、および、南北戦争を機に連邦国家制を確立したことが、後、アメリカが単なる国民国家の枠を超える超近代国家に発展し、ヨーロッパを凌駕する基盤となった。

一八六一年から六五年に起きた南北戦争は、工業を中心とする北部と、農業を中心とする南部との対立から生じたものである。これが北部の勝利に終わり、奴隷解放がなされたことは、アメリカが産業主義を推進力とする実質的な連邦国家として歩み出したことを意味している。従って、これも、近代ヨーロッパ文明の純粋な形での発展の一環としてあったとみることができる。奴隷問題は、アメリカ独自の問題であったが、この解放によって自由な工業労働力が形成されたことは、ヨーロッパにおける自由・平等のイデオロギーによる社会の平均化と同じ意味をもっていた。実際、この南北戦争終結を機に、アメリカの産業主義は飛躍的に発展する。大陸横断鉄道も敷設され、工業生産も飛躍的に上昇し、これに応じて多くの大企業家が登場した。

もちろん、これは、アメリカ社会の大変動を意味したから、都市への人口集中や農村の荒廃、拝金主義の横行など、社会の無秩序化、平均化、組織化をもたらし、さらに、識字率の上昇とともにジャーナリズムが発達し、かくて文化の低俗化をもたらした。従って、文化的には、これに対する反作用も生じた。十九世紀のアメリカの文学、例えば、ホーソン、メルヴィル、ポーなどの文学にある暗いイメージの背景には、そのような文化の低俗化に対する危機感がある。

建国以来のアメリカの伝統と理想に基盤をもっていた文学者達にとって、この時代は幻滅の時代であった。例えば、自由と開拓精神に裏打ちされたアメリカ的理想への強烈な信仰をもっていたメルヴィルは、十九世紀後半の物質主義のはびこるアメリカ社会を暗黒時代とみて、それへの深い絶望を表明した。その意味で、十九世紀後半は、また、アメリカにとっても文化の危機でもあった。というより、アメリカの優れた古典的文化は、むしろ、この危機状況を背景にして生み出されたのである。

アメリカの非ヨーロッパ的性格

他方、一八二三年に発せられたモンロー宣言は、南北アメリカ大陸に対するヨーロッパの干渉を排除することを宣言するものであったが、このモンロー主義は、アメリカの非ヨーロッパ的性格を示している。モンロー宣言は、アメリカが、一種の非ヨーロッパとして、ヨーロッパに対抗しようという従来からもっていた姿勢を、外交上から明確にしたものである。と同時に、それはまた、アメリカがラテン・アメリカをも勢力圏におこうとする世界政策の宣言ともなった。つまり、アメリカは、一種の非ヨーロッパとして、ヨーロッパに対抗しながら、自らの支配権を拡大しようとしたのである。この点、それは、後の日本やロシアが歩んだ道と同様である。アメリカは、このモンロー主義によって、一種の非ヨーロッパとして、独自の道を歩み出したのである。

このことは、南北戦争後明らかになる。南北戦争後急激に発達したアメリカの産業は、一八九〇年代になると、工業生産を飛躍的に伸ばし、イギリスを凌いで世界第一位となった。この産業の発展とともに、アメリカは海外に進出するようになる。ハワイ・フィリピンを占領した他、一八九九年には、中国にお

けるヨーロッパ列強の特殊權益独占を排除するため、経済上の機会均等と、中国領土の保全とを主張する。このいわゆる門戸開放宣言は、中国進出に遅れをとったアメリカが、ヨーロッパ列強に割り込み、市場を開放しようとしたものである。さらに、一八八九年には、第一回汎アメリカ会議を開催し、アメリカを中心にラテン・アメリカ諸国を政治的・経済的に結びつけようとした。これらのアメリカの対外進出は、ヨーロッパに対する対抗という意味をもっていた。その意味では、ここでは、アメリカは一種の非ヨーロッパの立場に立ったことになる。

アメリカの優位の確立と衰退

二十世紀初頭、一九一四年に起きた第一次大戦はヨーロッパの自決行為であったが、このとき、アメリカは戦局に決定的影響を与え、連合国を有利に導いた。パリ講和会議では、アメリカ大統領ウィルソンが主導権を握り、平和十四カ条などを提唱した。第一次大戦を機に、ヨーロッパ諸国は疲弊、急激に衰退、代わりにアメリカが大きな力をもつようになったのである。これは、ヨーロッパからみれば、アメリカという非ヨーロッパがヨーロッパに代わって世界史に登場したことであり、ヨーロッパにとっては大きなショックであった。それは、ヨーロッパの優位の崩壊という世界史の大きな転換点をなすものだったのである。

第一次大戦後は、むしろ、アメリカ、日本、ソ連など非ヨーロッパ諸国が世界の覇権を争い、ヨーロッパの力は相対的に減退した。アメリカの優位は、このヨーロッパビズムの時代におけるひとつのエポックを画したのである。独立戦争以来、ヨーロッパに對抗してきたアメリカは、ここではじめて非ヨーロッパとしての強大な力を示すに至った。これは、第二次大戦および第二次大戦以後さらに明確になり、アメリカは自由陣営の指導者として世界を支配するに至った。これに對抗したのが、大戦中は日本であり、大戦後はソ連であった。

第二次大戦後は、米ソによって世界は二分され、いわゆる冷戦構造ができあがった。しかし、一九七〇年代に至って、アメリカはヴェトナム戦争でソ連に敗北。今日、アメリカは、その自由主義と個人主義の類落および物質万能の商業主義のために、かえって国内の精神的頹廢と経済力の衰微、社会秩序の悪化

を惹き起こし、その支配力を弱めつつある段階にきている。

このような、アメリカ文明の精神的頹廃については、第一次大戦から第二次大戦中に登場してきた多くの知識人や文学者によって、すでに指摘されていたことでもあった。ビジネス文明にすぎないアメリカの文化的不毛に、彼らは疎外感を感じ、絶望し、これを批判するとともに、そこから新しい価値を見出そうとした。しかし、アメリカの大衆文化はそれらをも呑み込みながら、これも商業主義の中に吸収し、ビジネス文化にしてしまうような種類のものであった。そして、そのような大衆文化の危険性が目に見えるしかたで現われてきたのが、第二次大戦後だったのであり、今日の結果だったのである。経済繁栄がかえって精神的頹廃を結果し、それがまた文明の衰退をもたらしたのである。しかも、それは、自由主義を取り入れ、経済発展を遂げた他の非ヨーロッパ諸国、例えば日本などの将来をも暗示している。

第四章 ヨーロッパビズムの終焉

—ヨーロッパの後退と世界の合一化—

1 ヨーロッパの後退

第一次大戦は何を意味したか

一八〇〇年を境にしてヨーロッパが文化的に崩落、代わりに巨大な産業技術文明を生み出し、それとともにヨーロッパ近代文明が非ヨーロッパに拡大して、非ヨーロッパがヨーロッパ化し、かくて世界中がヨーロッパ近代文明によって覆い尽くされたのが、他ならぬヨーロッパビズムの時代であった。

ところが、このヨーロッパビズムの時代の後半、つまり二十世紀においては、ヨーロッパは、その膨張の反動として、逆に、突如として縮小する運命に出会うことになった。古代ギリシアにとつてのペロポネソス戦争がそうであったように、近代ヨーロッパにとつては、第一次大戦の結果がそれであった。ちょうど、ペロポネソス戦争が、アテナイとスパルタ両国を同盟の主にして、弱小都市国家の利害がからんで起き、その結果ギリシア都市国家群は荒廃し、二度と立ち上がれなかったように、第一次大戦においては、イギリス・フランスを中心とした連合国とドイツを中心とした同盟国とが、バルカン諸国に対する利害を発火点にして戦い、そして互に消耗していった。

この第一次大戦は、大きくみれば、ヨーロッパの膨張がアジア・アフリカの隅々にまで行き渡り、もうこれ以上膨張できないという限界にきたとき起きたと言えよう。この飽和状態に達したとき、今度は、ヨーロッパ諸国同士で共喰いをする以外になかったのである。その意味では、第一次大戦は、ヨーロッパの拡大の結果であった。だが、それはまた、どの国もその力を全部出し切るまで戦う消耗戦でもあったから、ヨーロッパ諸国は互に疲弊した。それは、ヨーロッパ全体の自決行為だったのである。第一次大戦は、ヨーロッパの自壊の最終形態であったと言えることができるであろう。ヨーロッパは、文化的・社会的には、すでに十九世紀から自壊していた。そして、それは産業主義の膨張を生

み出したが、しかし、それが限界にきたとき、目にみえるしかたで自壊の形式を表現しなければならなかったのである。

ヨーロッパは、むしろ、その世界的拡散と同時に、崩壊しつつあったとも言えるであろう。ドーンソンが語っているように、ヨーロッパの膨張はまたヨーロッパからの逃亡であり、ヨーロッパ文化の外部に対する威信が最高潮に達しているときに、ヨーロッパ自体は内部闘争によって支離滅裂となりつつあったのである。第一次大戦はその結末である。その点では、第一次大戦というヨーロッパの不幸は、ヨーロッパの自業自得でもあった。それは、ほとんど運命的なものであった。もともと、それは欲望の無限の膨張に根差しており、はじめから理性を失っていたから、その拡大も狂気じみており、その最後の結果も、狂気じみた戦いになったのである。

コラールも、『ヨーロッパの略奪』の日本語版序文の中で、(略奪 (L'Épave))

「とは、単にヨーロッパ文明をそれ無縁な諸民族が採用することだけを意味するだけでなく、自己自身から縁遠くなる、疎外されることをも意味していると語って後、次のように述べている。

「ヨーロッパは、他者によって奪われると同時に、みずから自己を奪うのである。ヨーロッパは、自己自身によって自己を疎外し、その果てついに病理学的錯乱にまで達しさえしたのである。」と。

ヨーロッパは、拡散するとともに、そのことによって自己崩壊したのである。かくて、一九一八年でヨーロッパの膨張は終わりを告げる。

ヨーロッパの縮小

ヨーロッパは、このとき以来、トインビーの言うように、急激に矮小化していった。トインビーは、『試練に立つ文明』の中の「ヨーロッパの矮小化」という章で、第一次大戦前までは、ヨーロッパは誰はばかることなく世界に優勢を誇っていたが、大戦を経てヨーロッパは急にその地位が低下し、かえってアメリカやソ連、その他の非ヨーロッパ世界によって矮小化されたのだと言っている。ヨーロッパは、第一次大戦以来、世界の中心であることをやめだし、主導権を失った。確かに、ヨーロッパは世界中をヨーロッパ風の文明で覆い尽くしたが、しかし、そうし終わったとき、皮肉なことに、ヨーロッパは内部崩壊を

起こし、ヨーロッパは、ヨーロッパ化された世界の中の一地方になってしまったのである。

コラールも、『ヨーロッパの略奪』の中で、次のように述べている。

「第一次世界大戦において、ヨーロッパ外の諸民族との最初の軍事的衝突に際して、わがヨーロッパ大陸は、それら諸民族のあいだにも、自己と同様に強固な勢力が存在することを発見した。そしてヨーロッパ自身が、それら外部のものと同等の歴史的勢力のうちの一つであるにすぎない、ということを知るとともに、みずからの優越と覇権の自負が覆えされるのを知ったのである」と。

事実、第一次大戦後、第二次大戦を経て、主導権は、ヨーロッパの延長上にあるとともに同時に地理的には一種の非ヨーロッパでもある超近代国家アメリカに移り、その後、さらにソ連が抬頭してきた。相変わらず国民国家の枠から抜けだせないまま、ヨーロッパ諸国がふと気づいたとき見出したものは、アメリカとソ連という強大な非ヨーロッパ諸国に支配されている自分であった。ヨーロッパが疲れて倒れたとき、この両国が、いわば口をあけて待っていたのである。

バラクラフは、『転換期の歴史』の中の「ヨーロッパの検屍」という章の冒頭で、次のように言っている。

「一九四五年、戦雲が晴れわたったとき、身ぐるみはがれた裸の一個の死体が、戦場の隅によこたわっていた。それは、われわれが知りすぎるほどよく知っていたふるくて親しみ深いヨーロッパであった。……だから、それが塵の中に、よそおひも乱れた死体となってよこたわり、しかも二人の若々しい巨人が所持品を争ってとりあっているのを見いだしたとき、不快きわまる衝撃をうけたのである。」

そればかりでなく、特に第二次大戦後は、ヨーロッパによって植民地化されていた非ヨーロッパ諸国が、まるで屍から去っていくように独立していった。非ヨーロッパが、ヨーロッパの弱体化を見越すように、ヨーロッパの鎖から解き放たれ、自立していったのである。そして、それによって、ヨーロッパは、さらにその支配権を失っていった。しかも、この非ヨーロッパの自立は、ヨーロッパ文明を受容し、これを自己のものとするということによってであった。

それは、民族主義による反ヨーロッパ主義の表現でもあったが、しかし、同時に、ヨーロッパ的な近代国家の建設を目指すものでもあった。植民地化という形でヨーロッパ化した非ヨーロッパ諸国は、その反動として、民族主義による独立運動という形で、ヨーロッパからの自立を目指したのである。この動きは、第二次大戦後顕著に現われ、第二次大戦以後を特徴づけるものとなった。

一方、植民地化せずに積極的にヨーロッパ文明を受け容れてきたロシアや日本などは、逆にヨーロッパ諸国に反撃していった。第二次大戦における日本と第二次大戦以後のソビエト・ロシアの動きは、そのようなヨーロッパへの反撃という意味をもっていた。

その意味では、ちょうど、ライオンも、死すれば、ハイエナの餌食になるように、ヨーロッパは、非ヨーロッパに略奪されていくことによって、弱体化したと言えるであろう。別の言い方をすれば、ヨーロッパは、非ヨーロッパに拡散し、吸収されることによって、空白化していったのだとも言える。確かに、それでもなお、ヘレニズム文明同様、ヨーロッパ文明は、そういうしかたで、世界中に拡がり、世界を支配している。しかし、それは、もはやヨーロッパの没落を救うものではなかった。なるほど、コラルルなどにおいては、ヨーロッパは没落しても、ヨーロッパは全世界に満ち溢れたという考えがある。しかし、これは何の救いにもならない。ヨーロッパの拡大は、また非ヨーロッパの文化的崩壊をも生起させたからである。ヨーロッパは、いわばその先駆けだったのである。

第二次大戦は何を意味するか

そのようにみていくなら、第二次大戦は、ヨーロッパのみに限れば、第一次大戦の繰り返しであったと言える。疲弊したヨーロッパが、さらに疲弊するものであった。ただ、第一次大戦と第二次大戦の違うところは、第一次大戦がヨーロッパの自決行為であったのに対し、第二次大戦は、さらに、それに非ヨーロッパの逆襲が加わったことである。

日本は、ヨーロッパ列強に対する絶望的な戦争により、アジアを植民地化していたヨーロッパに逆襲しようとしたし、また、アメリカやソ連は、第二次大戦への参戦により、ヨーロッパに対する発言力を確固ならしめた。実際、第二

次大戦以後、アジア・アフリカはヨーロッパの支配から次々と独立していったし、また、ソ連は東欧を勢力圏に収め、アメリカとともに世界分割を行なった。どれも、ヨーロッパの矮小化をもたらすものに変わりはなかったのである。

そのように、ヨーロッパからの自立とヨーロッパへの逆襲という逆現象が起きたのは、ヨーロッパがあまりにも拡散しすぎたことの反動であった。コラー風と言えば、非ヨーロッパ諸国が、いわばヨーロッパを略奪し、逆に、ヨーロッパはその分後退をして行くという現象が起きたのである。ヨーロッパからすれば、自らが世界中に普及した思想や技術によって、逆に襲われているということになる。例えば、ガンジーなども、イギリスに留学し、近代法を学んで、本国に帰って、それをヒンデイズムの精神によって裏打ちし、逆に反イギリス運動を開始する。それは、インドの独立と近代国家建設を目指してのことであったが、ヨーロッパ特にイギリスにとっては、思わぬしつべ返しでもあったことになる。

このように、ヨーロッパビズムの視点から現代世界史の流れを眺めていくなら、特に二十世紀の趨勢は、世界中がヨーロッパ化していく中で、ヨーロッパがむしろ十九世紀以来の膨張の限界に達し、逆に後退をし、反対に、ヨーロッパを受容した非ヨーロッパが、その空白を埋めるように抬頭してきた時代であった、とすることができよう。二十世紀の現代世界史は、 \rightarrow ヨーロッパの世界化 \rightarrow と世界のヨーロッパ化 \rightarrow が急激に進展するとともに、そのために、かえってヨーロッパ自身が後退していった時代だったのである。

他方、第二次大戦は、第一次大戦と違って、イデオロギー戦争という形態をとった。つまり、自由主義と全体主義の戦いという意味をもった。しかし、両方とも、もともとヨーロッパの自壊現象として生じたものであるという点では、同じような地盤をもっている。自由主義は、産業主義とともに、古き良きヨーロッパの社会を切り崩すものであったし、ナチズムやファシズムなどの全体主義は、もともと自由主義の矛盾の極に現れた崩壊現象であった。自由主義と全体主義が相戦ったとしても、それは、家が傾いているときに、仲の悪い兄弟がさらに喧嘩をしたらようなものであった。なかでも、ナチズムは、ヨーロッパの崩壊現象の極端な表現とみてよいであろう。ここには、十八世紀末以来行なわれてきたヨーロッパの変革のあらゆる膿、民主主義を許称した国家主義、

権力主義、社会の平均化とその組織化など、崩壊現象の極端が集約されている。それは、近代の近代自身への復讐だったのである。

また、第二次大戦は、第一次大戦とともに、ヨーロッパ近代文明が進展した先端で起きた。だから、それは科学技術を使った消耗戦、物量戦という形をとった。ちようど平時に発展膨張していった技術文明の裏返しとして、これをいわば食い潰す形で現われた。ここでは、非戦闘員も含めて、すべてが消耗戦の道具とされ、大量の戦死者を生み出すことになった。これほど悲惨な戦争は、十九世紀以前には絶えてなかったことである。これをもたらしたものは、ヨーロッパの近代である。ヨーロッパ近代は、今まで礼讃されてきたほど幸福なものではない。二度の大戦は、ヨーロッパ近代文明とヨーロッパそのものの崩壊を象徴するものだったのである。

2 ヨーロッパの非ヨーロッパ化

ヨーロッパに対する非ヨーロッパの逆影響

「ヨーロッパの世界化」と「世界のヨーロッパ化」という現象は、ヨーロッパビズムの時代の目立った現象である。しかし、また、他方では、ヨーロッパの矮小化とともに、ヨーロッパが様々な形で非ヨーロッパの反撃を受け、かくて、ヨーロッパが逆に非ヨーロッパの影響を被るようになるという現象も、後期ヨーロッパビズムの現象として、見逃すことはできない。それは、ちようど、ヘレニズム時代において、ギリシア都市国家群がマケドニアやローマの影響下に立つようになったのと同じである。トインビーも、『試練に立つ文明』の中で、いまや全世界がヨーロッパの提供した一種の教育によって恩恵に浴しているが、しかしまた、ヨーロッパも、逆に、他の諸文明がヨーロッパによる世界の合一化から学びとったところの再教育を、自ら受けねばならない運命にあるという意味のことを述べている。トインビーは、ここでは、主に宗教的な逆影響のことを念頭においているようであるが、しかし、これと同じことは、もつと目先の政治的・経済的影響についても言うことができるであろう。

事実、アメリカが、すでに第一次大戦後から、疲弊したヨーロッパに代わって、ヨーロッパ経済の復興という形で、ヨーロッパに対する政治的・経済的影

響を行使し出した。トインビーも、第一次大戦後のヨーロッパへのアメリカ人の旅行客の増大や、アメリカの債権国への早変わりを例にあげて、ヨーロッパとアメリカの力の逆転について例証している。しかも、この第一次大戦後のアメリカからの債権の供与は、結局ヨーロッパの自滅のための資金にすぎなかったし、第二次大戦後のそれは、両大戦によるヨーロッパの荒廃の修復にすぎなかったとみている。アメリカ経済のヨーロッパ進出なども、そこから発展したものであり、それは、少なからぬ影響をヨーロッパに与えている。アメリカ経済は、経営の一層の機能化とシステム化を行なって、生産性をより向上させるとともに、これを武器にして、ヨーロッパ市場に進出した。ヨーロッパも、否応なしにそれに巻き込まれ、その影響のもとに立たざるをえなくなったのである。

同時にまた、第二次大戦後は、アメリカとともにソ連が抬頭してきて、その共産主義によって、東ヨーロッパばかりでなく、西ヨーロッパにも深い影響を及ぼした。この二つの国は、いずれも、ある面でヨーロッパ以上にヨーロッパ化し、ヨーロッパ近代の原理ももっていた二つの可能性を、その極端にまで推し進めていった国家だと言ってよい。

これが、逆に、まるでブーメランのように、ヨーロッパ自身に反作用となって影響を及ぼすことになったのが、両大戦後の趨勢であった。

しかも、これは、文化、社会的にも深い影響を及ぼすものであった。アメリカがヨーロッパ以上に純粹に推し進めた民主主義や、ソ連の共産主義は、単に政治的影響にとどまらず、社会的にも思想的にもヨーロッパ人に大きな影響を与えた。かつて、非ヨーロッパが、ヨーロッパの経済的・軍事的進出に伴って、その文化、思想をも受け容れねばならなかったように、今度は、ヨーロッパが、逆に、様々なしかたで、文化・社会的にも、非ヨーロッパの影響を被るようになったのである。

つまり、第二次大戦前後から、現代世界史は、ヨーロッパを受け容れることよって力をつけてきた非ヨーロッパが、逆にヨーロッパ自身に影響を及ぼすという意味で、へヨーロッパの非ヨーロッパ化」という反作用の段階に入ったのである。いわば、ヨーロッパから起きてきた近代文明の波が、非ヨーロッパの岸辺にぶつかって、逆に反射波となってヨーロッパの方へ帰ってきたのだとも

言えよう。

第二次大戦以後、ヨーロッパが西欧と東欧に分かれ、それぞれがアメリカとソ連の軍事力の影響のもとに立ち、主導権を奪われてしまったのも、ヨーロッパの非ヨーロッパ化という逆現象の中に数えることができるであろう。ヨーロッパは、これによって、米ソという非ヨーロッパの二つの強大な力を被ることを余儀なくされた。ヨーロッパは、米ソという二つの非ヨーロッパの超近代国家によって分割されてしまったのである。なるほど、ヨーロッパも、その間、それなりに更なる近代化を推し進めてはいるが、米ソの力はそれ以上であり、米ソはすでにヨーロッパよりも先を歩んでいた。

共産主義の思想なども、もとはと言えば、ヨーロッパ生まれの思想に他ならなかった。ところが、それが、ロシアという非ヨーロッパに受け容れられ、ロシア型の専制主義的共産主義に変容されて強大な力を持つに至った。そして、それは、東ヨーロッパをその支配下に取り込むということによって、逆に、ヨーロッパに攻勢をかけることになったのみか、西ヨーロッパの共産主義にも影響を及ぼすことになったのである。いわゆるユーロ・コミュニズムは、独裁主義に陥ったロシア型共産主義を、ヨーロッパの自由主義的伝統の中で消化し、変容しようとする努力であり、共産主義と自由を融和させようとするものである。これも、非ヨーロッパからのヨーロッパへの逆影響のひとつとみてよいであろう。コラルも、『ヨーロッパの略奪』の中で、ロシア型共産主義とそのヨーロッパへの影響について、こう言っている。

「(ヨーロッパ文化の)合理性は、外部の異民族の手に操縦されるや、単純化され融通の利かない頑なものとなってヨーロッパに逆流するにつれ、ヨーロッパの内部分解の過程を助長することになったのである」と。

ヨーロッパの将来 — 統一ヨーロッパは可能か

オルテガは、このようなヨーロッパの支配力の低下の原因を、ヨーロッパがいつまでも国民国家の枠にとどまっているというところにみている。そして、国家は決して固定的なものではなく、どこまでも生成発展するものであるから、ヨーロッパも国民国家の枠を破って統合に向かうべきことを説いた。確かに、人口面だけでみても、国民国家の規模は大体五千万人前後であるのに対して、

今日の超近代国家は、少なくとも一億以上の人口を抱えている。当然、ここでは、国家の組織化の度合も格段の差があるし、生産力においても大きな差が出てくる。世界史は、すでに国民国家の時代を終えて、超近代国家の時代に入っていることを告げている。国民国家としてのヨーロッパ諸国の世界支配は、二つの大戦を経て終わったのである。

ヨーロッパが超近代国家の力を排除して、再び米ソと同等の力を獲得するとともに、日本などに負けない経済競争力をつけるには、ヨーロッパは、国民国家の枠から抜け出して、それ自身で超近代国家にならなければならないであろう。今日試みられている統合ヨーロッパの形成の動きは、市場統合をテコに経済統合から政治統合まで目指しているが、それは、地位低下したヨーロッパ諸国が、ひとまとまりになって超近代国家化しようという努力である。それは、いわば、非ヨーロッパからの反射波に対するヨーロッパからの逆対応だと言えよう。

しかし、この統合ヨーロッパの形成は、古代ギリシア都市国家群の対マケドニア同盟のように、脆弱なものに終わってしまうことも十分考えられる。完全な統一ヨーロッパの形成は、おそらく、ヨーロッパ各国の多様な伝統が足枷になって、困難を極めるであろう。統一すれば、ヨーロッパ近代の伝統は壊れるし、統一しなければ、弱体化するという矛盾を、今日のヨーロッパは抱えている。何よりも、統合のためには、国家主権の制限が必要であるが、これは、各国の利益や利害がからんで、いわれるほど容易ではない。このような矛盾を抱えながら、ヨーロッパは、もしかしたら化石化していくかもしれない。

マケドニアの抬頭しつつあったとき、ギリシアでは、イソクラテスとデモステネスの対立があった。一方は、マケドニアの武力を借りてギリシアを統一すべしと主張し、他方は、マケドニアの脅威に対抗して、ギリシアは反マケドニア同盟を結んで団結すべしと主張した。この古代ギリシアで起きた事態は、今日のヨーロッパが抱えている運命でもある。トインビーも、『試練に立つ文明』の中で、ドイツ関税同盟の歴史を念頭においたナウマンの「中央ヨーロッパ」の考えを紹介し、さらに、それを推し進めた「汎ヨーロッパ」の構想について言及した上で、「統一ヨーロッパの可能性とその障害について吟味している。が、これは、なお、今日のヨーロッパにとって困難な課題として残されている。」

3 危機に立つ二十世紀の文化

ヨーロッパ文化の危機意識

第一次大戦を境にして、ヨーロッパは、政治的にも、経済的にも、文化的にも、自己崩壊を起こした。それは、すでに十九世紀の世紀末の思想家達によって予感されていたことであつたが、それが誰の目にも見える形で明からさまになつたのである。このことは、当然のことながら、ヨーロッパの心ある人々にとつては深刻な問題を投げかけた。第一次大戦後から第二次大戦の間に次々と出てきた一連の時代批判の系譜は、そのことを反映している。一九三〇年代の思想家達、ヤスパースやハイデッガー、オルテガやホイジンガ、マルセルやピカトなどは、皆同じ状況の認識に立っている。彼らは、それぞれの立場から、そろつて現代の文化的状況に対して鋭い批判を投げかけている。事実、ヨーロッパは、第一次大戦後精神的にも疲弊し、創造力を失いつつあつた。ニーチェが予言していたニヒリズムの時代、つまり、ものみな生命力を喪失していく時代が到来したのである。一九三〇年代の思想家達は、そのようなヨーロッパの精神的状況において、ヨーロッパはどう生きていったらよいかを指し示そうとした。

シュペングラーの『西洋の没落』や、トインビーの『歴史の研究』なども、第一次大戦を境にしたヨーロッパの自己崩壊の明確な自覚から出ていた。ここでは、すでにヨーロッパ中心史観は没落し、ヨーロッパ文明も他の諸文明と相対的な関係にあるものとみられ、その絶対的優位は否定されてしまつている。と同時に、古代、中世、近世と歴史は進歩してきたという進歩の歴史観も崩壊してしまつている。ヨーロッパ人の歴史観のこれほどまでに大きな転換が行なわれたのは、第一次大戦を境にしたヨーロッパの崩壊なくしてはありえなかつたであらう。ただ、しかし、第一次大戦から第二次大戦の間のヨーロッパ人は、そのように、むしろ危機を危機としてはつきり自覚することによつて、独創的なものを生み出そうとしていたのだと言ふべきかもしれない。

崩壊期の中の思想

もちろん、このようなヨーロッパの精神的崩壊にあつて、これを表現する思想は、二十世紀になつても生み出され続けていた。例えば、マルキシズムとフロイディズムは、二十世紀を導いた二大思潮であつたと言われる。

十九世紀後半に誕生したマルクス主義は、二十世紀初頭のロシア革命の成功を機にして、有力な社会思想として二十世紀前半の思潮を支配した。それは、なによりも非ヨーロッパの共産化に貢献したばかりでなく、ヒューマニズムと結びつくことによつて、ヨーロッパ先進国の知識層をも支配した。というのは、社会主義思想は、ヨーロッパでも、資本主義や国家主義に対する批判として根強く働いていたからである。実際、マルクス主義をはじめ社会主義思想は、資本主義の修正という役割を二十世紀においても果たしてきたのである。そればかりでなく、それは、歴史や社会の下部構造を重視し、世界はそれによつて動かされるという壮大な世界観をもつていたために、近代という神なき時代の疑似宗教として強力な呪縛力をもつた。

フロイトの精神分析学も、マルクス主義とともに、二十世紀を動かした大きな思想であつた。フロイディズムは、人間存在を下意識によつて支配されるものと考えた。ちょうど、マルクスが、宗教や文化や政治のいわゆる上部構造を、社会・経済の下部構造、最終的には生産力によつて支配されるものと考えたように、フロイトも、人間の意識を支配するものとしてリビドーという絶対的なものを設定した。かつてまだキリスト教の精神が生きていた時代においては、人間の魂は神によつて創造されたものと考えられていたが、ここでは、人間の魂は下意識によつて支配された機械仕掛けのものとして扱われ、人間観は全く裏返されてしまった。神なき時代においては、神に代わるべき絶対者が創造されねばならなかつたのである。マルキシズムやフロイディズムはそれを表現した。これらも、ヨーロッパの伝統的精神の崩壊のひとつの表現であつたとみることができらるであらう。

科学的真理に真理の絶対的基準をおくいわゆる科学主義も、神なき時代の思想として十九世紀以来盛んに喧伝されたが、二十世紀においても、イギリスなどを中心に、科学哲学または分析哲学という形で引き継がれていった。それは、科学的な真理、つきつめれば矛盾律に根本の原理をおき、そこから宗教的・形而上学的なもの不合理なものとして否認し、すべてを科学的真理に還元して

いく。そこでは、不合理なものを内包しながら動いていつている人間存在の生きた現実とか生の事実というものは捨象され、ただ単に論理的に矛盾のない世界だけが抽象され、その抽象化された世界でのみすべてが割り切られてしまう。これも、十九世紀以来の人間精神の抽象化、生命力の喪失のひとつの表現であったとみてよいであろう。

デューイなどを中心としてアメリカで発展したプラグマティズムも、十九世紀の功利主義の思想を引き継いで、二十世紀に優勢になった思想のうちのひとつである。これは、真理の基準を有効性におき、有効ならざるものを価値なきものとして捨象する。どこまでも日常の生活にとつて役に立つものを価値あるものとし、それ以外のものを排斥するのである。従つて、それは、言語をはじめ知識一般を道具と考え、この道具主義の立場から新しい実験主義的認識論や改良主義的倫理学を立てて、旧来の形而上学的諸観念を批判する。これは、旧来のヨーロッパ的伝統を否定して登場してきた現代の産業主義的進歩主義の思想的表現であつたと言えるであろう。

第一次大戦後世間に風靡した実存主義思想も、十九世紀のニーチェやキェルケゴールに源泉をもちながら、人間存在の限界状況を問題にしたという点で、二十世紀の精神的状況のひとつの表現であつた。ヨーロッパの伝統的な精神つまりキリスト教的世界観が崩壊し、従つて、それによつて基礎づけられていた人間存在も、その拠つて立つ基盤を失つたために、この裸になつた人間存在だけが疑問に付されることになつたのである。それは、人間存在を取り囲む外部の有機的世界がもはや失われてしまったこと、かくて現代の人間が孤独になつてしまったことを表わしている。実存主義も、伝統的精神の喪失という二十世紀の時代精神のひとつの表現だったのである。

芸術の崩壊

このような二十世紀の精神的状況は、文学や美術にも現われている。ヨーロッパの古典的な文学においては、人間が描かれていても、その描かれている人間を通して、さらに人間以上の世界が表現されていたが、十九世紀以来、二十世紀にかけて、文学の世界では、そのような人間を超える世界がもはや遠い背景に退いてしまった。それだけ文学が矮小化され、文学が小さな世界に閉じ籠

ってしまったのである。そのような形で、近代文学は古典的精神の崩壊を表現していた。

絵画においても、フォービズムやキュビズム、表現主義やシュール・リアリズムの登場は、十九世紀以来加速されてきた型の崩壊が最終段階にきたことを表わしている。これらは、古典的な世界で描かれていた調和ある外部世界がすでに崩れ去ってしまったことを象徴している。それどころか、ここでは、対象を生かす調和ある世界が失われてしまったために、対象をどこまでも分解し、変形し、変容しようとするのがなされた。絵画が、対象の破壊の可能性の実験の場になってしまったのである。ゼードゥルマイヤーの言うように、現代芸術は中心を喪失し、光を失っている。それは、なお神なき時代のひとつの表現なのである。

一九三〇年代の思想家達は、このような様々の主義主張の乱立する精神的・文化的状況を、ヨーロッパ文化の危機として捉えたのである。

非ヨーロッパの危機意識

このような現代文明の危機の自覚は、ヨーロッパの心ある思想家達によって自覚されたばかりではなく、非ヨーロッパの高貴な精神によっても自覚された。

ヨーロッパ文化が自ら崩壊していくとともに、同時にまた、それが世界中に拡散して、非ヨーロッパにも深刻な影響を及ぼしたというのが、ヨーロッパの文明史の状況であった。非ヨーロッパは、自らの伝統文化の上にヨーロッパの近代文明を受け容れざるをえなかったが、そのことは、同時に非ヨーロッパの伝統的世界の崩壊をもたらし、この文化的な危機が、非ヨーロッパの高貴な精神をして、ヨーロッパ近代文明の批判、あるいは、その超克へと向かわせたのである。ロシアのドストエフスキーや、日本における漱石や鴎外は、そのような位置に立っていた。彼らは、流入するヨーロッパ近代文明と崩壊する伝統的精神との葛藤の中で苦闘し、その苦闘の中から、あるべき本来的世界を志向したのである。

この近代ヨーロッパと非ヨーロッパとの出会いは、ひとつの文化的な危機であったが、その危機状況にあつて、それは、また、両者の融合というしかたで創造的文化をも生み出した。例えば、日本における西田哲学などは、東洋の伝統

的思想を西洋の論理を使って新しく表現し、東西を打って一丸とする新しい哲学を打ち出した。中国の胡適やインドのタゴールなども、同様な位置に立っている。二十世紀の文化的状況をひとつの視野の中に収めるには、ヨーロッパ文化の崩壊とその拡散、および非ヨーロッパのヨーロッパ化という諸局面をもつたヨーロッパの視座を開かねばならないであろう。

4 二十世紀の国際関係と近代化

第一次大戦から第二次大戦へ

十九世紀以来、ヨーロッパ諸国は、競って近代化の航海に就いた。当然、そこでは、早く近代化した「持てる国」と、遅く近代化した「持たざる国」の間に、対立と競争が起きる。植民地の争奪戦は、このヨーロッパにおける近代化競争の現われであった。そして、二十世紀初頭の第一次大戦は、このヨーロッパにおける近代化の矛盾から生じたものであった。それは、主に、近代化に先んじ、植民地争奪戦でリードしたイギリスやフランスと、近代化に遅れ、植民地争奪戦に遅れをとったドイツとの戦いだったからである。後進国には、近代化に遅れたという不利な条件からくる焦りと劣等感があるから、それが先進国との戦争という形で現われたのである。しかも、これは、同時に、そういうしかたでのヨーロッパの自己崩壊であり、没落でもあった。

それから約二十五年後に、世界中を巻き込んで起きた第二次大戦は、いわば第一次大戦の非ヨーロッパへの拡大であり、従って、これも第一次大戦と同じ原理によって起きている。近代の構造は、どこまでも自己の領分を拡大し自ら膨張していかうとするところにあったから、近代化競争も、ヨーロッパ世界だけにはとどまりえず、ヨーロッパ以外の世界にまで拡散していくことは避けることができなかつた。その結果、第二次大戦は、近代化のより進んだ「持てる国」、イギリス、フランスおよびアメリカと、近代化のより遅れた「持たざる国」、ドイツ、イタリアおよび日本との戦いとなつて生じたのである。これは、すでに近代化の矛盾が、ヨーロッパ世界にのみとどまりえず、より早く近代化つまりヨーロッパ化した非ヨーロッパ諸国にも拡がり出したことを表現している。

東西問題から南北問題へ

その意味では、第二次大戦以後約三十年続いたアメリカとソ連（ソヴィエト・ロシア）の「冷戦構造」も、同じ原理で解釈することができる。それは、近代化のより進んだ「持てる国」アメリカと、より遅れた「持たざる国」ソ連の戦いだったとみることができるからである。

ソ連は、共産革命によって、以前よりもっと速く近代化つまりヨーロッパを押し進めて行こうとしたが、その出発点においても、そのやり方においても、アメリカより遅れてしまっていた。このソ連のアメリカに対する焦りが、冷戦構造となって現われたのである。それはまず、第二次大戦終結時におけるドイツ分割や東欧の獲得から始まり、中国の共産化や朝鮮戦争やヴェトナム戦争というしかたで戦われた。こうして、世界の諸国は、米ソの二大陣営に分かれて反目し合うことになった。この戦いによって生じたドイツや朝鮮、中国やヴェトナムなど、いわゆる分断国家は、いわば「持てる国」アメリカに対する「持たざる国」ソ連の権利主張から生じたものであり、一種の形を変えた植民地争奪戦だったのである。

このように、ひとつの国民国家が、他の超近代国家の力によって、事実上二つに分割されるという現象は、第二次大戦を境にして国民国家の時代が終わりを告げ、少くとも、世界を支配する力としては、それ以上の規模をもった国家の時代に入ったことを表わしている。第二次大戦以後の冷戦構造のもうひとつの意味がここにある。

しかも、この冷い戦争のソ連にとつての大義名分は、アメリカ帝国主義の支配からすべての民族を解放するという共産主義の民族解放のイデオロギーであった。ただ、第二次大戦と違うところは、この戦いが、決して当事者同士で直接戦わずに、いつも、「代理戦争」という新しい戦争の形態で戦われたことだけである。

このようにみるなら、共産主義の資本主義に対する戦い、つまり「東西問題」も、第一次・第二次大戦同様、近代化の遅れた「持たざる国」の、それに先じた「持てる国」に対する戦いであつたとみることができるであろう。その意味では、アメリカも、そしてソ連も、以前と同じ帝国主義の戦いを繰り返したこ

とになる。

そして、しかも、ここでの目立った特徴は、もはやヨーロッパ諸国は世界史の舞台から退き、米ソという非ヨーロッパ諸国同士で勢力圏争いが行なわれたということである。ヨーロッパの退潮はぬぐうべくもなかった。ヨーロッパ諸国は、むしろ、アメリカとソ連の勢力争いの恰好の餌食にされたのである。西ヨーロッパ諸国がNATOに加盟し、東ヨーロッパ諸国がワルシャワ条約機構に加盟し、互に対立することになったのは、その最も顕著な表現である。これは、米ソという非ヨーロッパのヨーロッパへの逆襲でもあった。世界史の重心は、すでに、ヨーロッパという円のひとつの中心から、米ソという楕円の二つの中心に移動してしまっていたのである。

さらに、今日、「東西問題」以後、特に国際政治上重要課題になったきた「南北問題」も、同様に、近代化つまりヨーロッパ化のより進んだ先進国と、より遅れた後進国との矛盾から生じていることは明らかである。この問題は、第二次大戦以後、アジア・アフリカの非ヨーロッパ諸国つまり第三世界が次々と独立していったときから、すでに始まっている。バンドン会議などを通して、アジア・アフリカの非同盟国家群が登場し、その後、これらの国々は、いろいろのしかたで近代化を推し進め、先進諸国に追いつこうと努力してきた。その中で、特に先進国と後進国の格差が問題になり、このことが世界の政治情勢にとって無視できない問題になってきたのも、近代化の矛盾からであった。石油を武器としたアラブ・イスラム勢力の抬頭も、遅れて近代化してきた国の、先進諸国への形を変えた戦いであった。アラブ世界が注目を浴びたのは、アラブ諸国が、近代化つまりヨーロッパ化の過程で先進国に対抗してきたからである。かつての日本やソ連、そして中国がそうであったように、一般に、「持たざる国」は、「持てる国」をたたきながら前へ進んでいく。

その意味では、約三十年続いた中国とソ連の対立も、いわば共産圏内で生じた「南北問題」だったとも解釈することができる。つまり、中ソ対立は、同じ共産圏にありながら、近代化の進んだ「持てる国」と、近代化の遅れた「持たざる国」中国との争いだったとみることができるといえる。中国の主張する「第三世界論」「反覇権論」は、ソ連の「帝国主義論」と同じく、遅れて近代化してきた国の権利主張だったのであり、自己主張なのである。しかも、この共産圏での戦い

を、中越戦争やカンボジア問題などでみられたように、また同じインドシナ半島などを舞台にしてやろうとしたというのが、最近の事情であった。これもまた、それ以前と同様、一種の植民地争奪戦であり、いわば共産主義によるへ列強の進出であった。このように考えるなら、この共産圏内における対立は、かつて資本主義諸国間で繰り返したのだとみてよいであろう。

一九八九年に実現したいわゆる中ソ和解は、いわば、この共産国同志の覇権争いの終結宣言であった。しかも、それは、ソ連の後退のひとつの現われでもあり、中ソ両国のアジア・太平洋地域からの利益導入のための調整であった。

世界史における近代化あるいはヨーロッパ化の流れは、国家エゴの熾烈な戦いであった。近代戦争の原因を資本主義の必然的運命に求める見方があるが、この考え方は間違いである。近代の戦争は、近代化に先じた国に対する遅れた国の対立から起きるのであってみれば、近代戦争は、資本主義のみの矛盾ではなく、共産主義をも含めた近代主義全体の矛盾だと考えるべきであろう。だからこそ、共産国同士でも相争うのである。

ナショナリズムと近代化レース

さらにまた、近代になって、ナショナリズムが様々の形で出てくるが、これも近代化あるいはヨーロッパ化と深く結びついている。近代化していくためには、それまでの地方分権的なあり方から国家を統合して、中央集権国家をつくり、生産力を上げていく必要がある。そのためには、絶えず国家の同一性が求められねばならないが、このときの国家統合の大きな絆がナショナリズムである。特に、これは、近代化に遅れた国のどちらかというと前期に高揚され、しかも、それは資本主義・共産主義を問わない。実際、かつてのドイツや日本、昨今のソ連や中国などにみられたように、これは、より遅れて近代化・ヨーロッパ化を始め、これを急がねばならなかったところに多くみられる現象である。十九世紀以来の世界史は、ヨーロッパから非ヨーロッパへ、世界全体が近代化していく過程の中にあり、その過程の中で、近代化に先じた国と遅れた国とが、様々のしかたで闘争を繰り返してきた。第一次大戦から南北問題に至るまでの二十世紀の様々の国際的緊張も、このような観点から眺めれば、統一的に

理解することができるであろう。様々のイデオロギーは、この戦いの着る衣にすぎない。こうして、それぞれ遅れ先立ちはあるにしても、近代化に目醒めた国々は、まるでゴールのないレースをやっている走者のように、絶えず闘争を繰り返しながら、近代化レースを、追いついたり、追い越されたりして、どこまでも走っていく。第二集団である後進国は、第一集団である先進国に追いつき追いこすことを目標に、ただひたすら走り、第一集団は、追い越されまいと、さらに先に走っていく。それは、なお、ヨーロッパ近代文明が非ヨーロッパに拡散して、世界全体がヨーロッパ化していく（ヨーロッパ化の過程の中にある）と言えるであろう。

5 ヨーロッパピズムの中の共産主義

ヨーロッパの近代化と社会主義思想

十九世紀のヨーロッパは、自由民主主義から国民主義、資本主義から社会主義まで、多くの近代思想を生み出してきたが、十九世紀後半、ヨーロッパに登場してきた共産主義思想も、他の思想同様、ヨーロッパピズムの過程の中で捉えなおすことができるであろう。

産業革命以来、ヨーロッパの生み出した社会経済思想は、資本主義思想と共産主義思想の対立する両極に分かれていったが、これらは、いずれも、以前の有機的な社会の秩序を大変革するものであった。ヨーロッパの有機的な社会を变革したのは、はじめ、産業資本主義の方であった。マルクスの共産主義思想は、この産業資本主義の矛盾の解決として登場してきたわけだが、しかし、だからと言って、それは社会の有機性を取り戻すものではなかった。それは、その結果からも分かるように、社会を平均化し、これをより一層機械的組織にまで組み立てようとする（全体主義）になる可能性を、最初からもっていた。その意味では、共産主義思想も、社会の平均化・組織化という点で、近代化の過程の中にあつたと言ふことができる。

もしも、共産主義をこのように近代化の一方法として捉えるなら、共産主義が結局近代ヨーロッパ社会では純粋な形では実現されなかったということも、十分理解することができる。ヨーロッパは、すでに産業革命以来、資本主義に

よって近代化が推し進められていたからである。共産主義思想は、近代ヨーロッパにおいては、むしろ社会主義という形をとって、より一層の近代化つまり社会の平等化に寄与し、その後の資本主義の修正の役割を果たしながら生きのびてきたと言わなければならない。

実際、資本主義の先進国であったイギリスでは、資本主義の矛盾が露呈してくるに従って社会主義勢力が強くなっていく。だが、一八七一年以降、この運動も国家によって公認されるようになり、フェビアン協会など多くの社会民主主義的な団体が登場し、一九〇六年には労働党が成立する。これは、マルクス主義をとらず、漸進的改革によって社会主義を実現しようとするものであり、事実、それは、多くの社会改革を行なって、労働者の地位向上に寄与した。ドイツでも、一八九〇年には社会民主党が成立し、マルクス主義に基づくエルフェルト綱領が採用されたが、後、これは、ベルンシュタインの改良主義とローザ・ルクセンブルクのマルクス主義と、左右に分かれ、結果としては改良主義的方向に動いていった。フランスでは、はじめ、無政府主義の系譜をひく過激なサンジカリズムが盛んになり、一八九五年労働総同盟ができて各国に広がるが、これも第一次大戦以後急速に衰えた。一方、一八七九年には、マルクス主義に基づく社会主義労働者同盟が成立したが、後、分裂、一九〇五年に改良主義的色彩の強い統一社会党が成立している。どれも、これらの動きは、ヨーロッパ先進諸国では、社会主義思想が、資本主義の階級矛盾などの修正の働きをしたことを表わしている。

非ヨーロッパのヨーロッパ化としての共産主義

純粹の共産主義が実現したのは、逆に、非ヨーロッパの後進国、ロシアにおいてであった。そして、それは、その後、東欧、中国、朝鮮、インドシナ、キューバ、アフリカ諸国へと、まるで癌細胞のように膨張していった。それは、いわば、遅れて出てきたヨーロッパ近代主義の拡大でもあった。共産主義もまた、産業資本主義とともに、どこまでも自己の領分を拡大し、自ら膨張し、拡大していくとする共通の運命をもっていた。そのため、これもまた、ヨーロッパ世界だけにはとどまりえず、必然的にヨーロッパ以外の世界にも拡大拡散していったのである。二十世紀になって、ヨーロッパ生まれの共産主義が世界

的に膨張し、非ヨーロッパを席捲していったという現象も、ヨーロッパイズムという世界史の大きな潮流の中で捉えねばならないであろう。共産主義も、ヨーロッパ近代の非ヨーロッパへの拡散、つまり近代化の過程の中にあつたのである。逆に言えば、さきあげた非ヨーロッパ諸国は、共産化するということによって、ヨーロッパ化、つまり近代化しようとしたのだと言える。

ヨーロッパの近代は、自由主義や国民主義、資本主義や共産主義など、相対立する様々の社会思想を生み出したが、非ヨーロッパ諸国は、ヨーロッパ化するにあつて、それらのうちから、それぞれ何を選択すべきか、苦闘してきたのだとも言えよう。ヨーロッパは、単に自由民主主義だけを非ヨーロッパに輸出したのではなかったと言わねばならない。

例えば、ロシアでは、十九世紀以来、あらゆるヨーロッパの近代思想が流入し、その近代化を加速していったが、経済的には、上からの近代化策によって、最初資本主義が進展し、その進展とともに、次第に自由主義や社会主義も流布し、逆にツァー体制を揺るがすようになっていった。マルクスの共産主義思想が流入してきたのも、このロシアの近代化、つまりヨーロッパ化の潮流の中においてであつた。そして、一九一七年、レーニンによる共産革命が成功したことによって、ロシアは、共産主義による近代化の道を歩むことになつたのである。

かくて、一九一八年から一九二〇年にかけて、ロシアでは、強力な共産主義体制が敷かれ、急激な共産主義政策がとられるに至つた。例えば、中央統制による経済体制の樹立、つまり土地・工場の国有化、銀行・貿易業務の国営化、農民からの強制穀物抛出、労働者による工場管理などは、その政策の主なものであつた。これは、ロシアに残存する旧体制を暴力的に破壊し、近代化の素地をつくるのにある意味で寄与したとも言えるであろう。

ところが、この過激なやり方のために、工業生産、農業生産ともに激減し、一九二一年の飢饉では数百万の餓死者を出してしまつた。そのために、一九二一年から一九二八年には、新経済政策が立てられ、中小企業の個人経営や農民の農産物販売の自由化などが行なわれ、資本主義を一部復活することによって、経済の発展と近代化がはかられた。

この退却は、共産主義も、近代化の一方法であつたことを実証していると言

えよう。共産主義も、そのイデオロギーはともかく、目的は生産性の向上にあり、経済発展と生活水準の向上を目指すものであった。そのためには、本来の共産主義の考え方も修正され、しばしば資本主義的な方法が加味されたのである。共産主義の一部資本主義化は、すでにレーニンのころから始まっている。今日のソ連が、ゴルバチョフのペレストロイカ、グラスノスチなど自由化路線によって国内経済の立て直しを計っているのも、その成功・不成功は別に、目的は、生産性の向上と生活水準の向上、つまり近代化にある。また、中国が、今日、文化大革命路線から現代化路線へと急転換し、資本主義と市場主義を復活させ、改革開放路線をとっているのも、近代化のために他ならない。

近代化のために共産主義がしばしば修正され、資本主義化していったのは、資本主義が社会主義的政策をとって修正されていったのと同様に、世界史の大きな流れが、他ならぬ近代化にあったということを物語っている。フルシチョフが、かつて「アメリカに追いつき追いこす」ことをモットーにしたのは、すでに共産主義が、そのイデオロギーのように資本主義の後にくるものではなく、むしろ後から資本主義に追いつこうとするものであること、つまり近代化の方法であったことを表わしている。

ロシアの共産主義が、近代化のための一方策であったということは、また、スターリンの政策の中にもみられる。彼は、数次にわたる五カ年計画を通して、むしろソ連が遅れていることを強調し、ヨーロッパの近代技術を急いで習得し、農業と工業の近代化を急がねばならないことを繰り返し強調した。ここでは、すでに、共産主義は、資本主義に追いつくための思想にすぎなくなっている。だが、このことは、さきに述べたように、レーニンにすでにみられたことでもある。レーニンにおいて、ヨーロッパ由来のマルクス主義は、ロシアの近代化のイデオロギーに変質している。彼は、能率的な組織国家の形成、文化水準、物質的・生産的設備の程度などにおいて、ロシアはヨーロッパの最も遅れた国より遅れていると、革命当時すでに考えていた。だから、彼は、ヨーロッパに追いつくために、教育の普及、農業と工業の振興、行政技術と組織の整備の仕事に邁進し、生産性の向上を目指したのである。

マルクス主義の矛盾は解決される

「何故に、資本主義の最も発達したヨーロッパの諸国家に共産革命が起きずに、ロシアという非ヨーロッパの後進国に起きたのか」というのは、マルクス主義の歴史観の矛盾のひとつである。古典的なマルクス主義では、この矛盾を解くことは難しく、そのため、いささかスコラ学化したマルクス主義の研究者達は、どうにかしてこの矛盾を解決しようとして、様々の苦心をしてきたようである。しかし、このことは、ヨーロッパの観点に立つなら、なにも不思議なことではなく、なんら矛盾でもない。共産革命が、かつてのロシアばかりでなく、今日でも主に非ヨーロッパの後進国で起きているという現象は、共産主義もヨーロッパの拡大つまり非ヨーロッパのヨーロッパ化」という世界的過程のうちにあつたからである。

非ヨーロッパの後進国では、どうしても急速な近代化をしなければならぬ。この急激な改革という面だけを見るなら、暴力的に旧秩序を破壊する共産主義は一面適していた点をもつていたとも言える。また、上からの近代化を押し進めていくには、自由主義よりも、全体主義的・国家主義的な共産主義の方が、やりやすかつたということもあつたであろう。さらに共産主義の用意していた階級闘争のイデオロギーは、後進国が、先進国に搾取されているということとを理由にして、先進国に対抗していくための恰好のイデオロギーになつたという点もある。いずれにしても、共産主義は近代化の一方法としてあつたのであり、しかも、そのやり方はむしろ後進国に適していたのである。だからこそ、共産主義は、主に非ヨーロッパの後進国に受け入れられ、実現されたのである。

非ヨーロッパにおける共産主義は、ソ連や中国にみられるように、それによつて近代化を押し進めようとする運動に変質していった。共産革命による近代化は、むしろ、わが国で言えば明治維新の大改革に当たる。従つて、わが国では、それ以後の自由民権運動や大正デモクラシーなどの運動によつて、一層の近代化が必要であつたように、今日の成熟した共産国家でも、そういう自由化の動きが必要な段階にきていると言える。実際、今日のソ連や中国においては、ときに逆行することはあるが、そういう一層の近代化つまり自由化の運動が進展していくであろう。そういうしかたで、共産主義はさらに変質していくのである。それどころか、この自由化の動きは、共産主義そのものの終焉をすでに暗示しているともみることができると言える。

「本来インターナショナルであったはずの共産主義が、それに反して、現実にはナショナリズム化していくのは何故か」というのも、マルキシズムの矛盾のひとつである。しかし、これも、ヨーロッパ由来の共産主義思想を、非ヨーロッパが自分達独自のナショナリズムの基盤の上に受容し、これを同化していったとした世界史的過程の中にあつたのだと理解するなら、なんら不思議なことではない。だからこそ、ロシアの共産主義や中国の共産主義が生まれ、両者がナショナリズム的対立を引き起したりしたのである。共産主義も、ナショナリズム化することによって、近代化のエネルギーになつていったのである。あるいは、逆に、そういうふうには絶えずナショナリズムの基盤に受容されながら、同時に国際的に膨張していくのが、共産主義の独特の動きであつたと言えよう。

マルクス主義の歴史観を捨てて、ヨーロッパの流れの中で歴史の現実をありのままに理解しなおすなら、歴史観と歴史の現実とのギャップに悩む必要はない。歴史的现实を理解するには、なによりも歴史的现实そのものから出発しなければならない。歴史観も歴史の現実の中にあるからである。

ヨーロッパへの逆襲としての共産主義

一方、ソ連（ソヴィエト・ロシア）の共産主義は、それによって自ら近代化を推し進めていくと同時に、世界革命をも行なおうとした。そして、これは、第二次大戦後、東欧を勢力圏に収めたときから現実化した。特に東欧の共産化は、ソ連によるヨーロッパへの逆襲という意味をもつていた。共産主義というヨーロッパ由来の近代思想を積極的に受け容れた非ヨーロッパ・ロシアが、まさにその同じ武器でヨーロッパ諸国に対抗し、自らの勢力圏を求めて拡大したのである。

レーニンの帝国主義論によれば、資本主義が独占資本の段階に達し、この独占資本が市場を求めて海外に資本を投下しようとするところに、帝国主義は成立し、これが列強の激しい進出をもたらしたと言われる。しかし、このようなことは、資本主義ばかりでなく、共産主義についても言えるのであつて、ソ連のような高度に発達した重化学工業国の世界進出は、いわば帝国主義的段階にあたるとみてよいであろう。このソ連のいわば社会帝国主義的政策は、主に第

二次大戦以後展開された。その意味では、共産主義も、資本主義が演じたことと同じことを、遅れて演じていたのだと言うことができよう。

第二次大戦後みられた戦争の多くは、主に共産主義の進出が原因で起きている。すでにみてきたように、近代戦争は、ただ単に資本主義の矛盾からのみ起きるわけではなく、共産主義をも含めて、近代主義一般の矛盾から起きるものである。帝国主義論による現代世界史の叙述は、今日すでに破綻している。なるほど、第二次大戦までの資本主義の優勢な段階までは、ある程度帝国主義論で説明できる部分があるかもしれない。しかし、第二次大戦以後行なわれたソ連の進出や中国の進出、さらにこの両者の対立や中越戦争などは説明できない。帝国主義論によれば、共産主義はいつも平和勢力であって、共産主義国では戦争は起きないはずである。しかし、これは、すでに世界史の現実によって打ち破られている。

マルクス・レーニン主義の唱えた帝国主義論は、むしろ、社会帝国主義の進出の大義名分にすぎなかったと言うべきである。帝国主義からの人民の解放というイデオロギーは、共産主義がそういうしかたで世界中に膨張していくためのイデオロギーにすぎなかったのである。第二次大戦以後の世界史の現実を考慮に入れるなら、もはやマルクス・レーニン主義の歴史観で現実を解くことはできない。まして、今日の共産主義国にみられる急激な自由化の胎動は、むしろ、共産主義そのものの崩壊さえ暗示しており、マルクス・レーニン主義の終焉を物語っている。今日の状況は、新しい現代史観を必要としていると言えるであろう。

6 国際化と文化の混在

文化の混在と文化の画一化

ヨーロッパ近代文明が世界的に拡大するとともに、非ヨーロッパがヨーロッパ化し、ヨーロッパ諸国も非ヨーロッパ諸国もこぞって近代文明という同一の舞台に登場して、互にぶつかりあう時代、それがヨーロッパビズムの時代である。多くの国々が入り乱れて、相互に作用を及ぼす「国際化時代」は、このようにして到来した。ここでは、種々の国際会議や国際競技が催され、政治家や経済人

や学者やスポーツ競技者が絶えず世界中を動きまわり、留学生や旅行者がこと繁く往来し、多くの民族が入り乱れて人種の混淆も行なわれ、かくて、様々の文化が混在し、混合される。

この混合の最初の段階では、違った伝統をもった国家と国家の交流や競争、あるいは利害の調整の中で、かえって相互の文化の違いが意識される。インターナショナルなものを背景にして、逆にナショナルなものが意識されるのである。ところが、混合がさらに進んでいくと、互いの文化の違いは次第に薄められ、次第に一樣化され画一的なものになっていく。人々は、やがて無国籍化し、自己の拠って立つ文化的な伝統を忘れ去っていく。世界中がヨーロッパ的な近代文明で覆われる中で、様々のものが一樣化し画一化するヨーロッパの時代は、このようにして、支柱を失いアトム化した個人を大量に生産する。

ヨーロッパの時代は世界の合一化の時代であって、ここでは、諸文化がその多様性と独自性を失って空白化するが、このような合一化をもたらしたものは、巨大な近代の産業技術文明であり、工業化の巨大な力である。それは、時間と空間を無化して、画一化された文明世界をつくりあげ、その中に個人も国家も呑み込んでいく。国際連合が設立され、絶えず世界の平和と国際的相互理解の必要性が提唱される今日の様々の動きは、確かに、世界がひとつになることに向けて進んでいる現象である。しかし、それが文化の水平化・平均化をもたらさないとは誰も保証できないであろう。

創造力の喪失と学問の専門化

この時代には、学問の分野でも、比較文化論が、程度の低いものから程度の高いものまで流行する。ヨーロッパの近代文明は、近代以前の文化を壊して登場してきたものだが、しかし、そうでありながら、同時に、それはなお、ヨーロッパの伝統的文化的性格を引き継いでいる。また、非ヨーロッパも、ヨーロッパの近代文明を受け容れて近代化したとはいえ、自らの伝統的な文化の性格をなおそこに引きずってきている。比較文化論では、この残存している文化の性格が比較されるのである。この時代は、文化の混在・混合の時代であるから、各々の文化の特色が比較されるのだが、この単なる比較からは、もはや創造的なものも生み出されはしないであろう。比較文化論ばかりでなく、一般に、文

化の混在の時代には、各々の文化独自の内的な創造性は失われる。

この文化の混在の時代は、また、価値観においては多くの混乱をもたらすから、人々は、もはや何を信じて生きていけばよいのか行き惑う。かくて、この時代に世界共通の普遍性をもつものは、唯一、科学技術だけということになる。科学技術は、雑多なものが混在する世界でのわずかの共通言語なのである。十九世紀以来、科学が隆盛を極めたのは、科学がヨーロッパのキリスト教的世界から独立し、その枠組みを拭い去って独走し、万国共通のものを成立させ、提供したからである。それが、ヨーロッパの拡大とともに世界中に拡がり、世界の共通項となった。その意味では、近代の科学技術は、各文化の内的創造性が失われたところから出てきていると言わなければならない。今日の超近代的な技術とタイアップした巨大科学などは、その最もよい例である。

ヘレニズムやローマの頃にも自然科学や技術が発達したが、これらも、今日と似かよった意味をもっていたであろう。この時代も文化の混在の時代であり、人々は何を信じて生きていったらよいのか、不安な時代だったのである。ヨーロッパの時代も、科学が技術化し、技術が科学化し、両者が結びついて、巨大な物質文明をつくりあげた。文化の混在・価値観の混乱の時代には、この物質文明こそ画一的普遍性をもつ。科学技術の発達は、そういう意味と背景をもっている。

このように、各文化圏の文化が、すべてを水平化する物質文明の舞台の上で混在し、その独自の創造力を失っていく時代においては、逆に、古今東西の諸々の文化遺産が大量に蓄積され、堆積される。そして、学問は、ただ、それらの遺産の訓古注釈のみに費やされるようになる。あらゆる古典が収集され、集大成され、翻訳され、解説され、解釈され、宣伝されるが、その代わり、そこからは、もはやいかなる創造的なものも生まれてはこない。ただ、おびただしい量の文献が氾濫し、人々はその情報量に引きまわされるだけとなる。人々には実に多くの思想や文物に接することができるが、しかし、人々の精神はただ散乱するだけで、それらは何ひとつ生きた支柱にはならない。ここでは、おびただしい数の注釈家や翻訳者、解説者など、専門家が氾濫するだけで、時代が進むに従って独創的な思想家や文学者は登場しにくくなる。学問が、すでに発見された真理についての解説にのみ終始するようになるからである。こうして、

学問は、専門分化すると同時に、俗耳に入りやすいものに還元され、世俗化される。

ヘレニズム時代にも、エジプトのアレキサンドリアなど多くの学問都市で、膨大な量の古典文献が集大成され、各国の学者によって解研究がなされたが、そこからは、独創的なものはそれほど生みだされなかった。アレキサンドリアの大図書館から眺められたエジプトの落日は、遠く後の時代のローマの滅びを暗示していたかのようである。今日もまた、このヘレニズム時代と同じことがなされていると言えよう。

この時代は、言語においても、どの国でも外来語が氾濫し、母国語は類落する。文化の混在という現象は、言語においてもそういう形で現われるのである。そして、ヘレニズム時代にコイナーというギリシア語が共通語になったように、ヨーロッパの時代には、英語が共通語になり、それが画一的文化を表現し、この時代の巨大組織と符合する。

文化の創造は、偉大な個性が、文化的伝統という特殊性を通して普遍的なものを生み出すことからなされるが、この時代には、この特殊性の地盤が崩れるために、普遍性も個性も頹落するのである。

7 二十一世紀への展望

二十一世紀への展望 — 移動する世界史の重心

このようなヨーロッパの諸状況を眺めていくなら、今日の世界は、将来、どのような方向へ進んでいくと予測されるであろうか。

ヨーロッパ諸国、米ソ、日本など、第一世界、第二世界は、様々の闘争の末、すでに近代化を完了している。とすれば、二十世紀の最後の十数年から二十一世紀の初頭は、多分、アジア・アフリカ、ラテン・アメリカ諸国など第三世界の近代化の問題が、これまでよりも一層重要な問題として、つまり、世界史を動かす大きな問題として現われてくるであろう。その意味では、南北問題が重要な位置を占めてくるであろう。特に、貧困に喘ぐ南と繁栄を謳歌する北との格差是正の問題が、いろいろの形で問題となってくるであろう。人口の激増、食糧の不足と飢餓、資源問題、累積債務問題など、今日の世界がかかえている

重要問題は、どれも、この南と北の摩擦を惹き起こす引き金になりうる。

東西問題の方では、南北問題ともからんで、今まで米ソの勢力圏争いが続けられてきたが、しかし、米ソともすでにその膨張の限界に達したから、今後は、逆に、米ソの後退という現象が目立って現われてくるであろう。米ソは、戦後、世界支配を企図して、経済援助から宇宙開発、核戦略に至るまであらゆる力を出し切り、互いに鎬を削ったために、かえって国力を消耗したのだともみることがができる。今日推進されているソ連の「ペレストロイカ政策」も、なお根強く残る官僚主義的抵抗のために、アメリカが進めてきた「強いアメリカ政策」同様、十分な成功を収めることはできないであろう。

従って、自由主義圏では、アメリカが後退する分、日本やアジアの新興工業国をはじめ、第三世界の発展途上国が抬頭してくるであろう。また、共産圏においても、二十一世紀の初頭にかけて、ソ連（ソヴィエト・ロシア）が後退する分、中国が、自由化によって体制が変われば、これまで以上に大きな力をもつようになるであろう。

さらに、共産圏内での南北問題として、ソ連の後退とともに、ソ連によって支配されている諸民族共和国や他の社会主義衛星国とソ連との亀裂が、顕在化してくる時期が訪れるであろう。事実、ソ連邦からの離脱の動きは、すでに、アルメニア、アゼルバイジャン、バルト三国、白ロシア、ウクライナ、モルダビア、グルジアにみられ、ハンガリーやポーランドや東ドイツなどの衛星国の態度も注目されている。これらの動きは、かつて、ヨーロッパ諸国の植民地からアジア・アフリカ諸国が次々と独立していった動きに似ている。

逆に言えば、そのように米ソの影響力の低下が明確化したとき、東欧と西欧の歩み寄り、さらに東西ドイツや南北朝鮮、二つの中国の統一の可能性も出てくるであろう。これが、差し当たり、現段階から予想可能な二十一世紀への見通しである。

これまでの世界史をみると、時代の変遷に応じて、世界史を動かす強い力をもった民族なり、国家なり、文化圏が、地理的に移動してきたことがわかる。それを世界史の重心と言うとすれば、十九世紀という時代は、この世界史の重心を西ヨーロッパ諸国が担った時代であったと言える。西ヨーロッパ諸国は、一八〇〇年前後から、急激に近代化を推し進めるとともに、世界に進出し、誰

はばかることのない世界史的優位を確立した。十九世紀の世界史の中心は、ヨーロッパにあったのである。軍事的にも、政治的にも、経済的にも、ヨーロッパを中心にして、その力は世界に放射していた。私達が列強の進出と呼んでいたものが、それである。

しかし、二十世紀になると、第一次大戦と第二次大戦の二度の過酷な戦いによって、ヨーロッパは互いに疲弊し、急激に後退、これに代わって、アメリカからソ連が抬頭し、この二国は世界を二分するほどの力を持つに至った。この時以来、世界史の重心は、ひとつには、アメリカを中心とする大西洋へ、もうひとつは、ソ連を中心とするユーラシア大陸へと移った。

ところが、二十世紀末の今日においては、二十世紀後半四十年も続いたこの米ソ二大国による世界支配も、終わりを告げつつある。少なくとも、第二次大戦後の世界体制はすでに終焉を迎え、それとともに、世界史の重心はアジア・太平洋地域へと移動してきた。自由世界での日本やアジアの新興工業国の抬頭という一九八五年以降特に目立ってみられる現代世界史の現象は、世界史の重心が、次第に、アジア・太平洋地域へと移りつつあることを表わしている。十九世紀初めから二十世紀終わりにかけて、約二〇〇年の間に、世界史の重心はいわば地球を一回転したのである。

かくて、二十世紀の世紀末の今日の状況は、すでに、ヨーロッパの時代も終焉を迎えていると言わねばならない。かつてヘレニズム時代において、ギリシア文明の拡大に対して、カルタゴやローマがこれを受容して逆に大きな力をもつて出てきたように、二十世紀も、ヨーロッパを凌いで、初めは米ソが抬頭し、今日では、日本やアジアの新興国が抬頭してきた。ヨーロッパにおける作用と反作用の時代も、すでに完了したのである。世界は一様化し、もはや「ヨーロッパ」の枠では捉えきれない時代に入りつつある。

世界国家は可能か

このように、ヘレニズムとヨーロッパのある程度の類似性を手懸りに考えるとすれば、ヘレニズム末期にローマによる地中海世界の統一がなされたように、少なくともポスト・ヨーロッパの時期に、今日の諸国家を統合する一大世界国家がこの地球上に出来るのではないかという問題は、考慮に値する

問題であろう。

ヨーロッパは、最初、国民国家という規模において出発し、やがて、それは、第一次・第二次大戦を通して、米・ソという超近代国家主導に変わり、これが世界を分割することになった。そして、それに対抗するように、ヨーロッパ諸国も、ECを形成することによって超近代国家としての規模を備えようとしてきた。さらに、第二次大戦後のNATOやワルシャワ条約機構などの集団安全保障体制も、防衛に限ってはあつたが、すでに国民国家の枠組みを越える方向を指し示していた。今日の世界は、国民国家の時代を終えて、国家間の連合形態に入っている。とすれば、このような動きは、確かに、さらにより大きな統一国家に向けて発展していく可能性をもつものだとも言えよう。

ヨーロッパにおいて、国民国家から超近代国家へ、国家規模を加速度的に膨張させていったのは、他ならぬ産業技術文明のとめない力であつた。現在の科学技術や情報産業の進展による経済のより一層の発展の可能性を考え合わせれば、世界の諸国家の相互依存がさらに深まって、これが超近代国家よりもっと大きな規模の国家を必要とし、ついには、それが世界国家にまで成長するという可能性もないわけではない。

もちろん、世界国家が必ず形成されるという保証はなく、いくつかの国家が互に凌ぎを削つて自滅していくという可能性もないわけではない。次々と新しい国家が登場しては後退していくことが繰返され、そのうち現代文明そのものが衰微していくことも十分考えられる。いずれにしても、今後登場してくる世界国家は、どれも、巨大な産業技術文明によつて支えられた怪物国家であることには変わりはなく、帝制ローマのような空虚な国家であろうことは確実である。

世界宗教は可能か

現代文明つまりヨーロッパの文明を、ヘレニズム文明とのアナロジーで考えるなら、トインビーが期待しているように、このヨーロッパの終焉期に、ヘレニズム・ローマ文明同様、新しい世界宗教が登場してくる可能性も予測しうるかもしれない。しかし、文明の種の違いを無視して、何もかもギリシア・ローマ文明とのアナロジーで考えることは危険を伴う。ヨーロッパの

文明は巨大な産業技術文明に支えられた文明であって、ギリシア・ローマ文明とは違って、宗教的なものの否定から出発しており、徹底的に無精神的であった。

なるほど、今日、科学技術によって支配された時代であるにもかかわらず、いやそれゆえにこそ、科学技術では解けない問題が残され、人々の不安は昂じ、この不安に乗じて実に多くの新興宗教が登場してきており、必ずしも無宗教の時代とは言えない。しかし、このおびただしい数の宗教も、今日の巨大技術文明に対応して、アトム化した大衆を糾合した巨大組織になっているところをみれば、これ自身が産業技術文明のひとつの表現にすぎないとも考えられる。もちろん、遠い将来、この文明が明らかに衰退に向かうに従って、人々の不安が募り、そこから高度な宗教が登場してくることはありうる。しかし、キリスト教でさえ、古代ローマの滅亡を食い止めることができなかつたように、今日の文明も、新しい宗教によって救われることは必ずしもない。それは、わずかに、文明のもたらす精神的不安の表現として、力をもつことになるであろう。

現代文明の将来 — 危機は克服されるか

ヤスパースは、私達の文明を紀元前五〇〇年ころのいうところの枢軸時代に源泉をもつものと捉え、今日、それは近代の科学技術によって危機に面している¹⁾とみた。確かに、私達の文明は、大きくみれば、ソクラテスやイエス、仏陀や孔子によって導かれた文明であつたと言えるであろう。そして、私達の時代の危機は、いわばこの四聖時代が巨大な物質文明の世界的拡大によって終わりを告げようとしていることであろう。なぜなら、ヨーロッパ近代文明の世界的拡大によって、ギリシア文化とキリスト教精神に源泉をもつヨーロッパ文明ばかりでなく、イスラム文明やインド文明、中国文明、および、それらの影響下において発展した諸文明も、この中に組み入れられ崩壊していくからである。数千年も続いた古代エジプト文明がヘレニズム文明に同化して安楽死したように、近代以前から築き上げられてきた諸文明も、ヨーロッパ由来の近代文明に同化して安楽死するかもしれない。しかも、この文明の解体は、このヨーロッパ文明に内在する内的な頹廢から起きてくることだけは間違いない。

なるほど、今日の時代は西洋と東洋の出会いの時代であり、危機に面している。西洋近代文明は東洋の伝統文化によって乗り越えられねばならないという考えもあるから、それは、今日、東洋の文化をも呑み込んで、世界の諸文化を一色に塗り潰し、あらゆるものを低い方へと平均化し、混沌の中へと混合しようとしている。このような単なる混淆を諸文化の創造的融合と見誤ってはならないであろう。東洋文化への回帰の叫びも、単なる文化の混在と衝突というヨーロッパの文明の一特徴がもたらしたものにすぎないともみることができる。ニッチェはヨーロッパのニヒリズムの到来を予言したが、ニヒリズムの波は単にヨーロッパのみとどまるものではなく、世界中に押し寄せ、あらゆる文明を呑み込んでいるのである。

第一章 ヨーロッパビズムの時代

- 1 Toynbee, *Civilization on Trial*, Oxford U.P. 1949. ch. II. I. (『試練に立つ文明』現代教養文庫 社会思想社 一九七三年 三〇〇～三〇二頁)
- 2 Toynbee, *A Study of History*, Oxford U.P. 1979. Vol. VIII. IX. (『歴史の研究』「歴史の研究」刊行会 一九六九年 第十六卷 第十七卷)
- 3 夏目漱石「現代日本の開化」『漱石全集』第二十一卷 岩波書店 一九七九年 四四～四五頁
- 4 Jaspers, *Die geistige Situation der Zeit*, Sammlung Göschen Bd. 1000. 1953. S. 9. f. (『現代の精神的状況』ヤスパース選集28 理想社 一九七八年 一六～一七頁)

第二章 ヨーロッパの拡大

- 1 アンリ・ピレンヌは、このイスラムの脅威が、ヨーロッパ世界をひとつの世界として成立させるための大きな要素になったことを指摘した。ヨーロッパの成立を考える場合、ローマとの接触とともに、このことには十分注意を払わねばならない。(ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ』創文社 一九七二年 参照。)
- 2 ユングは、このヨーロッパのキリスト教の深層にある異教的要素に注目し、ヨーロッパ精神の源流を明らかにした。彼によれば、ヨーロッパ中世の精神は、このヨーロッパ精神の低層流に支えられていた。そして、このときのみ、ヨーロッパ精神はそのバランスを保ちうると考えた。(ユング『心理学と錬金術』人文書院 一九七六年 参照。)
- 3 Kuhn, *The Copernican Revolution*, Harvard U.P. 1957. p. 127. ff. (『コペルニクス革命』紀伊国屋書店 一九七六年 一八一頁以下)
- 4 Toynbee, *op. cit.*, Vol. VIII. p. 97. ff. (前掲書 一九七一年 第十六卷)

- 一七二頁～一八六頁) Vol. IX. (第十八卷)
- 5 Toybee, *An Historian's Approach to Religion*, Oxford U.P. 1956. ch. 13, 14 (『歴史家の宗教観』社会思想社 一九六七年 第十三～十四章)
- 6 山本新『トインビーと文明論の争点』勁草書房 一九七一年 二六一～二六三頁
- 7 同書 二八九頁
- 8 Weber M., *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, II. I., *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I.* J. C. B. Mohr, 1986. (『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』「世界の名著」—ウエーバー 中央公論社 一九七五年 第二章 一)
- 9 Toybee, *Civilization on Trial*, Oxford U.P. 1949. pp. 165-6. (『試練に立つ文明』現代教養文庫 社会思想社 一九七三年 二二九～二三〇頁)
- 10 今までに興亡盛衰を繰り返した幾多の文明は、その解体期に、多くの場合、その文化が宗教的規制から離脱して、無神論的・感覚的なものに変化し、感傷的・懐疑的な気分が覆われた。その意味では、ヨーロッパ文明も、十九世紀前後から、ソローキンという「感覚型文化」、バグビーのいう「大衆文化の時代」に突入したと言えるであろう。
- 11 ヘーゲルの哲学体系は、例えば『エンチクロペデー』などに示されている。その第一部「論理学」は、いわば神の創造以前の世界計画の理念を明らかにし、第二部「自然哲学」と第三部「精神哲学」は、神の自己否定としての世界創造の営みを記述し、この「精神哲学」の第三篇「絶対精神」において、世界は再び自己を否定して神に帰っている。ヘーゲル哲学の体系は、このように、キリスト教的世界観の哲学的表現だったのである。
- 12 Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, Ph. B. Felix Meiner S. 17. (『法の哲学』「世界の名著」—ヘーゲル 中央公論社 一九七八年 一七四頁)
- 13 Lowith, *Weltgeschichte und Heilsgeschehen*, Kohlhammer 1953. S. 38. f. (『世界史と救済史』神奈川大学人文学会 一九七八年 四六頁以

下)

- 14 Nietzsche, Der Wille zur Macht, Kröners Taschenausgabe Bd. 78, 1964. S. 3. (『権力への意志』「世界の大思想」—ニーチエ 河出書房新社 一九七三年 九頁)
- 15 Kierkegaard, Eine literarische Anzeige, Gesammelte Werke 17, Eugen Diederichs 1954, S. 72. ff. (『現代の批判』「世界の名著」—キェルケゴール 中央公論社 一九七二年 三七一頁以下)
- 16 Burchardt, Briefe, Sammlung Dieterich Bd. 6, S. 175.
- 17 Toynbee, A Study of History, Oxford U.P. 1979, Vol. VIII, p. 198. (『歴史の研究』「歴史の研究」刊行会 一九七一年 第十六卷 三四九〜三五〇頁)
- 18 和辻哲郎は、この十五・十六世紀のヨーロッパの拡大のもたらした世界的視園が、世界的な意味での「近世」を成立させたとみている。これにならえば、ヨーロッパでは、十九世紀のヨーロッパの拡大のもたらした世界的視園が、世界的な意味での「現代」を成立させたと言えるであろう。(和辻哲郎『鎖国』「和辻哲郎全集」第十五卷 岩波書店 一九七八年 参照。)
- 19 コラール『ヨーロッパの略奪』未来社 一九六二年 三六頁
- 20 同書 三一頁
- 21 Toynbee, op. cit. Vol. VIII, p. 542. ff. (前掲書 第十七卷 三四〇頁以下)
- 22 古代ギリシアで生まれたオリンピックの競技も、ギリシア文化の地中海世界への拡散に伴って、地中海各地に移しかえられていった。このヘレニズム時代にみられた現象と、今考察している「ヨーロッパ」の時代の現象は、バラレるな関係にある。ヨーロッパの時代でも、近代オリンピックはまずヨーロッパでつくられ、その後、ヨーロッパ近代文明の世界的拡散とともに、非ヨーロッパ各地に拡まっていき、オリンピックそのもの他、それに類した国際競技が、今日世界各地で催されている。このような些細な現象にも、ヘレニズムとヨーロッパの併行関係が読み取れる。

23 Weber M., Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, J. C. B. Mo

- hr 1986, S. I. f. (『宗教社会学論選』 みすず書房 一九八六年 序言)
24 ユラール 前掲書 六八頁

第三章 非ヨーロッパのヨーロッパ化

- 1 Toynbee, op. cit. Vol. VIII. p. 198. (前掲書 第十六卷 三四九頁)
- 2 ibid. p. 236, p. 237. (同書 四一三頁 四一五頁)
- 3 ヘルシヤエフ 『ロシア思想史』 創文社 一九五八年 一三頁〜一八頁
- 4 山本新 前掲書 二八六頁
- 5 Toynbee, op. cit. Vol. VIII. p. 209, ff. (前掲書 三六六頁以下)
- 6 ibid. p. 233. (同書 四〇九〜四一〇頁)
- 7 Toynbee, Civilization on Trial, Oxford U. P. 1949. p. 79, f. (『試練に立つ文明』現代教養文庫 社会思想社 一九七三年 一〇八頁〜一一〇頁)
- 8 Toynbee, A Study of History, Oxford U. P. 1979. Vol. VIII. p. 201. 『歴史の研究』「歴史の研究」刊行会 一九七一年 第十六卷 三三三〜三五四頁)
- 9 ibid. p. 602. (同書 第十七卷 四四四頁)
- 10 ibid. p. 558, ff. (同書 三六八頁以下)
- 11 Toynbee, op. cit. Vol. V p. 155. (前掲書 一九六九年 第九卷 一三七頁)
- 12 Toynbee, op. cit. Vol. VIII. pp. 603-4. (『歴史の研究』「歴史の研究」刊行会一九七一年 第十七卷 四四七〜四四八頁)
- 13 西田幾多郎 『働くものから見るものへ』「西田幾多郎全集」第四卷 一九七八年 岩波書店 六頁
- 14 タゴール 「東洋と西洋」 「タゴール著作集」第八卷 第三文明社 一九八一年 一八四頁
- 15 夏目漱石 『それから』 「漱石全集」第八卷 岩波書店 一九七九年 一〇五頁

- 16 Barraclough, An Introduction to contemporary History, Pelican Book s, 一九六四年 p.153. (『現代史序説』 岩波書店 一九七六年 一八〇頁)
- 17 アリフィン・ベイ 『インドネシアのこころ』 文遊社 一九八三年 一九〇～二二二頁
- 18 アリフィン・ベイ 『近代化とイスラーム』 文遊社 一九八一年 七二～七四頁

第四章 ヨーロッパビズムの終焉

- 1 Dawson, Understanding Europe, Sheed&Ward, 1952, pp.41-2. (『ヨーロッパをどう理解するか』南雲堂 一九七八年 五五頁)
- 2 コラール 前掲書 一〇～一一頁
- 3 Toynbee, Civilization on Trial, Oxford U.P. 1949, pp.102-3. (『鈍練に立つ文明』現代教養文庫 社会思想社 一九七三年 一四六～一四七頁)
- 4 コラール 前掲書 五一～五二頁
- 5 Barraclough, History in a Changing World, Greenwood Press 1984, p. 154. (『転換期の歴史』 社会思想社 一九七八年 二四二～二四三頁)
- 6 Toynbee, op. cit. pp.83-4. (前掲書 一一三頁)
- 7 Ibid. p.112. (同書 一五七頁)
- 8 コラール 前掲書 七二頁
- 9 オルテガ 『大衆の反逆』第一部14 「世界の名著」—マンハイム・オルテガ 中央公論社 一九七四年 五〇四頁以下
- 10 Toynbee, op. cit. p.121. (前掲書 一六七頁)
- 11 Jaspers, Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, Piper 1952. (『歴史の起源と目標』ヤスバース選集9 理想社 一九七八年)

あとがき

ここ十数年来の著者の主な関心は、〈現代とは一体どのような時代なのか〉という問題に集中されていた。現代の内実にわたる吟味は、すでに、前著『欲望の体制―現代文明の行方』の中で記述しておいたが、この問題への関心は、それに続く『われわれにとつて国家とは何か』の底流にもあった。さらに、この期間の評論を集めた『近代主義を超えて』の中でも、具体的問題に触れながら、この問題を敷衍した。

『ヨーロッパの時代とその終焉』と題する本書もこの関心事の延長上にあり、これは、主に〈現代〉という現象の歴史的面からの記述である。つまり、本書は、文化史・精神的観点をも加味しながら、〈現代〉を世界史の大きな枠の中で捉え、現代世界史がどのように推移してきたか、その図式を提示することによって、私達が立っている〈現代〉の位置を解明しようとするものである。

本書の意図を要約するなら、十九・二十世紀の現代世界史を〈ヨーロッパの時代〉として捉え、十九世紀をその前半に、二十世紀をその後半に位置づけて、その意味を理解することになる。ヨーロッパ近代文明の拡大という作用と非ヨーロッパからの反作用の歴史構造を〈ヨーロッパと名付けるとすれば、十九世紀はその作用、二十世紀はその反作用の時代だったからである。

現代世界史を〈ヨーロッパの時代〉という概念で大づかみにし、現代史の諸達成をその枠組の中で位置づけてみようという発想を得たのは、もうすでに二十年前にも遡ることができる。トインビーの『試練に立つ文明』を読んでいて、彼の現代史への認識が、私の関心からみても、すぐれて啓発的であったことからであった。従って、私は、この『ヨーロッパの時代とその終焉』の叙述の中で、かなりの程度、『歴史の研究』をはじめ、トインビーのいくつかの著書を参照した。もちろん、トインビーの考えをすべて首肯してのことではないが、細かな点での批判や不満点についてはなるべく触れずに、共通する点や参考になる点のみを引用するにとどめた。コラールやバラクラフについても同様であ

る。ただ、私の叙述は、どちらかというと、非ヨーロッパ、特にアジアの視点からの記述が重きをなしている。

本書の記述の中で採用した歴史的事実は、全く常識程度のものにすぎず、何ひとつ新しい事実を付け加えたことはない。ここでの主眼は、歴史的事実のへ叙述にあるのではなく、むしろそのへ解釈にある。従って、歴史的記述に関しては素描の域を出ず、本当はもっと詳しく記述する必要もあろう。しかし、あまりにも詳しく記述すると、膨大なものになってしまえばかりか、かえって全体の図式がみえなくなってしまう恐れもあったため、あえて詳しい事実は割愛したというのが実情である。

最近では、わが国でも、第二次大戦後の歴史研究の成果として、世界各国・各文化圏の歴史の事実研究も相当進展し、その方面の業績も上がりつつある。これらの専門的研究は多くの利益を生み、学問の発展に大きく寄与することであろう。しかし、また、そのような専門研究・事実研究ばかりでなく、積み上げられた事実研究を相互比較し、そこに現われた共通のパターンを取り出し、全体として、現代世界史がどのような過程とどのような力学をもって動いてきたのかを、ひとつの像にまとめあげるといふ仕事もまた必要なのではないか。そのためには、一種の歴史哲学、あるいは、歴史を大きな視野から把握する独自の観点も必要になってくるであろう。

著者の記述しようとしたことは、そのような観点のもとになされたことであり、そこには、事実追究上の多くの欠点や不満がみられるが、なお、現代の世界史的全体像を抽出することにおいては、ある程度の意味をもつものと思われる。

へ現代とはどのような時代なのかという問題に関心をもつ人々、また、二十世紀の諸達成を反省し、来たるべき二十一世紀を見据えてみようとする人々のために、何ほどかの参考にもなれば幸いである。

平成元年（一九八九年）初夏

著者